

53-189



1200501265486



始



20-43

佝僂病及骨軟化症患者調查書

53
189

53-189



狗樓病及骨軟化症患者調査書

大正
10 12.13
内交



凡 例

一 本書ハ本縣ニ於ケル尙僂病及軟化症調査顛末ノ概要ヲ知ルト共ニ將來ニ於ル該病ノ研究及豫防救治ノ施設實行ニ關シ照顧ノ資料ニ供センカタメ之ヲ編成セリ

一 故ニ内務省ノ囑託ヲ受ケテ該病ヲ調査セル木下、林兩醫學博士ノ報告及實地ニ就テ研究セラレタル緒方、田代、三輪三醫學博士公表ノ報告又ハ論文中將來照顧ノ必要アリト認ムル部分ヲ抄出シ併セテ本書ノ附録トナセリ

一 緒方、田代、三輪三醫學博士ノ所說拔萃ニ就テハ或ハ前後ノ脈絡ヲ缺キ或ハ該報告又ハ論文中ノ要部ヲ省ケル等ノ嫌ヒアルヘシト雖モ素ト將來ニ於ケル照顧ニ便センタメ必要ト感セル部分ヲ抄出シタルモノナレハ己ムヲ得ス璧玉ノ稜屑ヲ拾フコト、ナセリ

編 者 誌

佝僂病及骨軟化症調查書目次

佝僂病及骨軟化症調查顛末

佝僂病調查報告

本病發見ノ由來

病狀一般

收容患者症狀、療法及經過

診斷

地勢及風土

住居

飲食物

職業

勞働

婚姻

分娩

小兒營養物

爾他習慣

有病村ニ於ケル五六ノ疾病

意見

一本病ノ本態、誘因、原因

一本病發生ノ年期

一療法

住居

飲食

內服藥

外療法

一豫後

豫防法

住居

被服

飲食物

習慣

附錄

小兒ニ對スル注意
成年婦人ニ對スル注意

奇病調査報告

- 第一 本病ノ發生
- 第二 本病ト地勢トノ關係
- 第三 病地ニ於ケル一般衛生狀態
- 第四 佝僂病及骨軟化症ノ原因
- 第五 兩病ノ豫防法

骨軟化症調査報

骨軟化病佝僂病患者町村及年齡別表

富山縣氷見郡及石川縣羽咋郡ニ發生セル奇病

調査第二報拔萃 (三輪醫學博士)

(第十一回日本小兒科學會所演)

原因的關係
救治策

富山縣下ニ於ケル所謂奇病ニ就テ (田代醫學博士)

(東京醫學會九月例會ニ於テ所演)

富山縣奇病論拔萃 (緒方醫學博士)

第六章 該病ノ豫防法

第七章 該病ノ治療法

尙儂病及骨軟化症調査顛末

昨三十九年四月中旬灸點ヲ業トスル一婦人偶々縣下氷見郡
氷見町ニ來リ自ラ如何ナル難病ト雖モ秘傳ノ灸術ヲ以テ能
ク平癒セシムヘシト揚言シ灸點ヲ爲シツ、アリシカ忽チニ
シテ同地方ノ人心ヲ動カシ其評判嘖々トシテ郡内に到ル處ニ
響應シタルヨリ疾病ニ惱メル老若ノ來ツテ治ヲ請フ者陸續
踵ヲ接セリ此等患者中全郡ノ山間ニ僻在スル碁石村、熊無村
邊ヨリ來ル者ノ中ニハ或ハ龜胸或ハ馬背或ハ關節隆起シ或
ハ四肢屈曲スル等種々ナル畸形ヲ呈セル者甚ダ多カリシヨ
リ同町ノ醫師百谷義一ハ其疾患ニ就キ深ク疑ヲ抱キ全年五
月中旬第九師團附陸軍一等軍醫增田弘ガ徵兵醫官トシテ全
町ニ出張セルニ際シ語ルニ這ノ事ヲ以テシタルニ全軍醫ハ

等是畸形患者ノ多數ヲ診察シタル結果該病ハ所謂英吉利病
即チ佝僂病ナラントノ判定ヲ下セリ

氷見警察署長警部芝山武ハ此ノ事ヲ聞キコレガ報告ヲ提出
シタルニ依リ直チニ警察顧問醫々學士杉邨廉ヲ實地檢診ノ
爲メ同地方ニ派遣シタルニ全醫學士ハ熊無村四百九十九戸
二千六百二十三人ニ對シ健康診斷ヲ行ヒ疑似患者六十余人
ヲ發見シ綿密診查ノ結果該畸形患者ハ全ク「ラヒチス」(佝僂病)
ニ罹レルモノ(内一名ノ産褥性骨軟化症ト認ムル者アリ)ト斷
定復命セリ於是本官ハ一面内務大臣ヘ報告スルト共ニ東京
京都兩大學ニモ通報シ且ツ全地ニ出張シテ碁石村、熊無村等
ノ患家及患者ヲ視察シタルニ患者ノ數ハ意外ニ多ク且ツ其
狀態酸鼻ニ堪ヘサルモノアルヲ見ルヤ速ニ之ガ救療ヲ講ズ

ルノ要ヲ認メ試ニ全郡ニ於ケル該病患者ノ數ヲ取調ヘタル
ニ實ニ四百余名ニ達セリ(第一表)加之縣下ニ於ケル他郡市ニ
於テモ該病患者多數ヲ發見スルニ至リ(第二表)救療ノ愈々必
要ニシテ益々急務ナルヲ感シタルモ奈何セン本邦ニ於テハ
從來該病ハ絶無又ハ稀有ナリトシ學者實際家ノ之ニ對シテ
研究ヲ爲セル者甚ダ稀ナルノミナラス泰西ニ於テモ猶ホ未
タ其原因療法等發見セラレサルヲ以テ之カ救療ヲ講スルハ
該病ニ關スル調査研究ヲ遂ケタル後ナラサルヘカラス於是
先ツ其調査ヲ爲スカタメ全年六月七日縣參事會ヲ召集シ三
十九年度衛生費追加豫算トシテ調査費金二千百三十四圓ヲ
議決シ(第三表)左ノ人々ヲ調査委員トナセリ

市立富山病院院長醫學士 杉 邨 廉

市立富山病院 副院長醫學士 小野 謙吉

富山縣立農學校長農學士 舟木 文次郎

市立富山病院 醫員 谷野 亮二

富山縣警察醫 長谷川 恒次

全 國田 武嗣

富山縣技手 福島 猪太郎

而シテ此ノ調査ハ費用ノ關係上先ツ向フ六ヶ月間ヲ期限トシ其第一着手トシテ若干ノ患者ヲ一定ノ場所ニ收容スルノ要ヲ認メ杉邨委員ヲシテ患者ノ選定ヲ爲サシメタルニ全委員ハ熊無村ニ於ケル多數患者中重症者中等症者輕症者各三名ヲ選定シタルニヨリ全月十二日之ヲ市立富山病院ニ收容シ其後又五名ヲ増シ合計十四名トナシ該患者ニ就キ病理及

臨床上ノ研究ヲ重ヌルト共ニ杉邨、小野兩委員ノ處方ニ成レル藥劑ヲ收容患者以外ノ全郡内患者三百余名ニ投ジ以テ其効力ヲ試ム(其成績第四表ノ如シル)ノ外各委員、并ニ第四部長事務官堀口助治、氷見郡長松本於菟及芝山氷見警察署長等ヲシテ有病地ニ於ケル穀菜其他ノ飲食物、地質、水質、地勢、氣候、出生、死亡、風俗、慣習及一般ノ衛生狀態等各般ノ調査ヲ爲サシメル來營々事ニ從ヒタリ斯クテ全年十二月調査期限將ニ盡キントスルニ至レルモ猶ホ繼續進行スルニアラスンハ要領ヲ得ル能ハサルニヨリ全月ノ通常縣會ニ向ツテ更ニ追加豫算トシテ調査費金一千五十七圓ヲ要求シテ議決ヲ得(第五表)本年三月三十一日迄繼續調査ニ努メタル結果左ニ掲載スル調査報告ヲ得ルニ至レリ(他ノ委員及吏員ノ報告ハ之ヲ畧ス)

本病ノ調査ニ關シ特ニ一言セサルヘカラサルモノアリ即チ
曩キニ本官ヨリ内務大臣ヘ報告シ又東京京都兩大學ヘ通報
シタル結果内務省ヨリハ醫學博士本下正中全林春雄兩氏ヲ
東京大學ヨリハ醫學博士田代義徳全三輪信太郎兩氏ヲ京都
大學ヨリハ醫學士本莊謙三郎氏ヲ縣下ニ派遣セラレ又本病
患者發見ノ報四方ニ傳ハルヤ富山縣下ニ奇病發生セリト稱
シ各地ノ新聞爭ツテ之ヲ掲載スルニ至リタルヨリ大阪市緒
方病院長醫學博士緒方正清氏大阪府立病院外科醫長醫學博
士木村孝藏氏京都大學教授醫學博士藤波鑑氏ノ諸家ハ交自
身有病地ニ出張シ或ハ醫員ヲ派遣セラレ何レモ數日乃至數
十日ニ亘リ實地調査ヲ爲シ各其研究ノ資料トシテ數名乃至
十數名宛ノ患者ヲ伴ヒ還リ(第六表)調査研究ヲ遂ケラレタリ

是等諸家カ該病研究ノ爲メニ盡瘁セラレタル効果トシテ各
其收容セラレタル患者カ輕快若クハ全癒スルニ至レルノミ
ナラス其發表セラレタル研究ノ結果ハ本縣ニ於ケル調査事
業ノ爲メ優良ナル餘師トシテ多大ナル裨益ヲ得タルハ多數
該患者ノ爲メニ又本縣全体ノ爲ニ深ク感謝ノ意ヲ表スルト
コロナリ

以上記述スル如ク本病ニ對スル調査研究ハ敢テ盡サ、ルニ
アラスト雖モ其唯一ノ眞因ハ猶ホ未ダ捕捉スル能ハス之ヲ
他日ノ研究ニ委セサルヘカラス然リト雖モ委員其他ノ熱心
ト前記諸家ノ多大ナル盡力トニヨリ大体ニ於テ適當ト信ス
ハキ治療法及豫防法ニ對スル實驗上ノ標的ヲ得タルヲ以テ
今後適宜ノ時機ニ於テ縣下有病地ニ對シ相當施設計畫ヲ爲

第二表

氷見郡以外各郡市尙儂病骨軟化症患者表

郡川新中						郡川新上				
西加積村	東三郷村	相ノ木村	柿澤村	弓庄村	南加積村	計	大澤野村	船嶺村	太廣田村	町村
一	一	二	三	二	一		二	二	二	
	中加積村	高野村	音杉村	宮川村	大岩村		福澤村	大山村	下夕村	町村
	二	一	一	二	四	一八	三	五	四	患者數

郡水射					郡負婦		郡川新下			
西條村	小杉町	櫛田村	牧野守	二上村	計	百塚村	細入村	計	松倉村	上中島村
一三	二	一二	八	二〇		一	四		三	四
横田村	守山村	淺井村	水戸田村	片口村		長岡村	大長谷村			下中島村
二	三三	三	三	五	七	一	一	一一		四
計										計
一〇一										二〇

第三表

第一次衛生費追加豫算

調査委員手當	費目	決議額	郡波礪西		郡波礪東		
			廣瀬村	若林村	梅檀野村	中田町	
六〇〇、〇〇〇	調査委員手當	六〇〇、〇〇〇	三	二	一	七	一
富山市	計	三	二	一	七	一	四
合計	計	一八七	三	四	二	一	一五

第四表

尙癩病及骨軟化症患者治療成績表

合計	無効	輕快	佳良	全治	重症		中等		輕症	
					男	女	男	女	男	女
二〇	六	六	二	六	八二	二二	一九	六六	五二	一三九
六	四〇	二一	一〇	二一	六六	三三	六	三四	一一	三八
六	二	三	四	六	三七	二二	三	七	一〇	三三
二	一〇	二	二	二	二二	九	四	二	九	三五
六	二	一〇	二	二	三三	二二	六	二	二二	三三
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
二、一三四、〇〇〇	四五〇、〇〇〇	九七二、〇〇〇	一一二、〇〇〇	一一二、〇〇〇	二、一三四、〇〇〇	四五〇、〇〇〇	九七二、〇〇〇	一一二、〇〇〇	一一二、〇〇〇	二、一三四、〇〇〇

第五表

第二次衛生費追加豫算

費目	決議額
患者治療費	五六七、〇〇〇
雜費	三五〇、〇〇〇
調查委員旅費	一四〇、〇〇〇
計	一、〇五七、〇〇〇

第六表

縣外被収容患者表

収容場所	男	女	計
東京帝國醫科大學附屬病院	二	五	七
京都帝國醫科大學附屬病院	四	八	一二

大阪府立病院	京都府立病院	大阪緒方病院	合計
二	一	九	一二
七	二	三八	四七
九	三	四七	五九

尙僂病調査報告

昨明治三十九年五月中旬本縣氷見郡熊無村ニ於テ一種ノ骨關節病多數發見セラレ小員等ノ一人杉邨廉ハ同月下旬同地ニ出張診查ノ結果該疾病ノ多數ハ「ラヒチス」尙僂病一名英吉利病(但當日發見セシ一名ノ重症患者ハ所謂產褥性骨軟化症ト認ムヘキモノ)ナルコトヲ診定報告シタリ次イデ六月十五日ニ至リ小員等ハ新ニ尙僂病調査ノ囑託ヲ領シ爾來數回氷見郡熊無村外數村ニ出張シ多數ノ患者ヲ診查シ且ツ土地氣候住居飲食物起臥ノ狀況ヨリ職業婚姻分娩育兒等生活上ノ習慣ニ至ル迄一般衛生上ニ影響スヘキ諸件ヲ精究シ又一方ニハ男女十四名ノ患者ヲ市立富山病院ニ収容スルノ認許ヲ得テ直接患者ノ身體ニ就キ其症狀原因療法等ノ研究ヲ爲ス事九ヶ月余今左ニ其概要ヲ記述シ併セテ小員等ガ卑見ヲ附シ以テ調査ノ結果ヲ報告セントス但シ更ニ詳細ナル學理的研究ニ至リテハ前途尙多數ノ時日ヲ要スヘキモノアリ特ニ茲ニ之ヲ諒セラレン事ヲ請フ

本病發見ノ由來

村人ノ語ル所ニ據リ其大要ヲ略述センニ本病ハ今ヲ去ル事十年前頃ヨリ氷見郡熊無村、碁石村ヲ主トシ余川村、八代村、女良村、十二町村、其他諸村ニ發見セラレ最初ハ醫師ニ依リ關節痠痛質斯ト診斷セラレ療養ヲ加フルモ輕快ニ赴カズ病狀ハ漸次増進シテ數年間不治ノ狀態ヲ以テ病床ニ呻吟スルモノアリ又幸ニ多少ノ異形ヲ存シテ苦惱ヲ免カル、モノアリト雖モ往々不幸ノ歲月ヲ經過シテ鬼籍ニ登ルモノアルヲ以テ村民ハ之ヲ惡病又ハ業病ト見做シ遂ニ之ヲ放置シ來リシガ患者ハ年ヲ逐フテ増加シ四五年來ハ頓ニ其著シキヲ致セルヲ以テ漸ク省ミル所アリ其原因ヲ氷見郡内ニ於ケル十年來ノ新事實ニ歸シテ馬鈴薯ノ食用又ハ食醋ノ使用又ハ水田ニ石油ノ撒布等ヲ數フルニ至レリ然ルニ昨年初夏ノ候偶々巧妙ナル灸点師アリ氷見町ニ於テ難症灸治ノ需ニ應スルヲ聞クヤ多數ノ本病患者ハ氷見町ニ來集シ治ヲ乞ハントセルニ際シ折柄同地方巡回ノ陸軍徵兵検査官ノ注目スル所トナリ次デ氷見警察署長ノ報告トナレリ之ヲ今回本病發見ノ由來ト爲ス

症狀一般

小員等ガ氷見郡ニ於テ診定セシ惣患者ニ就キテ臨床的概見ヲ爲スニ其病狀種々ナリトイヘル自ラ同一系或ハ類似系ニ屬スルモノタルヲ知ル其最幼者ハ生後五十日ニシテ最年長者ハ三十一年トス其間各年齡期ニ於テ連續的ニ患者ヲ有ストイヘル年齡幼少ナルニ於テハ男女ノ數殆相伯仲シ十二三歳以上ニ至レバ殆ト女子ニ限ラル、ガ如シ其症狀ハ幼者即七八歳以下ニ於テハ全然泰西學者ノ所謂ラヒチス(佝僂病)ノ症狀ヲ有ス即營養不良、体格薄弱、頭蓋ノ角狀、頸門ノ閉鎖遲延、頭蓋癆、齒牙不良、聲門痙攣、頸腺腫脹、鎖骨ノ彎曲、鷄胸(又ハ鳩胸)脊柱ノ彎曲、肋骨端ノ念珠狀腫起、骨盤變形、慢性氣管支炎、腹部膨滿、慢性胃腸加答兒、發汗傾向、四肢骨端ノ膨腫、同部多少ノ壓痛及四肢骨就中下肢骨ノ彎曲ニシテO字脚、X字脚、k字脚、8字脚等ヲ呈シ起立歩行共ニ不能ナルモノアリ又ハ僅カニ鷺行狀歩行ヲ爲スモノアリ患者ノ年齡ト病症ノ輕重トニ從ヒ上記症候悉皆ヲ具備スルモノアリ或ハ其二三又ハ四五ヲ有スルモノアリ又十七八歳以上ノ患者ニ於テハ所謂骨軟化症ノ症狀ヲ

有ス即營養不良、骨盤骨、胸骨、肋骨稀レニ四肢骨、脊柱、頭骨ニ於ケル激甚ナル壓痛、四肢筋肉ノ緊縮、痙攣、胸、脊柱及胸骨ノ彎曲、骨盤ノ變形、下肢及骨盤ノ歩行時疼痛、鵞行狀歩行起立又ハ歩行不能、慢性氣管支炎(時トシテハ肺癆)ノ併發等ヲ呈シ其症狀ハ患者ニ依リテ輕重ノ差アリトイヘル殊ニ妊娠中又ハ產褥中ニ發シタルモノニ著明ナリトス而シテ八九歳ヨリ十六七歳ニ至ル迄ノモノニ於テハ全然佝僂病的症狀ヲ有スルモノナリトイヘル又一方ニ佝僂病的症狀ヲ呈スルト共ニ骨軟化症的症狀ヲ有スルモノモアリ詳言スレハ前者ノ多クシテ後者ノ少キアリ後者ノ比較的著明ニシテ前者ノ輕微ナルモノモアリテ一定セストイヘル概シテ年齡少キ方佝僂病的症狀優リ年齡多キニ從ヒ骨軟化症的症狀ノ加ハルガ如シ今左ニ熊無村、十二町村、碁石村、女良村、磯邊村ニ於テ診定シタル患者ニ就キ症狀ノ輕重、年齡、男女別及其數等ヲ記載シテ一例ト爲ス

第一表

一、熊無村(大字熊無、論田ノ二村及中村ノ一人)

病 否 別	本病患者	疑似又ハ他病	合 計

患者數	六二	八	七〇
生活程度別	一 等	二 等	三 等
患者數	〇	五	五七
病症程度別	重 症	中 等 症	輕 症
患者數	一四	二二	二七
年 齡 別	一歳—五歳	六歳—十歳	十一歳—十五歳
患者數	一三(六七)	一八(一五三)	二六(二六一)
患者數	五	一六	二一
合 計	六二	六二	一二四

二、十二町村

病 否 別	本病患者	疑似又ハ他病	合 計
患者數	一四	六	二〇
生活程度別	一 等	二 等	三 等
患者數	〇	四	一〇
病症程度別	重 症	中 等 症	輕 症
患者數	〇	四	一〇
合 計	一四	六	二〇

患者數	四	七	三	一四	六
年齡別	一歲—五歲	六歲—十歲	十一歲—十五歲	十六歲—廿歲	合計
患者(女)數	(一)	(三)	(六)	(四)	(一四)
患者(男)數	(一)	(二)	(五)	(三)	(一四)

三、磯邊村

病否別	本病患者	疑似患者	合計
患者數	六	二	八
病症程度別	重症	中等症	輕症
患者(女)數	(二)	(三)	(六)
患者(男)數	(〇)	(一)	(一)
合計	(二)	(四)	(六)

四、女良村

病否別	本病患者	疑似患者	合計
患者數	四八	五	六三
病症程度別	重症	中等症	輕症
患者(女)數	(九)	(二)	(一一)
患者(男)數	(四)	(三)	(七)
合計	(一三)	(五)	(一八)

五、碁石村

病否別	本病患者	疑似患者	合計
患者數	四四	五	四九
病症程度別	重症	中等症	輕症
患者(女)數	(五)	(一)	(六)
患者(男)數	(一)	(三)	(四)
合計	(六)	(四)	(一〇)

餘ハ省略ス

收容患者症狀、療法、及經過

小員等ハ調査ノ爲メ最初前記熊無、論田兩村患者中ヨリ特ニ輕症、中等症、重症ノ三種患者各三名宛ヲ撰擇シテ市立富山病院ニ收容シ明治三十九年六月十五日ヨリ本年三月三十一日迄日々直接其身体ニ就キ診査ヲ遂ケ治療ヲ加エテ其經過ヲ實驗セリ但シ最初收容シタル九名ノ外ニ臨時他ノ數患者ヲモ交換收容シタルヲ以テ前後合計十四名トナレリ即左ノ如シ

一、丸又ヨシノ (十一歳、女)

父ハ三十四歳母ハ三十一歳共ニ健存ス父方ノ祖父ハ神經症ニテ祖母ハ赤痢ニテ死ス母方ノ祖父ハ七十二歳祖母ハ五十二歳各健全兄弟ハ生後直チニ死亡又ハ死産ノ爲メ一人モ生存セズ

病症ハ十歳ノ春ヨリ兩下肢ノ足關節痛ヲ以テ初マリ次イテ兩膝關節痛ヲ感スルニ至リ脚形稍異常ヲ認メ入院時ハX字脚ヲ呈シ腕關節部(前膊骨下端)ハ膨大セリ全身ノ發育尋常ナリ

母乳ニテ養育セラレ六歳頃迄授乳セラレタリト云フ

明治三十九年六月十五日入院鹽酸里母那逐百布聖劑投與七月三日ヨリ沃度加里劑ヲ與フ同月十一日ヨリ沃加劑ノ外ニ乳酸鐵、磷酸石灰、炭酸麻虞涅矢亞、格魯兒那篤留謨、白糖ノ合劑己下便宜之ヲ「英利散」ト名クヲ與フ疼痛消散シ步行活潑トナリ入院時五貫四百五十目ノ体量ハ五貫七百七十目ニ達シ九月十日退院セリ在院中内服藥ノ外七月十二日ヨリ退院時迄引續キ食鹽加沃度温浴中全身マツサージヲ施行セリ

二、大門スヰ (十七歳、女)

父ハ十年前痲瘋ニテ死シ母ハ五十二歳健存ス父方ノ祖父ハ五十八歳ノ頃祖母ハ六十歳ノ頃各老衰ニテ死ス母方ノ祖父母ニ就キテハ不詳ナリ

病症ハ十二歳ノ頃兩側膝關節痛ヲ以テ初マリ入院時骨盤及肩胛部ニ疼痛ヲ訴フ腕關節部骨端膨大シX字脚ヲ呈ス全身發育普通ナリ

六歳ノ頃迄母乳ニテ哺育セラレ

明治三十九年六月十五日入院鹽酸里母那逐百布聖劑ヲ與フ七月三日沃加劑投與同月十一日沃加劑ノ外ニ英利散ヲ與フ疼痛消散シ入院時九貫四百五十目ノ体重ハ九貫九百五十目ニ達シ九月十日退院セリ内服藥ノ傍七月十二日ヨリ退院時迄引續キ食鹽加沃度温浴中全身マツサージヲ施行セリ

三、坂 勇松 (四歳、男)

前出大門スヰノ姉ノ兒ナリ父母共ニ健存父方ノ祖父ハ八十歳頃老衰ニテ祖母ハ三十年前病症不詳死ス母方ノ祖父母前出、勇松ハ一兄二姉ヲ有ス一兄ハ健全ナレモ二姉ハ目下同疾患ニ罹レリ後出ノ坂カズエ、坂ミノ是レナリ

母乳充分ニシテ目下尙授乳セラレ

營養中等程度ノ貧血ヲ認ム頭髮密生シ眼光鋭ク頭形ハ異狀ヲ認メス齒牙ノ發生モ普通ナリ全身亦疼痛ノ箇所無シ故ニ病症ノ發生期ハ全ク不注意ニ經過セルガ如シ前膊骨下端膨大シ肋骨念珠ヲ觸知ス中等度ノ腹滿ヲ呈シ肝臟ハ觸ルレモ大ナラス〇字脚ヲ呈シ歩行稍蹣跚兩膝蓋腱反射亢進ス左右拇指急速ニ伸展シ難キコトアリ微音ヲ發シ暫時ニシテ伸ブト云フ

入院時沃度鐵舍利別ヲ與ヘ後英利散ト摺里母百布聖劑ヲ投與ス爾來營養増進歩行活潑トナル在院中食摺加沃度溫浴中全身マツサージヲ施行セリ

四、坂 ミノ (十歳、女)

前出勇松ノ姉ナリ母乳充分ニシテ五歳迄授乳サレタリ六歳ノ頃ヨリ歩行時兩脚疲勞シ易ク七歳ノ頃ヨリ兩側膝關節部ニ疼痛ヲ覺エ爾後兩下肢一般ニ自覺的ニモ他覺的ニモ疼痛ヲ感スルニ至レリ入院時骨盤胸部上下肢ニ疼痛ヲ訴フ夜間盜汗多シト云フ

營養不良貧血、頭髮密生眼光鋭シ頭顱橫徑一三仙迷縱徑一七仙迷ヲ算シ中顱ヲ呈

ス齒牙發育普通兩側鎖骨骨端膨大シ中央屈曲ス著シキ肋骨念珠ヲ認メ鳩胸ヲ呈シ胸廓兩側ハ腋下部分ニ於テ狹小ス右背上部ハ後方ニ隆起シ左胸下部ハ反對ニ前方ニ膨出ス右側腎部ハ後方ニ突出シ脊柱ハS字形ニ彎曲セリ上膊ハ鈎狀ニ彎曲スレモ前膊ノ彎曲ハ輕度ナリ四肢骨骨端各膨大腹部著シク膨滿蛙腹狀ス兩側膝蓋腱反射亢進〇字脚ヲ呈シ起立歩行共ニ不能ナリ右肺ニ小水泡音ヲ聽取シ兩側頸腺腫脹ス肝脾ハ觸知シ難シ

明治三十九年六月十五日入院、食慾不振、摺里母百布聖劑ヲ投與ス同月十四日咳嗽ニ苦シム前摺里母劑中ニ杏仁水ヲ加ヘ「カンフル」劑ヲ兼用セシム同月十五日下痢アリ「カンフル」散藥中ニ次硝酸蒼鉛ヲ加フ七月七日前二劑ノ外ニ肝油ヲ試ム同月十一日肝油及英利散ノ二劑ヲ投與ス同月二十五日下痢アリ肝油ヲ止メ硝酸蒼劑ヲ與フ食慾不振十月一日摺里母百布聖劑及英利散ニ變方ス十一月二十七日下痢腹滿ヲ訴フ前二劑ノ外ニ炭酸グアヤコール「硝蒼」散劑ヲ與フ十二月十四日ニ至リ再ビ食慾不振ヲ訴フ乃チ前散劑中ニ「タカヂアスターゼ」ヲ配伍シ食慾稍回復ス明治四十年一月二十三日英利散、摺里母百布聖劑ノ他ニ肝油乳劑ヲ與フ二月八日咳嗽

頭痛ヲ發スルヲ以テ前蓋里母劑中ニ杏仁水ヲ加エ臨時安知必林ノ散劑ヲ與エ十日ヨリ前英利散、前蓋里母劑、前肝油劑ヲ服用セシム爾來症狀大差無ク營養漸次佳良ニ赴キ脊柱ノ後彎側彎及四肢ノ彎曲モ著シク回復シ歩行自由運動活潑トナリ入院時ノ体重三貫目ハ増量シテ三貫七百五十目トナリ四月一日殆ト全治ノ狀態ヲ以テ退院セリ在院中七月十二日ヨリ食鹽加沃度温浴中全身「マツサージ」ヲ、十二月二十二日ヨリ浴後全身伸展法「サイル氏裝置」ヲ用ユヲ施行セリ

五、坂カズエ（十三歳、女）

前記「ミノ」ノ姉ニシテ四歳ノ頃迄充分ナル母乳ヲ以テ哺育セラレタリ七歳ヨリ就學シ尋常科三年迄通學セシガ九歳ノ時學校ニテ椅子ヨリ突キ落サレ初メテ全身ニ疼痛ヲ感スルニ至レリ疼痛ハ醫治ニ依リ一時輕快シ十一歳ノ十月頃ヨリ再發シ病勢漸次増悪シ十二歳ノ一月頃ヨリ歩行全ク不能トナリ四肢ニ畸形ヲ呈スルニ至レリト云フ

營養不良貧血頭髮發育尋常頭顱橫徑一四仙迷縱徑一七仙迷ヲ算シ寧ロ短顱ヲ呈ス眼光銳ク齒牙ノ發育普通ナリ兩鎖骨彎曲シ肋骨念珠著明胸廓兩側ハ腋下部分於テ狹小シ鳩胸ヲ呈ス又脊柱ノ彎曲アリ上下肢骨骨端各膨大シ下肢ハ前彎ヲ呈シ膝蓋腱反射ハ兩側共亢進セリ腹部膨滿、右肺ニ小水泡音ヲ聽取シ兩頸腺腫脹ス〇字脚ヲ呈シ起立歩行共ニ不能ナリ肝脾ハ觸知シ難シ

明治三十九年六月十五日入院主トシテ食慾ノ不振ヲ訴フ蓋里母百布聖ノ水劑ヲ投與シ七月七日ニ至リ食慾稍振フ肝油ヲ試ミ同月十一日更ニ英利散ヲ與フ同十六日鱗肝油ニ變方セシモ服用ニ堪エズ即チ肝油劑ヲ止メ同月十九日重曹ノ散劑ト英利散トヲ與フ十月十五日ニ至リ少シク肋膜炎ノ徵候ヲ呈ス英利散ノ他ニ沃加劑ヲ兼用セシム十二月四日發熱ノ兆アリ臨時安知必林劑ヲ投與ス食慾ハ常ニ不振ニ傾キ易シ十二月十一日英利散沃加劑ノ外ニ「タカ、チアスターゼ」ノ散劑ヲ投與セリ爾來症狀漸次輕快營養愈増進脊柱ノ後彎及側彎ハ全ク消退シ四肢ノ彎曲モ著シク回復シ歩行自由トナリ入院時ノ体重三貫五百目ハ増加シテ四貫四百目トナリ本年四月一日殆ト全治ノ狀態ヲ以テ退院セリ在院中服藥ト共ニ七月十二日ヨリ食鹽加沃度温浴中全身「マツサージ」ヲ施シ又十月二十二日ヨリ浴後全身伸展法ヲ行ヒタリ

六、堂田伊作 (五歳男)

十四

父母共ニ健、父ノ妹ハ全身殊ニ兩脚疼痛ヲ患ヒ目下加療中ナリ父方ノ祖父ハ六十歳ノ頃老衰ニテ死シ祖母ハ全身ニ疼痛ヲ訴エ歩行不能ナリシガ六十二歳ニテ死ス母方ノ祖父ハ咽喉部ノ腫物ノ爲メニ斃レ祖母ハ五十七歳ニテ健存スト云フ伊作ハ四人ノ兄弟姉妹ヲ有シ二人ハ死去シ一人ハ尙僂病類似症ニテ斃レ一人ハ現ニ尙僂病患者トシテ入院加療中ナリ

母乳ハ不足ニテ一ケ年後ハ薯、米粥ノ混用ニテ養育セラレタリ
全身中毫モ疼痛ノ箇所ヲ訴エズ二歳ニ達スルモ歩行シ能ハザリシヲ以テ醫治ヲ加ヘ歩行ヲ始メシモ再發シ昨年ノ春頃ヨリ復タ歩行スルニ至レリ
營養尋常頭髮發育普通頭顱横徑一三仙迷縱徑一八仙迷ヲ算シ長顱ヲ呈ス齒牙異狀無シ肋骨念珠ヲ認ムルモ胸廓ハ只腋下ニ於テ少シク狹小セルノミ膝蓋骨僅ニ外轉シ輕度ノX字脚ヲ呈ス膝蓋腱反射尋常腹部稍膨滿ス

明治三十九年六月十五日入院沃鉄舍水劑ヲ與フ九月十日沃鉄舍劑ヲ止メ英利散ヲ試ム食慾不振同月十二日ヨリ鹽里母百布聖劑ヲ兼用セシム明治四十年一月二

十二日ヨリ別ニ肝油乳劑ヲ與フ在院中前記浴治法及全身マツサージヲ施行シ營養漸次佳良ニ赴キ体量亦増加セリ

七、堂田ハツ (七歳女)

前記伊作ノ姉ニシテ最初ヨリ疼痛ヲ訴エス二歳ノ頃迄歩行セス三歳ノ頃ニ至リ歩行ヲ始メシモ寒期ニ入レハ再ヒ歩行不能トナリ昨年ノ春期ヨリ再ヒ歩行シ得ルニ至レリ

母乳ハ不足ニシテコンデンスミルク、餡、麵包、米粉等ノ混用ニテ養育セラレタリ
營養尋常毛髮ノ發育良眼光銳シ頭顱横徑一三仙迷縱徑一七仙迷ヲ算シ中顱ヲ呈ス齒牙發育不良上顎只四個ヲ殘存ス下顎ニハ二個ヲ欠ク齒列一般ニ不正ナリ鎖骨ハ稍前彎シ肋骨念珠ヲ觸レ胸廓兩側腋下ニ於テ狹小シ鳩胸ヲ呈ス脊柱稍後彎シ前膊骨端膨大シ下腿骨ハ不正ニ前彎シ膝蓋骨外轉シX字脚ト云ハンヨリ事ロV字脚ヲ呈ス膝蓋腱反射尋常跛行スレモ困難ナラサルガ如シ腹部膨滿シ肝臟ハ乳線ニ於テ肋骨弓外四仙迷ニ達スルモ脾臟ハ觸知シ難シ盜汗ヲ訴フ頸腺腫脹シ氣管支加答兒アリ

十五

明治三十九年六月十五日入院、鹽里母百布聖劑ヲ投與ス下痢ノ傾キアルガ爲メ次日ヨリ硝蒼散劑ヲ兼用セシム七月十一日英利散、鱗肝油ヲ試ム下痢甚シ鱗肝油ヲ中止ス下痢輕快ス七月三十一日再ヒ鱗肝油ヲ投ス九月八日再ビ下痢ヲ催ス更ニ硝蒼散劑ヲ兼用セシム体重減退ノ微アリシヲ以テ二十六日ヨリ前硝蒼劑中ニ「タカヂアスターゼ」ヲ加フ十一月二十二日英利散、鱗肝油、鹽里母百布聖劑ノ三劑ニ變方ス十二月二十五日稍腹滿ヲ訴フ鹽里母劑ヲ止メ炭酸「グアヤコール」ノ散劑ヲ與フ明治四十年一月二十三日ヨリ炭酸「グアヤコール」劑ヲ止メ「クレオソート」丸劑ニ變方シ同月二十八日ヨリ英利散、鱗肝油ノ二劑ト爲ス爾來症狀漸次佳良ニ赴キ下肢ノ彎曲モ大ニ回復シ入院時体重二貫八百目ハ増量シテ三貫六百目トナリ四月一日退院セリ在院中ハ七月十二日ヨリ前記浴治法及「マツサージ」ヲ併用シ明治四十年三月五日全身麻醉ノ下ニ右脛骨ニ「オステオトミー」切骨術ヲ施行シ創面ハ十日間ニテ治癒シ副木又ハ「キアス」綑帶ヲ施シタルニ退院時ニハ彎曲ノ度大ニ減少セリ

八、山崎ハツ (十五歳、女)

父ハ五十三歳ニテ健、母ハ四十九歳今年二月ヨリ腰痛ヲ訴フ父方ノ祖父ハ五十四歳ノトキ虎列刺病ニテ死シ祖母ハ老衰ニテ斃ル母方ノ祖父ハ八十余歳ニテ老衰ヲ以テ逝キ祖母ニ就キテハ詳ナラズ妹一人、三歳全身疼痛ヲ訴エザルモ脚ハ彎曲セリト云フ母乳ハ充分ニテ養育セラレ一ケ年許通學シタルカ十歳ノ頃ヨリ右足關節部ニ疼痛ヲ發シ現今ハ兩側膝關節及骨盤ニ疼痛ヲ感シ辛フシテ步行シ得ルモ腰伸ビズト云フ

營養尋常毛髮發育良、眼光銳シ上顎齒一個脫、下顎齒二個脫、頭顱橫徑一三仙、縱徑一七仙、迷ヲ算シ中顱ヲ呈ス肋骨念珠アリ上下肢ノ骨端膨大ス腹部少ク膨滿スレトモ肝脾ハ觸レス膝蓋腱反射普通、O字脚ヲ呈シ盜汗アリ

明治三十九年六月十五日入院、鹽里母百布聖劑ヲ投與ス七月十一日沃鐵舍劑ニ變方ス八月二十四日ヨリ下痢ス更ニ硝蒼ノ散劑ヲ與フ十一月九日疼痛去リ步行活潑兩下肢殆ト眞直トナリ復タO字脚狀ヲ留メズ營養佳良ニ赴キ入院時ノ体重六貫五百五十目ハ七貫六百目ニ増加シテ退院セリ但シ在院中前記浴治法及浴中マツサージヲ併用セリ

九、山本フジ (十七歳、女)

十八

父ハ四十歳母ハ三十九歳共ニ健在、父ノ弟ハ肺患ニテ父方ノ祖父ハ六十一歳ノ頃中風症ニテ祖母ハ三十八歳ノ頃コレラニテ母方ノ祖父ハ四十五歳ノ頃赤痢病ニテ祖母ハ七十一歳ノ頃中風症ニテ死セリ患者ハ同胞四人ヲ有シ二人ハ健全、二人ハ同病ニテ仆ル

母乳ハ充分ニシテ三歳迄授乳セラレタリ小學尋常科ヲ卒業セリ

十二才ノ春頃ヨリ歩行ニ際シ兩脚ノ疲勞ヲ覺エ次イテ膝關節部ニ疼痛ヲ訴フルニ至ル疼痛ハ漸次全下肢ニ及ヒ後、胸部腰部肩胛部、肘關節部ニ達シ而カモ激甚ニシテ運動スル事ヲ得ズ終日胡坐セルノミ

營養不良ニシテ貧血ヲ呈シ毛髮ノ發育良頭顱横徑一五仙迷縱徑二〇仙迷ヲ算シ中顱ヲ呈ス顔面ノ發育ハ年齢ニ應スルモ軀幹ノ發育ハ頗ル障害セララル、ガ如シ顱部ハ始ト胸部ニ接近シテ侏儒ノ觀アリ胸骨ハ突出シ胸廓ハ腋下ニ於テ狭小シ脊柱後彎肋骨念珠著明ナリ兩脚彎曲シテ〇字狀ヲ呈シ膝蓋腱反射普通腹部少シク膨滿シ肝脾ハ觸知セス盜汗アリ氣管支加答兒ヲ併發ス

明治三十九年七月十三日入院沃鐵舍水劑ヲ與フ咳嗽甚シ七月三十一日規那煎杏仁水劑ヲ兼用セシム心悸亢進苦悶ノ狀アリシヲ以テ八月二十三日更ニ「カンフル」ノ散劑ヲ臨時兼用セシム翌二十四日規那煎劑中ニ「ストロファンツス」丁幾ヲ加ヘタリ咳嗽减退セシヲ以テ同月二十七日ヨリ沃鐵舍劑「カンフル」劑ノ二劑ノミト爲ス十月十二日沃加水劑及塩里母百布聖保美加丁幾ノ水劑ニ變方セリ十二月十一日稍腹滿ノ訴アリシヲ以テ「グレオソート」丸劑ヲ臨時兼用セシメ明治四十年一月三十一日ヨリ前塩里母水劑及沃加水劑ヲ持續ス爾來症狀益々輕快シ營養佳良トナリ全身ノ疼痛全ク消散シ脊柱ノ彎曲ハ更ニ痕跡ダモ留メス兩下肢ハ殆ト眞直トナリ亦〇字脚ノ狀ヲ認メサルニ至リ入院時ノ体量八貫三百十目ハ九貫八百四十目トナリ全治退院セリ但シ在院中七月十三日ヨリ前記浴治法及浴中全身マッサージヲ併用セリ

十、山本フサノ (十二歳、女)

前掲「フジ」ノ妹ニシテ六歳ノ春頃ヨリ兩膝關節痛ヲ發シ八歳ヨリ歩行シ得ザルニ至レリ現今頭部ヲ除キ全身一般ニ激甚ナル骨痛及筋痛ヲ訴エ終日胡坐スルノミ

十九

ニシテ起立歩行共全ク不能ナリ

四歳ノ春迄母乳ニテ養育セラレタリ

營養頗不良貧血甚シ毛髮ノ發育ハ良上顎齒二個脫下顎齒一個脫頭顱橫柱一四仙
迷縱徑一八仙迷ヲ算シ中顱ヲ呈ス鎖骨ハ彎曲シ鳩胸ヲ呈シ肋骨念珠著明ナリ右
背後方ニ隆起シ脊柱ハ後彎兼側彎ヲ呈シ上下肢骨々端ハ膨大シ兩上膊ハ外彎シ
兩下肢亦弓形ニ外前方ニ彎曲ス膝蓋髓反射普通腹部膨滿ス肝脾ハ觸知シ難シ頸
腺腫脹シ右肺處々ニ水泡音ヲ聽取シ常ニ發汗シ易シ

明治三十九年七月十三日入院沃鐵舍水劑ヲ投與ス數日ヲ經ルモ諸症輕快ノ徵ナ
キヲ以テ鱗肝油ニ變方シ持續服用セシム食慾不振ヲ訴フ七月二十六日鱗肝油ヲ
止メ鹽里母百布聖劑ヲ與フ少シク發熱ノ徵アリシヲ以テ臨時安知必林「カンフル」
ノ散劑ヲ兼用セシム全身疼痛殆ト消散シ食慾回復セシヲ以テ八月三十日ニ至リ
再ビ鱗肝油ヲ投與セリ發熱漸次減退ス九月二十六日ニ至リ英利散ト鱗肝油ノ二
劑ヲ投與セシニ再ビ食慾不振ヲ來タシ且ツ多少腹滿ヲ訴フルヲ以テ更ニ「タカヂ
アスターゼ」炭酸グアヤコール重曹ノ散劑ヲ與ヘ明治四十年一月二十三日ニ至リ

「クレオソート」丸ニ變方シ咳嗽ヲ發スルニヨリ一月三十一日吐根浸杏仁水ノ水劑
ヲ投シ英利散及鱗肝油ノ二劑ハ持續セリ爾來營養益々佳良トナリ四肢及脊柱ノ
彎曲モ漸次伸展シ未タ充分ニ直立スルコト能ハサルモ獨立歩行ニ妨無キニ至レ
リ入院時三貫五百目ノ体重ハ増加シテ四貫四百八十目トナリ本年四月一日ヲ以
テ退院セリ在院中ハ前記浴治法及浴中マツサージ并ニ浴後全身伸展法ヲ施行セ
リ

十一、山本ソヨ (三歳、女)

前記「フサノ」妹ナリ三歳ノ春頃ヨリ歩行スルコトヲ得ズ
母乳充分今尙授乳セラル

營養不良前顱門膨開シ頭形横ニ廣ク前額ハ扁平ニシテ後頭部毛髮ノ發生不良ナ
リ上顎齒ハ四個ニシテ下顎齒ハ二個アルノミ胸部疼痛ヲ訴エ肋骨念珠著明ナリ
脊柱ハ腰部ニ於テ少シク後彎シ前膊骨端膨腫シ下腿ハ彎曲ス膝蓋髓反射亢進セ
ス腹部膨滿スレドモ肝脾ハ觸知シ難シ氣管支加答兒アリ盜汗ヲ發ス

明治三十九年七月二十四日ヨリ入院沃鐵舍劑ヲ投與ス十月七日ヨリ英利散ニ變

方シ同月九日ヨリ咳嗽甚シキヲ以テ遠志浸杏仁水劑ヲ與フ明治四十年一月二十五日ヨリ英利散及ヒ鹽里母杏仁水ノ水劑ニ變方ス爾來營養追々増進脊柱後彎モ著シク減却シ爾他諸症狀總テ輕快ニ赴キ二月六日退院セリ在院中ハ浴治法及浴中マツサージヲ併用スルコト前者ノ如シ

十二、山本嘉四郎（八歳男）

父ハ三十九歳母ハ三十四歳父方ノ祖父ハ七十二歳同祖母ハ六十五歳母方ノ祖母年齢不詳何レモ皆健存ス弟一人アリ異狀ナシ

母乳乏シク三歳迄授乳セラレ時々コンデンスマルクヲ混用セリト云フ

四歳ヨリ歩行異狀ヲ來タセシモ疼痛無ク近時迄通學セリ營養不良ニシテ貧血ヲ呈ス眼光鋭ク毛髮ノ發育良齒牙普通ナリ頭顱横徑一四仙迷縱徑一九仙迷ヲ算シ長顱ヲ呈ス胸廓ハ腋下ニ於テ兩側狹小シ鳩胸ヲ呈ス肋骨念珠明ナルモ四肢骨端ノ膨大ハ著シカラス下腿ハ彎曲シ膝蓋骨ハ外轉シX字脚ヲ呈シ膝蓋腱反射亢進セリ輕度ノ腹滿アレドモ肝脾ハ觸知シ難シ頸腺腫脹シ氣管支加答兒アリ

明治三十九年六月十五日入院食慾不振ヲ訴フ鹽里母百布聖ノ水劑ヲ投與シ食慾

稍振フ七月六日肝油ヲ服用セシム同月十一日更ニ英利散ヲ與フ九月十一日下痢ヲ催セシヲ以テ硝蒼散劑ヲ兼用セシム腹滿ヲ訴フ十二月二十五日硝蒼劑ノ中ニ炭酸₂グアヤコールヲ配伍ス食慾稍減退ノ兆アリシヲ以テ明治四十年一月二十三日硝蒼劑ヲ廢シクレオソート₂瓦ニ變方シ英利散及肝油ハ持續セリ同月二十九日食慾回復シタルヲ以テ英利散、肝油ノ二劑ノミトセリ爾來諸症漸次輕快ニ赴キ入院時四貫六十目ノ体重ハ増量シテ四貫五百四十目トナリ退院ス在院中七月六日ヨリ浴治法及浴中マツサージヲ併用スル事前者ノ如シ

十三、瀬戸政右衛門（九歳男）

父母健在父方ノ祖父ハ脚ノ外傷ニテ斃レ祖母ハ全身疼痛症ニテ死ス母方ノ祖父ハ六十余歳健、祖母ハ肺患ニテ逝ク

同胞二人アリ一人ハ十二歳ノ姉ニシテ外傷後脚ニ疼痛ヲ患フ一人ハ三歳ノ弟ニシテ歩調惡シク疼痛ヲ訴フ

母乳充分ニシテ四歳迄授乳セラレ三歳ノ頃ヨリ脚疲癆シ易ク漸々奇形ヲ呈シ遂ニ歩行不能トナレリ

營養不良貧血ヲ呈ス毛髮ノ發育ハ良、眼光銳ク頭顱橫徑一三仙迷縱徑一九仙迷ヲ算シ長顱ヲ呈ス上顎前列齒過半欠損下顎齒ハ一個脫失、鎖骨ハ前上方ニ彎曲シ胸廓兩側ハ腋下ニ於テ狹小シ鳩胸ヲ呈ス肋骨念珠著明ナリ右背後方ニ隆起シ脊柱後彎及側彎ヲ呈シ頭首ハ左方ニ傾斜ス兩前膊骨端及膝關節骨端ハ膨大シ膝蓋骨ハ外轉シ膝蓋腱反射亢進X字脚ヲ呈ス骨痛無シ腹部著シク膨滿シ肝臟ハ右乳腺ニ於テ肋骨弓外二仙迷ニ達スルモ脾臟ハ觸知シ難シ兩肺就中右肺ニ於テ多數ノ小水泡音ヲ聽取シ兩側頸腺數個腫脹ス

明治三十九年六月十五日入院食慾不振ヲ訴フ塩里母百布矢涅劑ヲ投與シ食慾稍振フ七月十一日ニ至リ英利散及磷肝油ヲ與フ八月十一日下痢アリ更ニ硝蒼劑ヲ與フ食慾再ビ減退ス九月十三日ニ至リ磷肝油ヲ止ム同月二十六日下痢止ミタルモ食慾回復セス即チ英利散ノ他ニ塩里母百布聖劑ヲ處ス十一月二十二日ヨリ腹滿ヲ訴フ炭酸グアヤコール「タカ、ヂアスターゼ」ノ散劑ヲ兼用セシム明治四十年一月二十九日ヨリ前英利散ト前塩里母劑トノ二劑ノミヲ與フ爾後營養益々増進諸症漸次輕快脊柱ノ後彎及側彎及X字脚モ著シク減退シ頭首ノ傾斜モ殆ト常位ニ

復シ入院時三貫五百九十目ノ体重ハ四貫四百五十目ニ増加シ本年四月一日ヲ以テ退院セリ在院中ハ前記食鹽溫浴及浴中「マツサージ」并ニ浴後全身伸展法ヲ併用セリ

十四、川島トキ (十四歳、女)

血族關係詳ナラズ

十歳ノ頃ヨリ歩行時ニ右側膝關節及同側足關節ニ疼痛ヲ發シ遂ニ左側膝關節及同側足關節ニ及ボシ十二歳ノ頃ヨリ脚ニ奇形ヲ認メ遂ニ歩行困難ノ爲メニ同年暮ヨリ休學スルニ至レリト云フ

營養中等毛髮發育良胸廓ニハ著シキ變形ヲ認メザルモ肋骨念珠ヲ觸知ス兩前膊骨前端著シク膨大シ膝關節部骨端ハ稍々膨大シX字脚ヲ呈ス腹部肝脾異狀無ク膝蓋腱反射普通ナリ

明治三十九年十一月九日入院英利散、塩里母布聖劑ヲ與フ明治四十年一月二十三日ヨリ更ニ肝油乳劑ヲ與フ咳嗽アリ同月三十一日ヨリ吐根浸杏仁水劑ヲ與フ二月八日ヨリ前英利散前肝油劑ノ他ニ塩里母百布聖杏仁水ノ水劑ヲ與フ爾來諸症

輕快ニ趣キ骨端ノ疼痛全ク消散シ歩行容易トナリ入院時六貫六百目ノ体重ハ七貫八百目ニ増加シ四月一日ヲ以テ退院セリ在院中ハ前記浴治法及浴中マツサー

ジヲ併用セリ

右病床經過記事了リ
以上十四名ノ内重症五名中等症五名輕症四名トス而シテ重症者ニシテ姉妹ノ關係アルモノ二組アリ又他ノ一名ノ重症者ハ同病ノ輕症ナル一弟ヲ有シ中等症者ノ二名モ亦各輕症ナル一弟一妹ヲ有ス加之更ニ從兄弟從姊妹等ノ關係ヲ有スルモノアリ左ニ右患者収容時ノ症狀ト退院時ノ狀態トヲ概表ヲ以テ畧示スレハ左ノ如シ

第二表

患者姓名	年齢	入院年月日	退院年月日	入院時主要症狀	退院時狀態
瀬戸政右衛門	九歳男	明治三十九年六月十五日	同四十年四月一日	營養頗不良鳩胸肋骨念珠脊柱彎曲X字脚毛細氣管支炎、頸腺腫脹、腹部膨滿、下痢、步行不能、骨端膨大	營養佳良脊柱彎曲鳩胸各僅存運動活潑步行自由

患者姓名	年齢	入院年月日	退院年月日	入院時主要症狀	退院時狀態
坂カズエ	十三歳女	明治三十九年六月十五日	同四十年四月一日	營養頗不良鳩胸肋骨念珠脊柱彎曲上肢骨外彎頸腺腫脹、腹部膨滿、下痢、步行不能、骨端膨大起立不能	營養佳良脊柱及四肢骨伸張、骨痛消散、運動活潑、步行自由
坂ミ	十歳女	明治三十九年六月十五日	同四十年四月一日	前者ニ同シ	營養佳良脊柱彎曲、鳩胸僅存、運動活潑、步行自由
山本フサノ	十二歳女	明治三十九年七月十三日	同四十年四月一日	營養頗不良鳩胸肋骨念珠脊柱彎曲、四肢骨外彎骨端膨大、骨痛激甚、氣管支炎、頸腺腫脹、起立不能	營養佳良骨痛消散四肢骨脊柱彎曲僅存獨立及少時間ノ步行自由
山本フジ	十七歳女	明治三十九年七月十三日	同四十年四月一日	營養頗不良鳩胸肋骨念珠脊柱及四肢骨端膨大、激甚ナル骨痛、氣管支炎、起立不能	營養佳良脊柱及四肢骨伸張、骨痛消散、運動活潑、步行自由

山本嘉四郎 八歳、男	山本ソヨ 三歳、女	山崎ハツ 十五歳、女	堂田ハツ 七歳、女
明治三十九年 六月十五日 中等症 四貫〇六十目	明治三十九年 七月二十四日 中等症 不詳	明治三十九年 六月十五日 中等症 六貫五百五十目	明治三十九年 六月十五日 中等症 二貫八百目
同四十年 四月一日 治癒 四貫五百四十目	同四十年 四月一日 輕快 不詳	同三十九年 十一月九日 治癒 七貫六百目	同四十年 四月一日 治癒 三貫六百目
營養不良、輕度鳩胸、 脊柱彎曲、氣管支 炎、頸腺腫脹、肋骨 念珠、X字脚歩行 稍蹣跚	營養不良、腰部後彎、 肋骨念珠、腹部膨滿、 骨痛、O字脚歩行弱	營養尋常、四肢骨端 膨大、O字脚骨痛 歩行頗ル困難	營養中等、輕度鳩胸、 肢骨端膨大、K字 脚僅カニ歩行スル 事ヲ得、氣管支炎
營養佳良、脊柱伸 展、X字部消退、運 動活潑、歩行自由	營養增進、腰部後彎 僅存、骨痛ヲ訴エズ 歩行良好トナル	營養佳良、骨端膨大 僅存、骨痛消散、運 動活潑、歩行自由	營養佳良、K字脚ノ 狀僅存、運動活潑、 歩行自由

大門ス 十七歳、女	丸山ヨシノ 十一歳、女	川島トキ 十七歳、女	堂田伊作 五歳、男
明治三十九年 六月十五日 輕症 九貫四百五十目	明治三十九年 六月十五日 輕症 五貫四百五十目	明治三十九年 十一月九日 輕症 六貫六百目	明治三十九年 六月十五日 中等症 二貫七百五十目
同三十九年 九月十日 治癒 九貫七百五十目	同三十九年 九月十日 治癒 五貫七百七十目	同四十年 四月一日 治癒 七貫八百目	同四十年 四月一日 治癒 三貫百六十目
營養尋常、骨盤骨 壓痛、輕度X字脚、 前膊骨下端膨隆、歩 行時下肢及腰部痛 感	營養尋常、輕度X 字脚、兩前膊骨端 膨大、下腿骨上下 端壓痛及歩行時痛 感	營養尋常、四肢骨 端膨大、壓痛、X字 脚歩行時骨盤及下 肢疼痛	營養中等、肋骨念 珠、輕度X字脚歩行 稍蹣跚
營養增進、骨痛消 散、骨端膨隆減退、歩 行時異狀無シ	營養增進、骨痛及 骨端膨隆消退、歩行 時異狀無シ	營養增進、X字脚僅 微、骨痛消退、歩行 活潑	營養佳良、X字脚 僅微、歩行活潑ト ナル

坂 勇 松	明治三十九年 六月十五日	同 四月 一日	營養中等、兩前膊 骨端膨大肋骨念珠 輕度O字脚歩行稍 蹣跚	營養增進骨端膨隆 減退O字脚肋骨念 珠僅存、歩行活潑 トナル
四 歲、男	輕 症	輕 快	三貫四百目	三貫八百目

備考

坂勇松山本ソヨノ兩名ハ幼少ナルヲ以テ母親ノ直接看護ヲ要スルモ母親ハ家事ノ爲メ時々歸宅スルニ際シ患者モ亦同伴歸宅スルヲ以テ引續キ在院加療スル事ヲ得ス故ニ自ラ全癒ニ至ラサルモノトス又山本フサノハ頗ル重症ナルニモ拘ハラス入院期遅ク從ツテ在院加療日數他ニ比シ少ナカリシヲ以テ退院時半ダ全治ニ至ル事ヲ得ザリシトイヘテ該患者經過頗ル佳良ナリシテ以テ若シ引續キ尙三ヶ月間モ適當ナル療養ヲ加フレハ蓋シ全治ニ至ラシムルヲ得ベケン

診 斷

抑尙僂病及骨軟化症ハ從來本邦ニ於テハ稀有又ハ絶無ト稱セラレシカ尙僂病ニ

關シテハ數年前ヨリ五六ノ學者ハ稀レニ尙僂的病狀症ヲ呈セル患者ニ遭遇シ之ヲ尙僂病ト診斷報告セシモノアリトイヘトモ未タ尙僂病ガ廣ク或ハ一地方ニ多數存在セルコトヲ知ルモノ無ク從ツテ本邦ニ於ケル尙僂病ノ存在ハ未ダ治ク知悉セラル、ニ至ラズ骨軟化症ニ至リテハ未タ曾テ一實驗ノ公表セラレタルヲ聞カズ故ニ今回熊無村ニ於テ發見セラレタル以前ニ於テ本邦學者ノ間此等疾病ニ就キ其原因豫防及治療ノ方法等ニ就キ深ク學術的研究ヲ遂ケ發表シタルモノ無キヲ以テ今之ヲ泰西學者ノ所說ニ徵スレバ小員等ガ今回氷見郡熊無村ニ於テ診查セシ患者ノ多數殊ニ幼年者ノ症狀ハ全然所謂尙僂病ニ一致シ二十歲前後ノ患者ノ症狀ハ其大部分所謂骨軟化症ニ一致シ而シテ八九歲頃ヨリ又ハ十二三歲頃ヨリ發病セルモノハ殆ト所謂晚期尙僂病ニ一致スルモ其症狀ノ一部分ハ尙僂病ニ屬シ一部分ハ骨軟化症ニ屬スルモノアリ其經界明瞭ナラズ故ニ今假リニ多數泰西學者ノ命名ヲ準用スルトキハ小員等ガ診查セル患者ハ小兒期尙僂病最多數ヲ占メ晚期尙僂病又ハ骨軟化症性尙僂病又ハ尙僂病性骨軟化症之ニ次キ眞純ナル骨軟化症ハ其小部分ヲ占ムルモノトス而シテ先天性尙僂病ノ疑アルモノ只一

地勢及風土

氷見郡ハ縣下西北ニ位スル一郡ニシテ東ハ海ニ面シ南ハ平坦ニシテ射水、礪波ノ兩郡ニ界シ北ハ山脈ヲ以テ石川縣能登國ニ接ス小員等ガ踏査セシ熊無村、論田村、碁石村ハ山間ノ僻村ニ屬シ海拔二百二十五尺乃至二百七十七尺ニシテ最高ク八代村、女良村之ニ次キ十二町村ハ稍平坦ナリ就中熊無、論田ノ二村ハ溪流ニ乏シク山頂ニ新開ノ水田ヲ有シ土質ハ粘土ニシテ水ノ滲透ニ便ナラズ常ニ濕潤ス而シテ四方眺望ノ濶然展開セルモノ無シ雨雪ノ量ハ精確ナル調査ノ基礎無シトイヘトモ本郡殊ニ山間ノ村落ハ一般ニ多量ニシテ(氷見町ノ如キ平坦ノ地ニ比シテ倍量ナリト云フ)雪融ノ期モ亦平地ヨリ遅キコト一ヶ月ニ至ル氣候ハ最寒期ニ於テ室内華氏二十五度乃至三十五度ノ低度ヲ示シ寒期間ハ他ニ比シ自ラ亦長シ要スルニ寒冷濕潤ノ著シキ土地ナリトス舟木文次郎擔任ノ調査報告ニ依レハ水質ハ一般ニ清濁一樣ナラサルモ比較的有機物ニ富ミ佳良ナリト云フコトヲ得ズ土質

ハ鐵分ニ富ミ礬土モ少カラズ磷酸ノ量亦多シ之ニ反シ石灰分ニ至リテハ比較的少量ナルガ如シトイヘトモ本郡有病地ニ於テ採取セシ米、麥、馬鈴薯等ノ食料品ハ毫モ他地方ニ於テ生産スルモノト異ナルコト無シト云フ

住居

有病村落ノ家屋ノ構造ヲ見ルニ主トシテ多數ノ患者ヲ生シタル下級農家ニ於テハ悉ク木造藁屋根ニシテ床ハ板張ナルコトハ一般他郡下級農家ノ狀況ト大差無シ然レトモ床板ハ地上ヲ去ルコト僅カニ六七寸乃至一尺許ニシテ頗ル地面ニ接シ床下空氣ノ流通不良ナルコトハ勿論平素ハ床板上ニハ藁ヲ敷キ其上ニ於テ作業ス寢室ハ家屋内ノ一隅就中背部ニ接シタル一室ヲ以テ之ニ充テ庭ノ下ニ藁ヲ敷キテ疊ノ代用ト爲ス背面ノ壁ニハ窓牖ヲ有スルモ極メテ小ニシテ僅カニ方四五尺ニ止マリ其數亦甚少シ而カモ冬季ハ勿論夏期トイヘトモ之ヲ閉鎖スルモノ多シ故ニ空氣ノ流通頗ル不良ニシテ光線ノ射照亦欠乏ス家屋建築ノ場所ハ好シテ山麓ヲ擇ビ山ヲ負フテ家ヲ築キ山壁ト屋背トハ相距ルコト數尺ナルモノアリ

此ノ如キハ夏季トイヘトモ雨後等ニ於テハ水氣ノ屋背ヲ濕スコト甚シク冬期ニ至レバ積雪等ノ爲メ家屋内殆ト終日暗黒ニシテ且ツ寒冷ト濕氣トヲ以テ包擁セラル、ニ至ルハ當然ナリトス而シテ家屋ノ周圍ニハ下水排池ノ設備ヲ欠クガ爲メ常ニ濕潤セラル、ハ勿論不完全ナル井中ニハ到底汚水ノ浸入ヲ免カル、能ハサルナリ

飲食物

常食物ハ米、麥、イリゴ團子、薩摩薯、馬鈴薯其他野菜物ニシテ十數年前迄ハ米穀ノ產出極メテ少カリシ爲メ多クハ之ヲ他地方ヨリ輸入シタルヲ以テ其食用ノ量僅少ナリシガ十年前頃ヨリ新ニ土地ヲ開墾シ米作獎勵ノ結果米穀ノ食用量舊時ニ比シ増加シタルガ如シトイヘトモ人口モ從ツテ増加シ下級農家ニ至リテハ未タ市人ノ如ク專ラ米飯ヲ以テ主食ト爲スコトヲ得ズイリゴ團子、薩摩薯及馬鈴薯ヲ以テ之ヲ補足シ其量數ニ至リテハ貧富ノ程度ニ從ヒ一様ナラズトイヘトモ中等以下ノ農家ニ於テハ殆ト米飯ノ外ニ此等ノ補助食物ヲ用ヒザルモノ無シ此外下級

農家ニ於テハ「ジョウボ」ト稱スル樹葉ヲ煮テ之ヲ米麥飯ニ混和シ食用ニ供スルコトアリ魚肉鳥獸肉鶏卵ノ如キハ生活ノ程度、輸入ノ不便、宗教上ノ關係等ヨリシテ上膳スルコト頗ル稀レニシテ一ヶ月間僅カニ二三回粗末ナル魚肉ヲ食スルノミナリト云フ就中馬鈴薯ハ十數年已來栽培シテ近年頻リニ増加シ其ノ產額ノ大部分ハ各自村ノ食用ニ供シ其小部分ヲ輸出ス一ヶ年ノ產額ハ基石村大字一ヶ村ノ約三千七百五十貫ヲ最多トシ阿尾村大字北八代村ノ八貫ヲ最少トス(全ク之ヲ栽培セサルモノ三四ヶ村アリト云フ)論田、熊無ノ兩村ハ各六百貫ナリ之ヲ本病患者數及人口等ニ比照スルニ馬鈴薯ノ食用量一人割當額ノ多少ハ必ラズシモ患者數ノ多少ト相一致スルニアラズトイヘ之ヲ本縣下他郡市ノ同薯產額及人口ニ比スレハ氷見郡ハ亦實ニ馬鈴薯ノ產額ニ於テ劣位ヲ占ムルモノニ非ラサルヲ認ム而シテ同薯ハ小兒ノ間食物トシテ最モ好ンデ供用セラル、ト云フ飲料水トシテハ家屋ノ傍ニ開掘シタル構造粗畧ナル井水又ハ溪間水、泉水等ヲ使用ス其數一様ナラス然レモ本病ノ發生數ハ其飲用水ノ井水ナルヤ否ヤニ比準セサルガ如シ近年食醋モ一般ニ極メテ稀レニハ食味用トシテ使用セラル

職業

本病ノ發生シタル家ハ殆ト皆農ヲ以テ本業ト爲シ而シテ副業トシテ蕪、疊表、吳産、繩等ノ製造ニ從事ス又女子ノ副業トシテハ養蠶ヲ爲スモノアリトイヘル決シテ多數ナラス海濱ニ接シタル村落ニ於テハ漁業ニ從事スルモノアリモ是亦極メテ稀ナリトス

勞働

農家トシテノ勞働ハ他郡ノモノニ比シテ特ニ甚シトイフニアラザルモ女子ノ勞働ハ比較的過度ナルガ如シト云フ

婚姻

本郡ハ本縣下他郡市ニ比シテ早婚晚婚ノ差無シ同村内ノ結婚ハ從來多ク行ハルル所ナリトイヘル近親間ノ結婚ハ殆ト之レ無シト云フ(但シ本病一患者ノ兩親ト

シテ從兄妹間ノ結婚者只一組アリタルノミ)

分娩

尋常ニシテ殊ニ難産多シト云フニアラズ又双胎ハ平均一ケ年七八名ニ過ギズ

小兒營養物

普通母乳ヲ以テ哺育スルモノ多シトイヘル多クハ三歳四歳甚シキハ五歳ニ至ル迄持續ス故ニ授乳期間ハ概シテ長シトス人工營養物ノミニ依ルモノハ決シテ多カラス現在ノ調査ニ依レハ四一二六ノ母乳ニ對スル一五六ノ人工營養物ノ比例ナリ然レモ母乳不足ノ爲メニ煉乳又ハすい粉等ヲ以テ補足スルモノアリ又稍成長シタル小兒ニハ母乳又ハ煉乳ヲ授クル傍馬鈴薯等ヲ與フル習慣アリト云フ

爾他習慣

本郡中等以上ノ村民ヲ除キ本病患者多數ノ發生地タル下級農家ノ習慣トシテ夏

季ト雖モ屋背ノ窓牖ハ開放スルコト稀ナルヲ以テ冬季ハ勿論密閉シテ開クコト無シ故ニ寢室ハ夏時トイヘモ或ハ燭ヲ秉ルノ必要アリ冬期殊ニ雪中ハ悉ク雨戸ヲ閉鎖シ白晝トイヘモ屋內一般ニ明カナラサルヲ以テ寢室ハ最モ暗黒ナリ而シテ寢具ハ多クハ年中敷續ケノ儘ニシテ乾曝掃除等ヲ行フコト甚タ稀レナリ爲メニ汚濕甚シ患者ハ夏季冬季共ニ之ヲ片隅ノ暗黒ナル一室ニ蟄居セシメ曾テ之レニ沐浴ヲ行ハシムル等ノ事ナキヲ以テ身體寢具ハ垢塵ヲ以テ汚染セラル概シテ病者ニ非ラサルモ沐浴ハ頗ル稀レニシテ一ヶ月一二回甚シキハ數月間ニシテ僅カニ一二回ナルモノアリ但シ夏季ニハ勞働後冷水ヲ以テ仮リニ注拭スルヲ例トス小兒ヲ有スル母親ハ農事ノ爲メ早朝家ヲ出ツルニ際シ之ニ哺乳セシメ而シテ乳兒ヲツブラ又ハウヅミト稱スル藁籠ノ裡ニ埋メ置キ其股間ニハ粗剛ナルオシメヲ挿挾ミ馬鈴薯又ハ薩摩薯ノ一塊ヲ與エ置キ去ツテ田野ニ往ク午時歸來シテ哺乳シ尿尿ノ爲メ乳兒ノ股間汚染セルトキハオシメヲ取換ユルモノアリ又ハ其儘放置スルモノアリ再ビ出テ、田野ニ往ク其間亦馬鈴薯又ハ薩摩薯等ヲ投與シ置クト云フ故ニ乳兒ハツブラノ裡ニ在リテ終日胡坐ノ位置ヲ取り股間ハ常ニ汚

染セラレザルヲ得ザルナリ斯クノ如キヲ以テ衣服ノ洗濯乾燥等ヲ省ミルモノ極メテ稀有ナリトス

有病村ニ於ケル五六ノ疾病

一、微毒

氷見郡内ニ於テハ氷見町ニ於テ最多ク一ヶ年二百名前後之レニ反シ碁石村、熊無村、女良村、久目村等本病尙僂病等患者多數ヲ有スル村落ニ於テハ頗ル稀ニシテ一ヶ年絶無又ハ二三名宛トス

一、マラリア

亦氷見町ニ於テ最多シ一ヶ年三百名前後佛生寺村、熊無村、宮田村、速川村、久目村、宇波村等一ヶ年僅カニ十名乃至二十名ニ過キズ碁石村ノ如キハ皆無ナルガ如シ

一、肺結核

本郡内一般ハ他郡市ニ比シ却ツテ多カラサル方ニシテ熊無村、碁石村、女良村等

本病患者多數ヲ有スル村落ニ於テモ肺結核患者多數ナルヲ示サス

一、佝僂質斯

絶無ト云フニ非ラサルモ特ニ注目スベキ數ヲ認メス

一、乳糜尿

氷見町醫師ノ談ニ依レハ熊無村等ニ於テ時トシテ發見スルコトアリト云フモ小員等ハ本病患者少クトモ病院収容患者ニ就キテハ未ダ一回モ之レニ遭遇シタルコトナシ

以上ハ從來本病ニ關係アルヤノ疑ヲ有セシヲ以テ特ニ之レヲ掲記シタリ
前段列叙シタル調査成績ニ據リ卑見ヲ陳フルコト左ノ如シ

意見

一、本病ノ本態、誘因、原因

氷見郡内熊無村其他ノ諸村ニ於テ發見セラレタル奇病ナルモノハ泰西學者ノ所

謂佝僂病ノ多數ト骨軟化症ノ少數ト此兩者ノ症狀ヲ併有セル或ハ兩者ノ中間ニ位スル一症(所謂晩期佝僂病、佝僂病性骨軟化症、骨軟化症性佝僂病ト稱セラル、モノ乎)トノ三者ナルコトハ既ニ本書診斷ノ條下ニ於テ記述シタルガ如シ而シテ此三症ガ各自獨立ノ疾病ナルヤ將タ同一ノ疾病ガ只其發生ノ時期(年齢即生理的發育期)ト病勢ノ輕重トニ依テ其症狀ヲ異ニスルニ止マルモノナルヤハ古來學者ノ研究討議今尙其解決ヲ見ザル所ナリトイヘモ今回氷見郡内ニ於ケル患者ノ状態ニ就キテ仔細ニ臨床的觀察ヲ遂グレバ幼長ノ兩極端ニ於テハ症狀ノ差異著明ナルモノアリトイヘモ又其中間ニ於テハ兩病ノ症狀自然相移行連絡シテ一定ノ限界ヲ認メ難キ趣アリ故ニ或ハ素ト同一種ノ疾病ガ只其發生ノ時期ト病勢ノ輕重トニ依ツテ其症狀ヲ異ニスルニハ非ラザルヤヲ疑ハシム而シテ其疾病ノ本態的變化ニ至ツテハ素トヨリ其佝僂病タルト骨軟化症タルトヲ問ハス主トシテ骨質中ニ含有スベキ生理的石灰量ノ欠乏ニ外ナラザルハ論ヲ俟タズトイヘモ如何ニシテ石灰量ノ欠乏ヲ來タシタルヤヲ案スルニ從來ノ說ニ依レバ佝僂病ニ於テハ將ニ發育スヘキ骨ニ石灰鹽ノ沈着乏シク骨樣組織ノ新生旺盛ナルガ爲メナリト

シ骨軟化症ニ於テハ之ニ反シ一旦成熟シタル硬骨ヨリ石灰鹽ノ溶解吸収ヲ起シタルカ爲メナリトシテ兩者ヲ區別セントスルモ病理解剖的研究ノ結果ハ佝僂病及骨軟化症共ニ此骨様組織ノ新生機能ト石灰鹽ノ吸収作用トヲ併有(素ヨリ兩者併有ノ程度ニ差異アリトイヘ)スルモノナルコトハ輓近學者ノ證明セル處ナルヲ以テ臨床上ヨリ論スルモ將タ病理解剖上ヨリ考フルモ兩者間ニ劃然特著ノ經界無キガ如シ故ニ發育期ニ屬スル幼骨ニ於テ骨様組織ノ新生旺盛ニシテ石灰分ノ含有量常ニ欠乏スルモ成熟セル硬骨ヨリ石灰鹽ノ吸収セラレテ石灰分ノ含有量益々減少スルモ共ニ骨質中ニ石灰鹽ノ沈着スヘキ生理的機能ヲ阻碍スル作用ガ骨ノ内外何レニカ存在スルガ爲メニシテ其阻碍作用ヲ惹起スル最終ノ原因ハ今尙茲ニ斷言スルコトヲ得ズ從來學者ノ唱道スル所ニ依レハ佝僂病ニ對シテハ一種ノ傳染素(蓋シ特異ノ微菌)ニ基因スルモノトシ或ハ一種ノ中毒(飲食物)ナリトスルモノアリ或ハ「マラリア」説胸腺説ヲ唱フルモノアリ又ハ肺結核遺傳(微毒遺傳)本病遺傳等ヲ論スルモノアリ殊ニ骨軟化症ニ對シテハ卵巢説ヲ主張スルモノアリトイヘ(肺結核、微毒「マラリア」ハ調査ノ結果本郡有病村落ニ於テハ極メテ少數ナ

ルヲ以テ格別ノ關係アルヲ認メズ胸腺説ハ初生兒等ニ於テハ便ナルモ七八歳已上殊ニ骨軟化症ナル大人ノ疾病ニ向ツテハ何等説明スルコトヲ得ズ卵巢説ハ骨軟化症ガ殆ト女子ニ限リ而シテ妊娠中又ハ産褥中ニ發病スルコト最多ク加之卵巢摘出ガ多少ノ治療的効果ヲ呈シ且ツ病理解剖上卵巢組織ニ多少ノ變化ヲ認ムルニ原クトイヘ(其病理解剖的變化ハ果シテ原發的ニ本病ニ特異ナル乎將タ又卵巢摘出ガ果シテ毎回永久的確効アル乎ヲ決定セザル以上ハ是亦輕信スルコトヲ得ズ中毒説、傳染説共稍推考スヘキ値アリトイヘトモ未タ明確ナル根據ヲ證示セサレバ今遽カニ之レニ歸着スル能ハズ本病遺傳説ノ如キモ一家二三名ノ兄弟姉妹又ハ親戚間(從兄弟姉妹間)ニ同症ニ罹リ或ハ生後四五十日ノ佝僂病患兒(先天性佝僂病乎)ヲ發見スル等ノ數例アルヲ以テ頗ル信スベキニ似タリトイヘトモ佝僂病小兒ノ父母ニシテ健全同病ノ既往症及現症無シナルアリ重症ナル所謂產褥性骨軟化症患者熊無村大字中村ノ患者年齡二十八年ノ兒子ニシテ無病ナルモノ(兄妹三人)アルヲ見レハ亦妄リニ該説ニ左袒スルコトヲ得サルナリ然レトモ小員等ハ多數本病患者ヲ診療セシニモ拘ラス未タ一回モ死体ニ就キテ解剖的検査ヲ

遂クルノ機ヲ得ザリシヲ以テ解剖上ノ研究成績ヲ収ムルコトヲ得ズトイヘトモ臨床的ニハ尿、尿、血液及ビ骨髓等ヲ採取シテ數回化學的及顯微鏡的検査ヲ施行セシモ血液ニ於テハ主トシテ白血球ノ増加、赤血球ノ減少、尿中ニハ糖分(僅ニ一例)及「インジカン」各患者ニ於テノ存在(但後記二者ハ入院治療ノ後營養回復ト共ニ消散)糞便中ニハ不消化性植物纖維ノ多量ト普通腸管内寄生虫(鞭虫、蛔虫、蟯虫)ノ卵子及微菌、骨髓中ニハ白血球ノ存在ヲ發見シタル外何等病原ト見做スベキ陽性所見ニ接セス故ニモシ本病ニシテ果シテ最終ノ唯一特異ノ原因存在スルモノトスレバ更ニ之ヲ今後ノ研究ニ俟タサルヘカラス然レトモ此三症(仮リニ所謂佝僂病及骨軟化症)ノ外ニ此兩者中間ノ一症アリトシテハ共ニ同一地方ニ發生シ而シテ下級農家ニ於テ實ニ此等患者ノ多數ヲ占ムルノミナラス殊ニ其重症患者ヲ有スルヲ見レバ所謂不良ナル衛生状態ニ於テ生活スルモノニ發生スルヤ明瞭ナリトス然レトモ此不良ナル衛生状態トハ單ニ食物ノ粗惡、家屋及寢具等ノ不潔ノミヲ指示スヘキニアラス何トナレバ此等ハ下級農家ノ常狀ニシテ敢テ氷見郡ニ於テノミ驚クヘキ劣等ト云フニアラザレハナリ只殊ニ本郡ニ於テ注目スヘキハ土質礬土

ニ富ミ水分ノ透過性甚タ不良ニシテ家屋ハ山崖ヲ負フテ建築シ周圍ニハ樹木鬱生スル等頗ル陰濕ニシテ之レニ加フルニ冬季ハ積雪ノ爲メ寒冷ノ度モ一層甚シク室内ハ暗黒ニシテ運動充分ナラサル等他地方ニ比シテ別ニ一種ノ不良條件アリ且ツ本病患者ハ一般ニ(就中所謂骨軟化症患者ハ)冬季ニ於テ症狀増激シ夏季ニ向ツテ漸ク輕快ニ赴クノ傾キアリト云フヲ見レバ所謂寒濕陰鬱ナルハ本病ヲ發生スヘキ一ノ主要誘因ナリト云ハザルベカラズ本郡ノ湿度ニ就キテハ小員等ハ正確ナル直接調査ヲ欠クトイヘトモ仮リニ伏木測候所ノ調査ニ依リテ推斷スレハ湿度高キ伏木ニ連接セル本郡ガ亦タ湿度ニ富ムヘキハ爭フベカラザル所ナリトス之ヲ從來施行セラレタル動物試驗ニ徵スルニ動物ヲ暗黒ナル一室ニ於テ運動ヲ制限シ置クトキハ人工的ニ佝僂病類似ノ症候ヲ發生セシムルコトヲ得ヘキヲ以テ特ニ濕氣ニ富メル氷見郡下級農家ノ生活状態ハ不幸ニシテ此等疾病ヲ發生セシムルニ適當ナリト云フヘシ食醋ノ調理用及稻田ノ石油散布ノ如キハ論スル迄ノコト無シ馬鈴薯ノ多用ニ關シテハ泰西ノ學者亦之ヲ唱ヘシモノアリトイヘトモ其直接ノ作用ニ至ツテハ明瞭ナラス本郡各村ニ於ケル同薯食用量ノ多少

ガ敢テ尙僂病患者發生數又ハ輕重ニ比例セザルヲ見レハ直ニ原因ヲ之レニ歸スルコトヲ得ズトイヘトモ凡ソ粗惡ナル食物ノ多用ガ胃腸ヲ傷害シテ胃腸ノ消化及吸收作用ヲ減殺スルガ如ク馬鈴薯ノ多食モ亦小兒ノ腸胃ニ損害ヲ與フルモノタルコトハ察スルニ難カラス由ツテ以テ全身ノ營養ヲ障害シテ終ニ一定ノ要約ノ下ニ本病ヲ惹起スルニ至ルヤモ知ルヘカラス之ヲ要スルニ小兒ニ在リテハ該兒ノ近親血族(父母、祖父母、伯叔父母等)ニ本病ニ罹リタルモノアルトキハ一般體質遺傳ノ理ニ基キ該兒ハ本病ヲ直接遺傳セサルモ亦本病ニ對シテ抵抗薄弱ナル素質ヲ享有シ居ルニ際シ食物ノ粗惡又、馬鈴薯薩摩薯ノ多食ハ單ニ滋養成分含量ノ不足ナルノミナラス之レニ依ツテ胃腸ヲ損害シ一般必要ナル滋養分ト共ニ石灰分ノ吸收ヲモ妨碍シ之ニ加フルニ日光ノ射入不足換氣ノ欠乏、運動ノ不充分、身体、家屋被服ノ不潔ト冬季長月日ノ寒濕トハ主トシテ体内各器質ノ新陳代謝ヲ緩慢ナラシメ遂ニ全身ノ營養ヲ障害シテ本病發生ノ誘因トナリ或一種ノ作用ニ依ツテ骨質中ニ於ケル石灰塩ノ吸收ト沈着トノ比例ヲシテ生理的常軌ヲ逸出セシメ茲ニ骨質中石灰塩含有量ノ不足ヲ惹起セシムルニ至リタルモノト推案セザルヲ

得サルナリ

一 本病發生ノ年期

一般村人ノ訴フル所ニ依レハ本病ノ發生ハ實ニ十年前頃ヨリニシテ其以前ニハ見聞シタルコト無シト云フモ又村内二三ノ古老ニ聞クニ十年前以前ニ於テモ「フシタン」ト稱シテ關節部ノ疼痛ヲ發シタル疾病アリシト云ヒ又患者ノ既往症及血族症ヲ問フニ際リ其父母又ハ祖父母ガ四肢ノ疼痛又ハ全身ノ疼痛又ハ運動困難ノ疾病ニ罹リシトカ又ハ夫レ等ニ依リテ死亡シタリトカ答フルモノ往々之レアルヲ見レバ此等ノ内ニハ蓋シ所謂尙僂病又ハ骨軟化症ヲ含蓄シ居リシヤモ知ルベカラズ故ニ十年前以前ニモ決シテ絶無ニハアラサリシモ稀有ナリシモノガ十年已來漸次著シキ増加ヲ爲シタルモノナラン而シテ其増加ノ理由トシテハ本病最終ノ唯一原因ナルモノ未ダ確定セサルヲ以テ自ラ明了ナル能ハストイヘトモ前記生活狀態ノ不衛生的ナルコトハ勿論人口ノ増殖勞働ノ過度生活ノ困難體質遺傳ノ累加等亦與ツテ力アルモノト推考ス

一 療法

本病ニ對シテ小員等ハ未ダ所謂一定特異ノ療法ナルモノヲ發見セス何トナレハ該病ノ唯一原因若シ前段列叙シタル外ニ之レアリトスレハヲ確定スルノ期ニ至ラサレハナリ然レトモ本病ニ對シテ小員等ガ實驗セシ療法ハ較著ナル奏効アルコトヲ確認シタリ即前條論述シタル如ク粗惡ナル食物(滋養成分欠乏シ且ツ消化シ難キモノ)陰鬱寒濕換氣不足日光欠乏運動不充分身體被服及住居ノ不潔等ヲ以テ本病誘發ノ要件トシ且ツ既ニ罹病セルモノニ於テハ營養不良骨痛四肢骨彎曲脊柱彎曲慢性氣管支加答兒慢性胃腸加答兒步行障害等ヲ呈セルヲ以テ小員等ハ収容患者治療方針トシテ左ノ順序ニ從ヘリ

住 居

- 一、日光ノ射入充分ニシテ乾暖ナル病室ニ収容スルコト
- 即、南向階上ノ病室(八疊敷)三個ニ九名一室三名宛ヲ収容シタリ

一、寢具 清潔輕暖ナル蒲團ヲ使用スルコト

即、新調厚キ藁入木綿蒲團(下敷用)一枚、新綿入木綿蒲團(上被及下敷用)二枚ヲ以テス但一人宛トス

飲 食

一、軟炊シタル米飯ノ外副食トシテ滋養消化柔軟ノ三要件ヲ具ヘタルモノヲ選擇調理セシムルコト

即、朝食、米飯、汁類、鶏卵一個 牛乳五勺乃至一合五勺(漸次增量)

晝食、米飯、魚肉(又ハ鶏牛肉)野菜、鶏卵一個 牛乳五勺乃至一合

夕食、米飯、魚肉(又ハ鶏牛肉)野菜、鶏卵一個 牛乳五勺乃至一合

内 服 藥

- 一、沃鐵舍利別、二、沃度加里、三、磷肝油、四、肝油乳劑、五、稀鹽酸里母那埜、百布聖
- 六、重碳酸曹達、タカヂアスダーゼ、七、次硝酸蒼鉛、八、クレオソート、九、炭酸グ

アヤコール、十、磷酸石灰、乳酸鉄、炭酸麻虞、涅矢亞、食鹽、白糖ノ合劑(便宜上、英利散ト稱ス)

外療法

一、食鹽溫浴、食鹽加沃度溫浴及浴中全身「マッサージ」
 二、浴後全身伸展法(サイル氏裝置ニ依ル)
 三、外科的手術トシテ切骨術及副木伸展法又ハ「ギフス」綱帶併用
 患者ハ一般ニ多クハ最初食慾不良ニシテ下痢ノ傾キアリシトイヘトモ逐日食慾増進シ下痢モ漸次ニ停止スルニ至レリ又諸藥劑ノ服用ニ付キテハ毫モ嫌忌スルモノ無ク就中肝油劑即チ鱈肝油又ハ肝油乳劑ハ症狀ニ鑑ミ投與セシニ比較的善ク堪ヘタリ又殆ント各患者ニ併發セル氣管支加答兒ノ如キモ英利散及肝油劑ノ内服ノミヲ以テ消失セルヲ見タリ要スルニ内服藥トシテハ沃鐵舍利別、英利散等各有効ナリトイヘトモ小員等ハ本病ニ對シ最モ著効アルモノトシテ特ニ肝油劑ヲ推奨セントス

溫浴療法ハ亦患者ノ一般ニ歡迎セシ所ニシテ最初ハ隔日一回ナリシガ漸次毎日

一回宛ト爲シ浴中「マッサージ」ヲ兼用シタルヲ以テ身体諸部ニ存在セシ疼痛(主トシテ骨痛及筋痛)ハ概ネ浴後一ヶ月許ニシテ消散シ直立歩行共不能ニシテ最モ重症ナリシモノトイヘトモ二ヶ月ヲ出テサルニ獨立二三歩ヲ營ムニ至レリ而シテ身体ノ營養漸ク回復スルニ至リ浴後全身伸展法ヲ施行シタルニ脊柱及下肢ノ彎曲矯正ニ向ツテ著シク其効ヲ奏シ稍重症ニシテ高度ノ彎曲ヲ呈スルモノト雖モ殆ト常態ニ復セシムルヲ得タリ然レトモ時トシテ全ク原形ニ至ラサルモノアリ此等ハ主トシテ營養佳良ノ患者ニシテ骨質中ノ石灰含有量モ稍健體ニ同シキモノ即チ殆ト尙僂病ヲ經過シ了リテ所謂奇形ヲ遺殘シタル程度ニ在リテ骨質概ネ硬化シタルモノトス此ノ如キ場合ニ向ツテハ彎曲部ニ於テ人工的ニ骨折セシムルカ或ハ「オステオトミー」(切骨術)ヲ試行シテ骨ニ一部ノ楔狀切除ヲ施シ之ヲ直形ニ強整スルノ外ニ適當ナル方法ナキヲ以テ小員等ハ彎曲著明ニシテ骨質硬化シタル一患者(七歳、女)ノ左脛骨ニ「オステオトミー」ヲ實施シテ其彎形ヲ矯正シタリ即チ概要前記ノ内外的療法ニ依リ幸ニ良結果ヲ収ムルヲ得タルモノトス殊ニ骨軟化症ト稱スベキ患者ニ於テ最モ特異ニシテ且ツ頗ル苦惱ヲ與フル骨痛(及筋痛)

ハ實ニ前記温浴療法ヲ以テ少日數ノ間ニ於テ全然治癒消散セシムルコトヲ得タルハ小員等ノ茲ニ之レヲ特書セント欲スル所ナリ何トナレハ泰西二三ノ學者ハカノ骨軟化症患者ニ向ツテ卵巢摘出術ヲ施行シ術後骨痛ノ消失又ハ輕快シタルヲ見テ該症ノ特效療法ハ卵巢摘出術ナリト唱フルモ小員等ハ營養胃腸療法ト共ニ療法ニ兼ヌルニ温浴療法及「マッサージ」ヲ以テシテ速カニ少日數ノ裡ニ激甚ナル骨痛等ヲ治癒消散セシムルヲ得テ爾後引續キ未ダ再發ヲ訴エザルノミナラズ營養著シク増進シ骨變形モ漸次回復シテ運動活潑ニ赴キタルニ依リ彼ノ煩ヲ去ツテ此ノ簡ニ從フモ益アツテ害ナキヲ知ルヲ以テナリ就中全身衰弱ヲ呈シテ手術ノ危險ニ堪ユベカラザル程度ノモノニ於テハ殊ニ然リト爲ス故ニ小員等ハ卵巢摘出術ガ所謂骨軟化症患者ニ向ツテハ亦有効ナルヲ認ムトイヘトモ該術ガ果シテ毎回著効ヲ奏シ且ツ其効力ガ永久的ニ確實ナルコトヲ證セラル、ニ至ル迄ハ所謂小兒期佝僂病及晩期佝僂病佝僂病ト骨軟化症トノ中間症ヲ仮稱ス勿論骨軟化症ニ向ツテモ一般本郡患者ノ如キ生計低度ニシテ相當醫療ヲ受クベキ資力無キ者ノ療法トシテハ一面生活狀態ノ改良ト共ニ滋養療法ニ兼ヌルニ浴治法及

「マッサージ」ヲ行フヲ以テ輕便ニシテ且ツ頗ル有効ノモノト爲シ特ニ之ヲ獎勵セント欲ス小員等モ骨痛激甚ナル姉妹二患者(山本某々女)ニ就キテ卵巢摘出術ヲ試行セント欲セシガ最初衰弱甚シカリシヲ以テ手術前準備即チ營養回復策トシテ一時滋養療法及浴治法兼「マッサージ」ヲ施行セシニ該疼痛ハ頗ル迅速ニ輕減シ一ケ月許ニシテ全ク消散シ去リ遂ニ手術ヲ行フヘキ必要ヲ認メサルニ至リシヲ以テ前記療法ヲ持續スルコトトシタリ然レトモ骨軟化症の骨痛ハ一時治癒スルモ爾後時トシテ産褥ニ際シ再發スルコトアルヲ以テ少クトモ此産褥的發病ニ向ツテタトエ生殖機能ヲ犠牲ニ供スルモ其本原タル妊娠ヲ避ケンガ爲メニ卵巢摘出術ヲ施行スルハ自ラ別問題ナリトス

又富山病院ニ收容セサリシ本病患者即チ氷見郡各村自宅ニ在ル患者ニ對シテハ收容患者ト同様ナル充分ノ療養ヲ加フルコトヲ得サリシヲ以テ一般ニ飲食物等ニ關スル注意ヲ懇示シ且ツ專ラ沃鐵舍利別英利散百布聖タカデアスターセ等ノ内服藥ヲ投與シタリ鱒肝油ハ服用中殊ニ患者ノ耐否ヲ監察スルノ要アルヲ以テ之ヲ投與セサリキ何トナレハ遠隔セル山間ノ村落ニ散在性ニ住居スル多數患者

ニ向ツテ一々精細ナル監察ヲ行フコト能ハサルヲ以テナリ然レトモ前記只二三種ノ服藥ヲ投與シタル在自村患者凡三百名ハ在水見町本病調査囑托醫ノ報告ニ依レハ服藥後一般ニ症狀輕快ニ赴キ殊ニ服藥日數多キニ從ヒ輕快ノ度モ愈明カナリト云フ以テ本病ノ非収容患者ニ對シテモ亦前記内服藥ノ有効ナリシヲ證スルニ足ルベシ

一 豫 後

上文叙記シタル經過及治療ノ成績ニ徵スレハ本病ハ概シテ成ルヘク初期ニ於テ適當ナル療養ヲ加フレハ豫後益佳ニシテ何等後遺症ヲ留ムルコト無クシテ治療スヘシトイヘトモ若シ身體發育期間(例ヘハ十二三歳ニシテ)ニ於テ本症ニ罹リ症狀中等度ニシテ長期間(二三ケ年間モ)適當ナル療養ヲ加エサリシモノニ於テハ下肢ノ長軸發育障害セラレ短脚ニシテ侏儒的体格ヲ以テ治療スルニ至ルヘシ要スルニ通常ノ小兒期佝僂病ト稱スルモノハ重症者少ク從ツテ多クハ生命ノ危険ナキノミナラス稍著シキ長骨彎曲、骨端膨大ヲ有セシモノモ治療ニ依ツテ殆ト骨格

ノ變形ヲ遺殘セスシテ治療セシムルヲ得ヘク十二三歳已上ニシテ發病シ佝僂病及骨軟化症ノ中間症狀ヲ有スル症(所謂晩期佝僂病、佝僂病性骨軟化症、骨軟化症性佝僂病ト稱スルモノ)モ生命ノ危険亦少シトイヘトモ治療後多少骨格ノ變形ヲ殘スモノアリ要スルニ此等幼年者又ハ少年者ニ發スルモノハ生命上ノ豫後概シテ良ナリトイヘトモ骨格變狀ニ對スル豫後ハ年齡、輕重及治療如何ニ依ツテ大ニ差異アルモノト云フベシ然レトモ時トシテ幼年者ニ於テモ亦大ニ重症ニ陥リ稀レニハ死ヲ以テ終ルモノアリ夫ノ成年女子ニ發生シテ從來豫後不良ナリト稱セラレタル骨軟化症トイヘトモ一般ニ不良ナリト斷念スヘキニアラス甚シキ重症者又ハ惡性ナル合併症(肺結核等)ノ存在セサル限ハタトエ一見衰弱著シク全身疼痛激甚ニシテ運動不能ノモノトイヘトモ長月日間熱誠懇篤ナル治療ニ依ツテハ多少ノ骨變狀等ヲ遺殘スルモ快癒ニ至ラシムヘキ望ミアルモノトス故ニ小員等ハ此三症共適當ノ時期ニ於テ適當ノ療養ヲ怠ラサルニ於テハ敢テ豫後不良ノモノニアラスト信ス

豫防法

前述セシ如ク本病ヲ仮リニ大別シテ三症ト爲スコトヲ得ヘシトイヘトモ此三症ハ今ヤ劃然分界スヘキ一定ノ標準ヲ有セサルガ如シ而シテ其最終ノ唯一原因(モシ之レアリトスレバ)ハ今尙不明ナルヲ以テ其原因の豫防法ハ今暫ク之ヲ論斷スルコトヲ得ストイヘトモ其誘因、症狀、經過療法等殆ト皆相類同セルヲ以テ其豫防法モ亦大体ニ於テ自ラ同様ナラザルヘカラス只其年齡期ニ於テ殊ニ注意スヘキ二三ノ点ヲ異ニスルノミ即チ三症ニ共通スヘキ要件左ノ如シ

住居

一、土地ハ四方展開シテ温暖高燥ナルヲ要ス然レトモ土地ノ變造ハ勿論舉村轉住ノ如キモ蓋シ不可能ナルヘキヲ以テ左ノ諸項ノ改良ヲ計ルヘシ

一、家屋ノ周圍ハナルヘク廣潤ナラシメ陰鬱濕氣ノ害ヲ蒙ラサルコトニ注意スヘシ故ニ無要ナル蔭樹ノ鬱生ヲ避ケ又山中ヨリ流下スル水又ハ用廢セラレタル

汚水ヲ以テ濕潤セシメサル様其排泄ヲ可良ナラシムル設備ヲ爲スヘシ

一、家屋ノ周圍ニ存スル雪除裝置ハ雪解ト共ニ之ヲ撤去シテ永ク存留セシムヘカラズ

一、家屋ノ床板ハナルヘク高ク地上ヲ離ル、ヲ要ス

一、家屋内ハ明、暖、乾、清、四件ヲ要スルヲ以テ日光ノ射入及空氣ノ流通ヲ可良ナラシムル爲メ窓牖ハナルベク大ニシテ且ツ多キヲ宜シトス其既設シタルモノハ寒中トイヘトモ徒ラニ密閉シテ室内ヲ暗黒ナラシムル等ノコトアルベカラズ必ラズ毎朝窓戸ヲ開放シテ室内ノ掃除ヲ爲スベシ

一、其他一般清潔法ノ實行ヲ獎勵スヘシ

被服

一、被服(衣服寢具等)ハ屢洗濯乾燥シ汚染濕潤セシメサルヲ要ス殊ニ小兒及病者等ニ於テ然リトス寢具ノ如キハ決シテ敷放シニ爲スヘカラズ毎朝掃除乾燥セシムヘク寢室モ亦同シ小兒ノ「おしめ」ノ如キハ最モ注意交換ヲ怠ルベカラス

飲食物

- 一、米飯、麥飯共ニ宜シ野菜モ必要ナリトイヘトモ纖維硬キモノハ勿論普通軟カキ野菜トイヘトモ多食セシムヘカラス小兒及病者ニハ殊ニ然リトス特ニ腹滿ヲ催起スヘキモノ即チ馬鈴薯ノ如キモ多食セシメサルヲ可トス是レ直接本病ノ原因トナラザルヘキモ胃腸ヲ害シ消化ヲ碍ゲ本病ヲ誘發セシムヘキ素因ヲ爲スノ恐レアルヲ以ナリ之ニ反シ新鮮ナル魚肉類ハナルベク數々食用スルヲ可トス(鳥肉獸肉モ軟柔ナル良品ナレバ可ナリトイヘトモ然ラサレバ寧ロ魚肉ヲ以テ優レリトス)又新鮮ナル魚肉ヲ得難キ時ハ乾魚ニテモ可ナリ此外時々鶏卵、豆腐等ヲ加フレバ益々可ナリ
- 一、飲用水ハ清潔ナル井水ヲ可トス殊ニ飲用前一旦煮沸スレハ益可ナリ井戸ハ其内壁ノ構造ヲ完全トナシ下水、雨水等ノ滲入ヲ避ケ又便所ト接近セシムベカラ
- 一、其他飲食物ハ一般ニ消化シ易クシテ滋養成分ニ富メル品質ヲ撰ミ腐敗ニ陷ラス

ナル様又ハ塵埃等ノ混入セザル様注意スヘシ

習慣

- 一、夏時ハ勿論毎日、冬季ト雖モ隔日或ハ少クトモ一週一二回温浴ヲ施シ身体ノ清潔ヲ守ルト共ニ身体ノ冷却ヲ防クヘシ冬季ハ殊ニ食塩温浴(出來得ベクソルト)ヲ用ヒテ身体ノ温暖ヲ保ツヲ必要トス
- 一、近親間ノ結婚ハ勿論他人トイヘトモ本病患者ノ近親血族ハナルヘク之ヲ避ケ他ノ健康家族ト結婚スルヲ可トス且ツ早期ノ結婚ヲ爲スベカラス
- 一、凡テ身体ノ營養ヲ減殺シ又ハ發育ヲ妨碍スヘキ事柄ヲ避ケ梅毒、結核(マラリア)感冒、胃腸加答兒等ニ罹ラサル様注意スヘシ

小兒ニ對スル注意

- 一、初生兒ノ營養物ハ健康ナル母乳ヲ最上トス之レニ次キテハ健強ナル乳母(殊ニ分娩月日ノ大差ナキモノ)之レニ次キテハ健全ナル生牛乳又ハ止ムヲ得サレバ

精良ナル煉乳トス授乳ハ凡ソ一ケ年半ヲ限リトシ徐々ニ離乳ヲ爲スヘシ生牛乳煉乳ハ精良品トイヘトモ其稀釋法防腐法及哺乳器ノ清潔法等ニ注意スルヲ忘ルベカラス

- 一、離乳後ハ軟カキ粥、おも湯、柔カキ煮タル野菜、柔カキ煮タル魚肉等ヲ與フベシ決シテ剛キ野菜又ハ腹滿ヲ來タスベキ馬鈴薯等ヲ多食セシムヘカラス
- 一、數々(毎日又ハ一週數回)温浴セシメ淨掃シタル疊ノ上ニ運動セシムベシ
- 一、「ツブラ」ハ廢スルヲ可トス何トナレバ柔軟ナル小兒ノ骨格ヲシテ彎屈セシムル傾キアルノミナラズ小兒ノ運動ヲ阻碍シ大小便ヲ汚染シテ臀部ヲ濕潤糜爛セシムルヲ以テナリ且ツ「おしめ」ハ剛キモノヲ多量ニ股間ニ挿入スルヲ止メ(習慣的ニO字脚ヲ誘發セシムル恐レアルヲ以テナリ)柔カキモノヲ少量ニ使用シテ時々清洗乾燥セシムベシ決シテ暗黒ナル一室ニ「ツブラ」ト共ニ放置スベカラス
- 一、小兒ノ衣服ハナルヘク寛ナルヲ要ス「附ケ紐」ハナルヘク低クシテ胸廓ノ緊縛ヲ避クヘシ而シテ小兒ノ成長ト共ニ紐ノ取附ケヲ低下セシムルヲ忘ルベカラズ
- 一、脚弱キ小兒ニハ強イテ起立歩行ヲ促スベカラス身体ノ運動ニ際シ啼泣スルモノ、歩行ノ營爲遲キモノ、歩行異狀アルモノ、脊部ノ後彎シタル觀アルモノ、
醫師ノ診査ヲ受クベシ
- 一、十二三歳ノ兒童ニ過度ノ勞働ヲ爲サシムベカラス

成年婦人ニ對スル注意

- 一、婦人ニハ過度ノ勞働ヲ課スベカラズ
 - 一、婦人ノ月經時ニ際シテハ休息ヲ與フルカ又ハ勞働ヲ制限スベシ
 - 一、妊娠中ノ婦人ニハ適當ノ休息ヲ與フルカ又ハ過度ノ勞働ヲ爲サシムベカラザルハ勿論消化シ易キ食物ヲ攝取シ寒濕ヲ避ケ温暖ヲ取り感冒ニ罹ラザル様注意スヘシ
 - 一、産褥中ハ清潔法ヲ怠ラズ食物ハ滋養ニ富ミ消化シ易キモノヲ撰ムヘシ産褥室ハ殊ニ日光ノ射入、空氣ノ流通共ニ充分ニシテ乾燥温暖ナルヲ要ス且ツ一定期間安靜ヲ守リ安ニ早ク離褥ヲ爲シ又ハ勞働ニ服スル等ノコトアルハカラス
- 以上ハ豫防法ノ概略ナリ要スルニ清潔法、滋養法ヲ守リ寒濕、暗鬱、密閉ノ弊習ヲ去

リ過度ノ勞働ヲ爲サハル等一般衛生狀態ノ改良ニ在リトス然レトモ是等ノ實行ハ直チニ生活問題ニ關聯スルヲ以テ下級農家ノ資力ニ於テハ或ハ實行ニ困難ナル点無キニシモ非ラザルベシトイヘトモ村民一般ニ此方針ヲ以テ留意怠ラザルト共ニ行政當局者亦懇ニ監督誘導ノ道ヲ悉サバ他日必ラス其効果ヲ見ルニ至ルベキヲ信ス

附言

氷見郡ニ於ケル本病ノ發見喧傳セラレタル以來本年三月ニ至ル迄凡ソ九ヶ月間ニ於テ富山病院外來患者トシテ富山市、婦負郡、下新川郡、中新川郡、上新川郡、射水郡、西礪波郡ヨリ同病患者ノ來院セルモノ十二名此内所謂小兒佝僂病七名(重症二名、中等症四名、輕症一名、晚期佝僂病)即チ佝僂病ト骨軟化症トノ中間症トモ稱スヘキモノカ(三名)重症一名、輕症二名、產褥性骨軟化症二名、各中等症ニシテ三十歳已上ヲ診定セリ而シテ該患者ノ多數ハ皆下級農家(富山市勞働者ノ男兒兄弟三人ヲ除ク)ニシテ多少陰鬱ナル山間ニ住居スルモノナリ之レニ依ツテ考フレバ氷見郡已外ノ本縣下各郡市ニ於テモ此等患者ガ散發性

ニ存在スルモノタルヲ知ル但シ其數ニ於テハ氷見郡ノ頗ル多數ナルニ及バザルコト勿論ナルベシ

右調査ノ概要及報告候也

明治四十年五月十三日

佝僂病調査囑托

杉 郎

廉

佝僂病調査囑托

小 野

謙 吉

富山縣知事 川上親晴殿

追 申

富山病院ニ収容加療セシ本病患者十四名ノ内症狀著明ナルモノ七名ガ加療前ニ於ケル撮影及加療中并ニ加療後ニ於ケル治癒狀態ノ撮影等數十葉爲參考便宜別冊一本ト爲シ貴覽ニ供シ候也

瀬戸 (九歳男)



後容收回二第
行步僅



(面前)前容收回一第
能立起



後容收回三第
其稍行步



(面背)

坂
(十歲女)



(面前)時容收回一第
能不立起



(面前)時院退回四第
濼活行步



(面背)



(面背)



(面前)時院退回三第
濶活行步



後容收回二第
立起僅



(面背)



(位坐正面背)時院退回三第
由自坐起



後容收回二第
立起僅



(面前)前容收回一第
能不立起



(位坐正面背)時院退回三第
在自坐起



(面背)

山本(十二歳女)



(面前)時容收同第一
能不立起



(面前)時院退回三第
濼活行步



(面背)



(面背)



(面前)時院退回三第
行疾能未



(面前)後容收回二第
立起試僅



(面背)



(位坐正面背)時院退回三第
坐自坐起

山本(十七歳,女)



第一回收容時
能不起立



第三回退院時
步行活潑



第二回收容後
步行



堂田 (七歳女)

前容取回一第
行步僅



山崎 (十五歳女)

前容取回一第
行步僅



時院退回二第
濼活行步



時院退回二第
濼活行步



堂田 兩下腿(收容時)

像影線光ンゲトシレ



坂 (十歳女) 春在彎曲 (收容時)

像影線光ソゲトソレ



山本 (十二歳、女) 前膊 (收容時)

像影線光ンゲトシレ



上 同

(退
院
時)

附

錄

奇病調査報告

富山、石川二縣ニ於ケル奇病ニ關シ京都帝國大學福岡醫科大學教授醫學博士林春雄ノ調査報告左ノ如シ(官報第六九八九號內務省彙報拔萃)

本年初夏富山縣下水見郡地方ニ次キテ石川縣下羽咋郡其他ノ地方ニ骨畸形ヲ呈セル一種ノ奇病ニ罹レル患者比較的多數ヲ發見シ殊ニ該地ノ人民ハ此奇病ヲ以テ十年以後ニ新生セルモノト爲シ十年以降衣食住等ニ關シ習慣ノ異レルモノアルヲ認メ其原因トシテ馬鈴薯ヲ食用スルコト醋酸ヲ食醋ト代用スルコト水田ニ石油ヲ流布スルコト等ヲ舉テ奇病發生ニ關シテ其罪ヲ專ラ是等ノ新習慣ニ嫁セントセリ余ハ內務省ノ囑託ヲ受ケ此奇病發生ノ原因的關係ヲ明ニセントシテ氷見羽咋兩郡ヲ巡視シ調査セル結果ヲ報告スルコト左ノ如シ

本病ハ同僚田代、木下、三輪三氏ノ調査ニ依リ富山市病院長杉村氏ノ診斷セル如ク佝僂病及骨軟化症ナリト決定セリ而シテ三輪、田代兩氏ノ說ニ依レハ佝僂病ハ輕症ノモノ多ク殊ニ地方人民並ニ警察官ノ以テ非病兒ト爲セルモノニ多數

ノ該患者ヲ發見セルナリ而シテ該地方ヨリ佝僂病疑似患者トシテ報告シ來レ
ルハ地方警察官ノ骨畸形ヲ認メ後醫師ノ斷定ヲ經タルモノニシテ其大半ハ重
症佝僂病者ニシテ之ニ比較的少數ノ骨軟化症患者ヲ加ヘタルモノナリ
而シテ骨軟化症ハ畸形ニ伴フニ劇痛ヲ以テシ其多クハ廢疾ト爲リ不良ノ轉歸
ヲ取ルヲ以テ特ニ地方人民及警察官ノ注意ヲ喚起シタルモノ、如シ

第一 本病ノ發生

本地方病ハ前述ノ如ク佝僂病ト骨軟化症ト爲ルヲ以テ其發生ニ就キテハ之ヲ
區別シテ論スルヲ便ナリトス

(甲)佝僂病 之ヲ古老ニ聞クニ要領ヲ得サルモノ多シト雖モ下肢ノ畸形殊ニ〇
字形彎曲ハ俚俗之ヲ「ワサン」ト稱シ且ツ是等兒童ハ二三歳若クハ其以上五六
歳マテ歩行シ得サルモノ多ク又其畸形ハ兒童ノ成長スルニ從テ漸次消失ス
ルコトハ古老ノ記憶ニ止リ善ク三四十年前ニ遡ルコトヲ得ルモノ、如シ(勿
論「ワサン」兒中ニハ後ニ述フル所ノ「ツブラ」ノ弊害ニ因リテ生シタル下肢畸形

ヲ有スル兒童ヲモ數ヘタルモノナルヘシ然レトモ是等ノ小兒ハ滿一歳ヲ過
クレハ多クハ既ニ歩行シ得ヘキナリ此コトハ田代三輪兩氏ノ本地方佝僂病
ヲ認メテ輕症ノモノ多シト爲シ且ツ三輪氏ノ所謂健康兒中ニ多數ノ佝僂病
患者ヲ發見シタル事實トニ徴シテ本病ハ昔クモ同地方ニ於テハ十年(若クハ
十五六年)以後ニ發生セルモノニアラス其以前ヨリ存在セリト思考シ得ラル
ルナリ殊ニ田代氏ハ二三老年者ニ於テ佝僂病ニ因リテ起リタル骨變化ヲ有
スルヲ認メタルハ此推測ヲ髓ムルモノナリト謂フヘシ而シテ本病ヲ初テ多
數ニ發見シタル熊無村ニ於テハ村長初メ村民一同本病ノ往時ニ存在セサリ
シコトヲ熱心ニ主張スレトモ之ハ症狀ノ慘酷危險ニシテ特ニ人ノ注意ヲ喚
起シタル骨軟化症ト本病トヲ混同シタル結果ナルコト熊無村役場ノ佝僂病
原因調書ニ徵スルモ明ナリ

(乙)骨軟化症 本病ノ發生ニ就キテハ古老ノ言ヲ聞クニ十年以後ノ疾病ナリト
主張スル者多シト雖モ亦其以前ヨリ存在シテ只近來増加セルニ過キスト唱
フル者尠カラス例ヘハ碁石村長、上庄村長、千石村總代等ノ言フ所ニ依レハ地

方醫師ノ診テ痛風ト爲セル患者中ニ今回骨軟化症ト診斷セラレタルモノニ
 毫モ異ナラサル(勿論素人眼ニ)症狀ニ備メル婦人アリタル由ニシテ其必シモ
 十年以後ニ發生セルモノニアラス只近來増加セルニ止ルト謂ハル又熊無村
 醫前田某ノ木下氏ニ語ル所ニ依レハ古來「フシタン」ト稱スル疾病アリテコハ
 皆畸形ト肢疼痛トヲ有スル疾病ヲ總稱セルモノ、如ク從テ必シモ骨軟化症
 ヲ謂フモノニアラサルヘシ之ニ反シ十年以後說ヲ唱フル者ハ十年以前ニハ
 嘗テ見聞セサリシモノナリトシ殊ニ之ニ「オバヤマイ」ノ稱アルハ方言次女三
 女等其以下ヲ「オバ」ト稱シ此病ニ罹ル者ハ成育セル長女ニ少ク年若ナル次女
 三女ニ多ク則チ本病ノ十年前後以前ヨリ人ノ注意ヲ惹キ其ノ頃十歳前後ナ
 ル二女、三女以下ノ者ニ發病シタル者多キカ故ナリトテ熱心ニ從前皆無ノ病
 症ナリト主張ス「オバヤマイ」ハ骨畸形ト肢痛ヲ女兒ニ起シタルモノヲ總稱ス
 ルモノ、如シ

而シテ是等ノ說ヨリ考フルニ從前ヨリ本病ハ是等地方ニ存在シタルモ只多
 數人士ノ眼ニ觸レ其注意ヲ惹カサリシニアラサルナキヤヲ思ハシム則チ余

ノ見聞スル所ニ依レハ是等地方ニ於テハ生活ノ程度一般ニ低クシテ殊ニ山
 間ハ道路險惡交通不便ナレハ病者アレトモ醫治ヲ乞フコト稀ニシテ輕症ナ
 ル間ハ敢テ意ニ介セス重症ニ陥レル者ハ不治ノ病ト爲シ暗黒ナル寢室内ニ
 就床セシメ繼發症例ヘハ肺結核等ノタメニ夭折スル者多ク地方醫又ハ警察
 官ノ注意ヲ惹カサリシコト之ニ加フルニ骨軟化症及重症佝僂病ノ如キ畸形
 ヲ呈スル病症ハ凡テ癩疾ト爲シ其家族ハ血統ニ一大汚點ヲ殘スモノトシテ
 大ニ之ヲ耻チ加フルニ宗教上ノ迷信ハ是等痼疾ハ積善ノ家ニ發スルモノニ
 アラストシ之ヲ愧ツルノ餘弊ハ却テ之ヲ隱蔽スルニ至ラシメ患者ノ多數ヲ
 有スル村落ニ於テ村民自身スラ今日マテカバカリ多數ノ患者アルコトヲ知
 ラサリシ位ニシテ隣村住民、地方醫師、警察官等ニ注目セラレサリシハ敢テ怪
 ムニ足ラサルナリ又此地方殊ニ山村ニ於テハ女兒ノ就學スル者從前ハ殆ト
 皆無ナリシ由ニシテ十年以降官民ノ盡力ニ依リ漸ク就學スルニ至リ爾來其
 數ヲ増シ今日ニ及ヘルモノニシテ是等就學女兒中初メ膝關節部等ニ疼痛ヲ
 覺ヘ漸次ニ全身ニ及ヒ終ニ學業ヲ廢セサルヘカラサルニ至リ重症ノ骨軟化

症ニ陥レル者尠カラス而シテ此事實ハ學校教員村民警察官等ニ注目セラレ
 遂ニ十年以後新生ノ疾病ナルカノ如ク認メラレタルモノナルベク「オバヤマ
 イ」等ノ名稱モ或ハ此邊ノ事實ニ因レルニアラサルナキカ村民中ニハ冬季嶮
 道ヲ往復シテ通學スルヲ以テ本病ノ原因ト爲セル者アリ尙ホ十年以降租稅
 負擔ノ増加ト物價ノ騰貴トニ加フルニ交通機關ノ發達ハ往時此地方ニ於テ
 殆ト無代價ナリシ魚類ヲ貴カラシメ且ツ田畑ノ開墾ニ過分ナル人口ノ増加
 ハ是等地方殊ニ山地村落ノ衛生狀態ヲ惡シクシ實際本病患者數ヲ増加セシ
 メタルニアラサルナキカ
 是等總括シテ之ヲ考フルニ骨軟化症ハ近キ既往ニ發生セリトノ說ハ信シ難
 ク却テ從前ヨリ存在スルモノナリト思考スルノ穩當ナルヲ覺ユルナリ

第一 本病ト地勢トノ關係

氷見羽咋兩郡ニ就キテ之ヲ見ルニ一般ニ海岸若クハ海岸ニ近キ低地ニ於テハ
 尙儂病及骨軟化症共ニ之ヲ見ルコト少ク山間ノ高地ニ進ムニ從テ漸ク其數ヲ

増スコトハ縣廳ノ調査及今回田代木下三輪諸氏ノ諸村ニ於ケル調査ニ依リテ
 明ナリ

第二 病地ニ於ケル一般衛生狀態

病地ニ於ケル一般衛生狀態ハ本病トノ關係上大ニ興味アルコトナリ左ニ余ノ
 調査觀察シ得タルモノヲ記載スヘシ
 職業及物産 沿岸地方ニハ漁業ヲ營ム者尠カラスト雖モ其他ハ低地高地ノ差
 別ナク農ヲ以テ主業ト爲ス此地方ハ粘土質ヨリ成リ雨水浸透シ去ラスシテ
 滯溜シ加フルニ雨量非常ニ多クシテ十年間平均一年二千三百耗ニ近シ山上
 ノ僻村ニ至ルマテ猫額大ノ水田ヲ作り之ヲ耕スヲ見ル而シテ比較的廣濶ナ
 ル低地ニ在リテハ米ノ産額ハ自家ノ食料ニテ尙ホ何分ノ餘裕アレトモ高地
 ニ在リテハ自家ノ食料ニモ足ラサルナリ而シテ米以外ノ農産物ハ其額甚々
 多カラス只麥ト馬鈴薯ト甘薯トハ其中ノ主要ナルモノニシテ水田ニ乏シキ
 高地ニテハ盛ニ食用ニ供セラル然レトモ山地ノ住民ハ農ノミヲ以テ生計ヲ

營ムコト能ハサルヲ以テ傍ラ藁藁唐箕ヲ製作スルモノ多ク又養蠶炭燒等ヲ副業トスル者尠カラス

住居及家屋 住居ハ一般ニ山腹ノ崖地ニトセラレ其周圍ニハ杉其他喬樹ヲ植エ鬱蒼トシテ晝尙ホ暗キモノ多ク是等ハ殊ニ其誇リトスル所ナリト謂ヒ山地ニ至ル程其然ルヲ覺ユ家屋ハ茅葺ニシテ檐低ク余ノ巡視セル夏期ト雖モ家ノ三面ハ盡ク閉鎖セラレ僅ニ前面ノ紙障子ヲ透シテ明ヲ室内ニ採ル床上ハ平素ハ疊ヲ用ヒス藁藁ヲ布キテ其上ニ坐シ寢室ハ多クハ背後ニ在テ晝間ニ尙ホ光明ヲ見ルコトナク殆ト暗室ノ感アリ家人夜ハ此中ニ眠リ病者ハ多ハ常ニ此内ニ在リ冬期ニ至レハ前面檐下ニ尙ホ雪除ト稱シ藁屏風ノ類ヲ立テ、寒ヲ防ク由ナレハ室内ハ夏期ニ比シ尙ホ光線ト空氣トノ缺乏ヲ見ルヘシ而シテ此地方ハ雨量多ク日光照射時間少ク加フルニ居宅ハ崖下ニ在ルヲ以テ土地家屋ノ濕潤スル甚シキハ當然ノコトナリトス

食物 主要ナル食物ハ米ニシテ麥之ニ次クト雖モ山地ニ在リテハ耕作地面廣カラス且ツ沃地少ク氣温低ケレハ米麥豐ナラスシテ甘薯馬鈴薯ヲ以テ之ヲ

補ヘリ例ヘハ別表ニ付キテ之ヲ見ルニ碁石村大字一芻ノ人口明治三十八年七百四十五人ニシテ同年中米四百二十八石(明治十八年以來平均五百石餘)麥十五石(同平均百二十石餘)ヲ産スルニ過キス其他大豆小豆粟等モ其產數量多カラス獨リ甘薯ハ一萬六百貫馬鈴薯ハ千貫ヲ産シ同村下層人民ニハ主要ナル食物ト爲ル又山地ニハ氣温低キタメ稻ニ秕ヲ生スルコト多ク農民ハ之ヲ取り乾燥後粉ノ儘白碎シテ後之ヲ篩分シ其粉末ヲ團子ト爲シ食用ニ供ス農家ノ朝餉ハ貧富ノ別ナク殆ト皆此團子ナリト云フ(粉末ハ殆ト糖ノ如キ外觀ヲ呈ス)

副菜ハ甘薯馬鈴薯ノ外豆類野菜類等ヲ用ヒ魚肉ハ沿岸及之ニ近キ低地ニテハ比較的多量ニ食セラル、モ高地ノ僻村ニ在リテハ交通ノ不便ト生活程度ノ低キタメ食膳ニ上スコト殆ト稀ナリトス飲料水ハ低地ニ在リテハ井水ヲ用ヒ(井ハ極メテ淺シ)高地ニ在リテハ井水又ハ山腹ノ涌水ヲ用フ

習慣 結婚ハ男子十八年乃至二十四五年女子十六年乃至二十年ヲ最モ多シト爲シ血族結婚亦多カラスト稱セラル然レトモ配偶者ヲ村外ヨリ迎フルコト

稀ニシテ多クハ大字或ハ村内ニ求ムルノ習ナリトス
 幼兒ハ母乳ヲ以テ養フヲ一般ノ慣ナリトス
 其他習慣中特ニ注意スヘキモノナシト雖モ唯ツブラハ幼兒ノ衛生上注目ス
 ヘキモノナリ此奇習ハ此地方ノミナラス北越地方一般ニ存スルモノ、由ナ
 リ(俚俗ツブラ)ナルモノハ東京地方ニ於テ冬季飯櫃ヲ容ルルニ用フル所謂「オ
 ハチイレ」ノ蓋ヲ除ケルモノニ酷似シ幼兒ハ布片ヲ以テ堅ク纏塞セラレテ終
 日此中ニ在リ父母ハ冬季ヲ除クノ外終日戶外ノ勞働ニ從事シ母ハ時々歸リ
 來リテ授乳スルノミニシテ幼兒ハ兩便トモ此中ニ洩シ裸襪ノ如キモ終日甚
 シキハ二三日モ新メラルコトナシト云フ現ニ余ハ尿水ノ「ジブラ」ヨリ床上ニ
 透流シツ、アルヲ目撃セリ而シテ小兒ノ稍々生長シテ歩行シ得ルニ至ルモ
 三歳位マテハ尙ホ之ヲ「ツブラ」ニ容レ繩ヲ以テ網ヲ作り之ヲ「ツブラ」上ニ張り
 小兒ハ僅ニ頸部以上ヲ其上ニ出シ器中ニハ起坐自在ナルモ器外ニハ出ツル
 コト能ハサラシム此奇習ハ幼兒ノ健康ニ良シカラス又器械的ニ下肢ノ彎曲
 ヲ來シ所謂「ワサン」兒中ニ數ヘラル、ナルヘシ殊ニ母ノ時々歸宅シテ授乳ス

ルノ煩ヲ避クルタメニ幼兒ニ甘薯又ハ馬鈴薯ノ一片ヲ與ヘ置ク等ノコト甚
 カラサル由ナルカ此ハ幼兒ノ健康ヲ害スルコトアルヘシ
 人口ト耕作地積ノ比例 氷見郡ノ調査ニ依レハ人口ハ出產數ノ死亡數ニ著シ
 ク超過セルニモ關セス多ク増加セサルハ移住出稼者ノ多キタメナリ土地ノ
 開墾セラル、モ亦頗ル少シ是開墾スヘキ餘地ナキカ故ナラン例ヘハ熊無村
 ニテハ明治十八年ヨリ三十八年ニ至ル二十箇年間ニ人口ハ二千六百六人ヨ
 リ二千八百九十一人ニ増加シ其間ニ米田ハ二千三百九十一段ヨリ二千六百
 六十段ニ増シ畑ハ千二百四段ヨリ千九十六段ニ減シタリ又碁石村ニテハ人
 口ハ同年間ニ千九百三十七人ヨリ二千五百九人ニ増シ其間ニ水田ハ一千七
 百八十五段ヨリ一千九百九十二段ニ増セルニ過キサルニ畑ハ千九百十八段
 ヨリ一千七百五十七段ニ減セリ斯ノ如ク土地開墾ハ人口増加ニ伴ハサルハ
 此地方殊ニ山地ニ甚シク住民ハ從テ業ヲ農以外ニ求メサルヘカラサルナリ
 病地ニ於ケル家畜 余ノ踏査セル地方ニ於テハ家畜ノ數少ク猫ハ其中最モ多
 ケレトモ犬其他ノモノハ極テ少シ只北邑知村熊無村等ニ於テハ近村ニ於テ

馬ノ不用時期間所謂預ケ馬トシテ來リ居ルモノ尠カラス是等ノ家畜ハ住民ノ言フ所ニ從ヘハ骨畸形等ノ病症ニ罹ルコトナシト

(十二)

第四 尙僂病及骨軟化症ノ原因

尙僂病骨軟化症共ニ歐洲ニテハ從來知ラレタル疾病ナレトモ我國ニテハ從來ハ其存在サヘ疑ハレタル程稀有ノ病症ト信セラレタルナリ其原因ニ關シテハ兩病共ニ未タ確乎タル定説ナシ故ニ今回短日月ノ調査ニ依リ其原因ヲ擧クルコト難シト雖モ兩病共ニ地方病ノ如キ觀ヲ以テ一地方ニ簇發セルハ其例ナキコトニシテ(骨軟化症ハ一定ノ地方ニ多キ傾アルコト歐洲ニ實例アレトモ地方病ノ如キ觀ナシ)殊ニ一郡内ニ病者多キ地方ト病者少キ又ハナキ地方トヲ發見セルハ大ニ興味多キコトナレハ今兩種地方ニ於ケル生活狀態ヲ比較シ之ヲ觀察セル結果ヲ記スヘシ

乃チ尙僂病骨軟化症共ニ山地ニ多ク海岸及低地ニ下ルニ從テ漸ク消滅スルコトハ既ニ之ヲ記セリ

而シテ今低地ト山地トヲ比較スルニ左ノ如シ

住居 農民ノ家屋ハ低地山地共ニ其構造ニ於テ差違ヲ見ス只氷見町ノ商工業者及沿岸ノ漁家ニ在リテハ家屋ハ前後ニ開放シ周圍ニ樹木ナク空氣ト光線トニ不足ナク農家ニ比シ乾燥セルモノト認ムルコトヲ得

生活程度 低地ハ山地ニ比シ平野多ク地味膏腴ニシテ氣温高ク農産ノ富裕ナルハ論ヲ俟タス今之ヲ米ノ産額ニ付キテ數字ヲ以テ直接ニ現ス材料ヲ得スト雖モ明治三十五年度ノ調査ニ從ヒ加納村海ニ瀕ス(上庄村低地多シ)熊無村(二百尺乃至三百尺ノ高地)及稻積村海ニ瀕ス(余川村低地)碁石村(三百尺乃至六百尺)ニ於ケル人口、水田段別及一段平均地價ヲ示スコト左ノ如シ

村名	水田段別	平均地價(一段)	人口	人口一人ニ對スル段別	備考
加納村	二九三、〇四	四三、二四	二、〇三六	〇、一四四	低地海ニ瀕ス
上庄村	三三六、九二	四二、一五	二、九一九	〇、一一五	低地加納ニ鄰ル
熊無村	二六〇、七九	三四、六〇	二、六一七	〇、一〇〇	高地上庄ヨリ山ニ入ル

(十三)

稻積村	九七、〇四	四八、九四	九二八	〇、一〇四	低地海ニ瀕ス
余川村	一二七、三七	四二、二九	一、一九二	〇、一〇七	低地稻積ニ鄰ル
碁石村	一九六、九五	一八、四八	二、三一八	〇、〇八七	高地稻積ヨリ山ニ入ル

則チ一見シテ碁石、熊無兩村ノ如キ高地ニ在リテハ收穫ノ豊ナラサルヲ見ルヘシ故ニ是等山地ノ農民ハ副業ヲ以テ生計ヲ補ハサルヘカラス則チ一般ニ云ヘハ貧農ハ低地ニ少ク高地ニ多シ

次ニ沿岸ノ諸村ニハ漁獵ヲ業トセルモノ多ク氷見郡ニ於テ其數(明治三十五年未三千百四十一人ニシテ其同年間ニ得ル所拾壹萬五千八百五拾九圓平均一人參拾八圓餘ノ所得ニシテ之ヲ同年間ニ農業者二萬四千五百二十一一人ニテ農産收入參拾參萬參千五百參拾壹圓(耕作費ヲ去リ)一人平均拾參圓餘ノ所得ニ比スレハ漁民ノ收入ノ如何ニ大ニシテ又其生活程度ノ高キヲ推スルニ難カラサルナリ況ヤ農民ハ地租等ノ負擔重ク之ヲ除ケハ純益拾五萬五千參百八拾九圓即チ一人平均六圓五拾錢ノ所得ニ滿タサルニ於テヲヤ

氣候 氣候ハ高地ニ於テハ低地ニ比シ氣温低ク風力强ク雨多キハ言フ俟タス斯ノ如ク低地ニ在リテハ高地ニ比シ住居家屋ノ状態及氣候佳良ニシテ殊ニ貧富ノ度ニ於テ著シキ差アレハ一般生活状態ノ甲ニ在リテハ乙ニ於テヨリ概シテ良好ナルハ明ナリ且ツ山地ニ於テハ道路惡シク交通ニ過度ノ努力ヲ費シ體力ノ疲衰ヲ來シ是等、凡テ佝僂病、骨軟化症ノ素因誘因ヲ爲スモノナルヘシ

遺傳 地方住民ノ言フ所ニ從ヘハ骨畸形ヲ有スル病症(兩病ヲ含ムヘシ)ハ遺傳性ヲ有ス而シテ此事ハ未タ明言スルコト能ハスト雖モ一家一族中ニ數名ノ患者佝僂病及骨軟化症ヲ生シタルノ數例ヨリ考フレハ或ハ多少ノ遺傳性アルモノタル又知ルヘカラスト雖モ確實ナルコトハ多數ノ統計ニ依ラサルヘカラス

兩病ハ十年以後ニ増加セルヤ否 兩病ノ遠カラサル過去ニ發生セリトノ說ノ疑ハシキコトハ既ニ之ヲ論シタリ而シテ十年以後罹病者ノ數増加セルヤ否ハ素ヨリ斷言スルコト難シト雖モ租稅其他負擔額ノ增加人口ノ増加ノ田畑

ノ開墾ニ比シ過分ナルコト及物價ノ騰貴ハ貧民ノ數ヲ増シ從テ罹病者ノ數ヲ増加シタリト思考シ得ラル、ナリ

次ニ該地方ニ於テ兩病發生ノ原因ナリト稱セラル、ニ就キテ一言センニ馬鈴薯ハ其産額甚タ多カラス人口約三千ヲ有スル熊無村ニ於テ一年産額二千乃至四千貫人口二千五百ヲ有スル碁石村ニテ千乃至三千七百貫ニシテ甘薯ノ産額ニ比シテハ十分ノ一ニモ及ハス從テ馬鈴薯ハ石灰分含量少ク骨軟化症尙僂病ノ發生ニ關係アリト論スル學者アレトモ少ナクモ此地方ニ於ケル兩病ノ發生ニ關係アリトハ認メカタシ次ニ醋酸ヲ稀釋シ之ニ「サツカリ」ヲ加ヘ萬年醋ト稱シ食用ニ供スルコト此地方ニ行ハル、コト事實ナレトモ山間ノ僻村ニ在リテハ食醋ヲ調理ニ用フルコトハ冠婚葬祭ヲ除クノ外殆ト皆無ト謂フコトヲ得ヘク其兩病ニ幾何ノ關係アリト謂フヘカラス販賣セラル、醋酸ハ余ノ二三調査セルモノ及富山縣福島技手ノ検査ニ依リ醋酸ノ反應ヲ有セス善シ又多少醋酸ヲ混入シタル粗悪品アリトスルモ食用ニ供スル極メテ少ケレハ何等ノ障害ヲ起スコトアルヘカラス終リニ石油ヲ驅蟲ノ目的ニ

テ水田ニ流布スルコトモ兩病ニ何等ノ關係アリト思考シ得ス

第五 兩病ノ豫防法

兩病症トモ其原因未タ分明ナラス從テ確實ナル豫防方法ナシト雖モ一般衛生状態ノ改良ハ豫防方法トシテ最モ有効ナルモノト信ス然レトモ之ヲ根本的ニ改良スルコトハ此地方ニ於テハ言フヘクシテ行フコト能ハサルナリ先ツ住居周圍ノ伐木ニ依リテ日光ト空氣トヲ通シ家屋ノ周圍ニハ溝ヲ掘リ排水ノ法ヲ講シ障戸ヲ開放シテ室内ノ換氣ヲ良クシ光線ヲ迎ヘテ濕氣ヲ去リ其他清潔方法ノ勵行及肉食ノ獎勵ノ如キ資力ノ許ス程度ニ於テ之ヲ實行セシムル敢テ難カラサルヘシ尙ホ詳細ハ一般衛生上ノ智識ヲ以テ實地ニ就キテ漸次改良ヲ圖ラサルヘカラス

骨軟化症調査報告

富山縣氷見郡ニ於ケル骨軟化症ニ關シ東京帝國大學醫科大學教授醫學博士木下正中ノ調査報告左ノ如シ(官報六九九一號內務省彙報拔萃)

富山縣氷見郡ニ於テ佝僂病患者多數ニ發生セリトノ報告ニ依リ同病調査ノタメ內務省ヨリ富山石川兩縣下へ出張ノ囑託ヲ受ケ六月二十六日東京ヲ發シタリ福岡醫科大學教授醫學博士林春雄モ亦同時ニ囑託ヲ受ケ猶ホ其他東京醫科大學教授醫學博士田代義徳及東京醫科大學助教授醫學博士三輪信太郎モ東京帝國大學ヨリ出張ヲ命セラレタレハ便宜上各方面ヲ分チテ同時ニ調査スルコトト爲シ石川縣廳及富山縣廳ヨリハ調査ニ關スル便宜ヲ得ンカタメニ協議ヲ爲シ兩縣當局者及各郡衙警察署各村當局者ヨリ多大ノ便宜ヲ與ヘラレタリ調査ニ著手シタルハ七月一日ニシテ終了シタルハ七月十三日ナリ其間ニ於テ調査シタル部落ハ富山縣氷見郡碓石村、熊無村、十二町村、久目村、藪田村、女良村、佛生寺村、八代村、阿尾村、上庄村、宮田村、同縣射水郡二上村及石川縣羽咋郡北邑知村

大字菅池ニシテ氷見郡速川村ハ久目村ト同時ニ布勢村及神代村ハ佛生寺村ト余川村ハ碓石村ト同時ニ調査ヲ行ヘリ調査ノ分擔ハ林教授ハ主トシテ原因的關係ノ方面ニ向ヒテ調査セラレ田代教授ハ一般ニ診査ヲ爲シ三輪助教授ハ主トシテ小兒及乳兒ニ就キテ診査シ小官ハ主トシテ十五歳以上ノ婦人ニ就キテ調査ヲ爲セリ從テ後段述フル所ノ所見等ニ就キテハ他ノ同行者ノ所見又ハ意見ヲ用フルモノアリ

調査ノ方法ハ概ネ患者及疑似者ヲ一定ノ場所ニ集合セシメ分擔診査ヲ行ヒタルモ熊無村ニ於テハ特ニ同村大字熊無及大字論田ニ健康診斷的診査ヲ行ヒタリ即チ人口約千三百ニ對シ八百人ノ集合ヲ見タリ之ヲ四日間ニ診査シ了リ更ニ最終日ニ於テ已ニ診査セルモノ、中再診査ヲ要スルモノヲ集合セシメタリ小官カ各村ニ於テ診査セル患者、疑似者及健康者ノ總數ハ約六百人に達セリ其診査セシ人員内譯次ノ如シ

七月

一日	碓石村、余川村	六七人	二日	熊無村	四六人
----	---------	-----	----	-----	-----

三日	熊無村	六三	九日	久目村、速川村ヲ合ス	五六
四日	同	九九	十日	女良村	一五
五日	同	四七	十日	藪田村	一
六日	石川縣羽咋郡 北邑知村大字菅池	六九	十一日	佛生寺村、神代村、 布勢村ヲ合ス	二九
六日	熊無村再診査	二九	十二日	八代村	八
七日	碁石村再診査	一七	十二日	阿尾村	六
八日	十二町村	一六	十三日	宮田村	五
九日	上庄村	三	十三日	射水郡二上村	一七
合計		五九三			

外ニ氷見町ニ於テ同町居住者一人碁石村居住者二人ノ診査ヲ爲セリ
 以上診査セル者ハ主トシテ十五歳以上ノ女子ナレトモ便宜上時トシテ幼兒及
 男子ヲモ診査セリ

第一回ニ碁石村ノ調査ヲ行ヘル際ハ調査スベキ疾病ノ大體ニ涉リテ觀察スル

ヲ以テ目的ト爲シタルヲ以テ全員三百餘人ニ達シ内十五歳以上ノ女子ノミニ
 テモ七十ヲ超エタリ而シテ其所見ノ結果ヲ綜合スレハ佝僂病ノ存在ハ疑ナキ
 モ骨軟化症初期ノ症狀トシテ疑ヲ容ルベキモノ懃カラス且ツ二三重症ニシテ
 歩行シ得サル者ヲモ認メタルモ骨ニ於ケル畸形ハ極メラ著大ナラザリシ
 次テ熊無村ノ調査ヲ爲スニ當リテハ同村大字中村ニ於ケル一患者ニ就キテ骨
 ノ畸形著明ニシテ殊ニ内診上骨盤畸形ノ定型ナルヲ見ルニ至リテ確實ニ骨軟
 化症ト診定スルヲ得從テ碁石村等ニ於ケル畸形少キモノモ亦骨軟化症ノ比較
 的輕度ナルモノナルコトヲ定メ得ルニ至レリ依テ其後ハ主トシテ骨軟化症ノ
 諸症候ニ向ヒテ調査ヲ爲シ其結果骨軟化症ト診斷セルモノ別表ノ如シ
 佝僂病ハ田代教授三輪助教授ノ調査ニ依ルモ最幼者ハ既ニ齡三箇月ノ乳兒ニ
 發シ五六歳以下ノ幼者ニ多シ年齡既ニ七八歳ヲ超ユルモノハ概ネ多少ノ畸形
 ヲ殘スモ既ニ本病ヲ經過セルモノ多シ小官ノ診査セルモノ、中ニモ確ニ同病
 ヲ經過セル痕跡ヲ存スルモノアリ田代教授及小官カ同時ニ診査セシモノニシ
 テ年齡四十四歳ノ男子某十二三歳ノトキ角力ノ際損傷ヲ蒙リ爾來左腰部ニ膨

隆ヲ來セリト稱スルモノ、如キハ純然タル佝僂病ノ痕跡ニシテ本人ノ述フル如ク十二三歳ノ時外傷ニ依リテ招來シタル變化ニアラスシテ其機會ニ於テ始テ之ヲ認メ爾來多少變狀ノ進歩ヲ來シタルモノニ他ナラサルベシ其他猶ホ此ノ如キモノヲ目撃シ或ハ其存在ヲ傳聞セルモノアルカ故ニ佝僂病ノ存在ハ最近十年以後ニ限ラス其以前ヨリ存在セルモノナルコトヲ推定スルヲ得ヘシ然レトモ其患者數ノ多少ニ至リテハ推定ヲ下スニ困難ナリトス

佝僂病ノ症狀ハ田代三輪兩氏ノ調査ニ依ルモ一般ニ既ニ記述セラレタルモノト大差ナキカ如シ其畸形ヲ呈セルモノハ多ク人ノ注意ヲ惹クモ然ラサルモノハ只羸弱ナリトシ歩行開始ノ遲延、生齒ノ遲延ノ如キモ皆羸弱ノ結果ト爲シテ怪マス僅ニ吾人ノ注意ヲ受ケテ恐ヲ懷クモノ、如シ且ツ兩氏ノ診査ニ依ルニ男女兩性ニ於ケル罹病數ノ關係ハ殆ト相等シト云フ此等ノ諸點ニ就キテハ兩氏ノ調査尙ホ完結セサルモノアリ孰レモ學術報告トシテ公ニセラル、ノ日アルベキヲ以テ略シテ述ヘス

前述ノ如ク骨軟化症ノ存在ヲ確メタルヲ以テ爾後小官ハ主トシテ同症ノ調査

ニ從事セリ

骨軟化症ハ既ニ歐洲ニ於テ研究セラレタル所ニ從ヘハ成年女子ニ多ク殊ニ妊娠、產褥ノ經過中ニ發病セルモノ多ク幼兒男子ノ本病ニ罹ルモノ極メテ稀ナリトス今回ノ調査ニ在リテモ多ク女子ヲ侵スコト一轍ニ出ツルモ娩産ト連關スルモノ甚タ少ク全數九十五人中一、四七、アロセント十四人ヲ出テサルナリ田代教授ノ調査ニ從ヘハ本症患者ノ最幼者ハ三歳ニシテ小官ノ診査セル四年以前ヨリ本症ニ罹レル六十三歳ノ婦人ヲ以テ最老年者トス本病ニ罹レル者ノ大多數ハ現在年齡十六歳乃至二十歳ノモノニシテ之ニ次クモノハ二十一歳乃至二十五歳ノ者ナリトス此二者ヲ合算スレハ全患者數ノ半ヲ超ユベシ而シテ發病以來ノ年數ハ二三年ナルモノ最モ多ク最長ハ二十年最短ハ三箇月ナリトス故ニ大多數ハ女子生熟期ニ達スル前後數年ニ於テ本病ニ罹リタルモノト謂フヘシ

本病ノ原因トシテ列舉セララル、モノハ濕潤陰暗ナル住居、殊ニ寢室、同様ナル工場、濕潤セル場所ニ於ケル勞働、胃濕換氣ノ不良、過度ノ勞働、營養ノ不給、頻數ナル

妊産長時ノ授乳等ナリトス是等諸點ノ關係ハ林教授ノ調査報告アルベク且ツ
 田代三輪兩氏ノ調査意見ヲモ參照セラル、コトヲ要スヘキモ小官ノ見ル所ヲ
 以テスレハ住居殊ニ寢室ノ陰暗ニシテ濕氣ニ富ムハ一般ニ見ル所ナリ又過度
 ノ勞働長時ノ授乳等モ亦實際ニ原因的關係ヲ有セサルカ如キヲ見ル然レトモ
 一般生活狀態ニ就キテ殊ニ營養ト勞働トノ關係ニ至リテハ他地方トノ比較ヲ
 爲スニ甚ク困難ナリトス此點ニ就キテハ生産ノ狀況生活ノ程度等ヲ精細ニ調
 査スルノ必要アリトス田代教授ハ地質ノ關係ヲモ顧慮セラレタルカ如シ飲料
 水ハ多クハ硬水ニシテ石灰分其他亞爾加里屬ヲ含ムコト多キモノ、如シ地質
 ハ一般ニ云ヘハ粘土ニシテ山間掌大ノ地ヨリ水田ヲ成スヲ得ルカ如キ狀況ナ
 レハ從テ濕地ト稱スルヲ得ヘク且ツ防風ノタメニ宅地林ヲ設ケ窓戸ヲ少クシ
 防寒ノタメニ雪覆ヲ爲スカ如キハ住居ヲ陰暗ナラシメ換氣ヲ不良ナラシムル
 コト多大ナリトス殊ニ夏期ニ至リテモ雪覆ヲ除去セサルモノ甚タ多キヲ見ル
 本症發生ノ年齡ハ上述ノ如ク女子成熟期ノ前後ニ在ル者多シ從來泰西ノ調査
 ニ依レハ妊産ト關係アルモノ多キハ普ク承認セラレタル事實ナリ其關係ハ妊

妊産婦ニハ身體ニ營養ノ供給ヲ要スルコト大ナルニ際シ營養ノ不給又ハ勞働
 ノ過多ナルトキニ本病ヲ發スルモノナルベシ故ニ女子成熟期ニ於ケル身體ノ
 發育ハ旺盛ヲ極メ營養ノ供給ハ多大ナラサルヘカラサルニ其供給ノ不充分ナ
 ルト勞働ノ過多等ハ本病ヲ誘起スルニ與リテ力アルモノナルベシ
 碁石村池田村長ノ言フ所ニ據レハ本病ノ發生ハ女子就學督勵後ニ著シト爲シ
 其冬期積雪難澁ノ山路ヲ通學シ冷濕ナル衣服ト身體トヲ以テ暖ヲ取ルノ遑ナ
 ク机椅ニ倚リ業ヲ受クルノ己ムヲ得サルニ至ラシムルハ大ニ本病ノ發生ヲ助
 クルモノナルヘシト云ヘリ此所說モ亦多少考慮スヘキモノナルベシ
 其他發病ノ原因トシテ今日マテ歐米ニテ認メラレタル所ノモノ、多數ハ本郡
 各村殊ニ多數ノ患者ヲ有スル部分ニ於テ之ヲ認メタルコト上述ノ如シ氷見郡
 ノ或ル部分ニテハ本病ヲねばやまひト稱ス方言ねばハ二三女以下ヲ稱シ二三
 女以下ニ多ク見ル所ノ疾病ナリトス而シテ其發生ハ最近十年間ニ在リトシ二
 度薯ト稱スル馬鈴薯ノ食用或ハ食料用トシテ万年酢(氷醋ヲ稀釋シタルモノ)ノ
 使用等ヲ以テ原因ト爲サントスルモノ、如シ此等ノ點ニ就キテノ詳細ナル調

查ハ前ニ述ヘタル如ク林教授ノ報告ニ讓リテ爰ニ述ヘサルモ將來充分ノ研究ヲ爲スベキノ餘地アルヲ信ス

骨軟化症ノ初發症狀トシテハ足關節又ハ膝關節ノ疼痛及歩行殊ニ坂路階段ノ昇降ニ際シ不安ノ感アルヲ常トス然レトモ此等ノ症狀ハ扁平足ヲ有スルモノニモ招來シ得ヘキモノニシテ扁平足ハ著シキ原因ナクシテ山地ノ住民ニ多キモノナレハ(佝僂病)骨軟化症ノトキニモ扁平足ヲ來スコトアリ(初發症狀ノ診斷ハ容易ナラサルナリ而シテ若シ膝蓋腱反射ノ亢進起坐ノ困難等ヲ伴フトキハ既ニ骨軟化症ノ初期ト考フルヲ得ヘク歩行ノ拘攣性ニシテ不確ト爲リ步調ノ小ト爲ルヲ見筋肉ノ攣縮時トシテハ纖維性拘攣ヲ見上腿下腿ノ骨竝ニ骨盤ニ壓痛ヲ覺ユルニ至リテハ本症ノ初期ト診定スルヲ得ヘキナリ

本症ニ固有ナル骨疼痛ハ上述ノ如ク通常膝關節又ハ足關節ニ始リ下腿又ハ上腿ノ骨ヨリ延テ骨盤又ハ胸廓ノ諸骨ニ及ヒ甚シキトキハ頭蓋顔面ノ諸骨喉頭軟骨ニモ之ヲ呈スルコトアリ初期ニ於テハ多クハ壓痛ナレトモ咳嗽嘔吐欠伸高笑等ノ如キ劇シキ呼吸運動ニ依リテ痛アルコトアリ從テ淺キ呼吸運動ヲ爲

スヲ要シ從テ呼吸頻數ト爲ル猶ホ軟化セル骨ノ畸形ヲ發スルタメニ呼吸困難尿利困難等ヲ來シタルヲ見タリ高度ニ軟化セル骨ハ觸診上又一種ノ硬度ヲ有シ靱軟トモ云フベキ狀ヲ呈スルコトアリ

症狀ノ劇甚ナルモノハ歩行困難ヲ伴ヒ強テ杖ニ倚リ又ハ障壁ニ便リテ歩行シ或ハ苦痛ノ最モ少キ一定ノ位置ニ坐臥スルタメニ畸形ヲシテ一層甚シカラシムルモノアリ又體重ノタメニ骨ハ一般ニ壓平セラレ身長著シク減スルモノアリ甚シキハ六七年間ニ著衣ノ長サ六寸ヲ減セルモノアリ患者ノ訴フル所ハ晝夜間斷ナキ疼痛ニシテ殊ニ症狀ノ進ミタルモノニテハ一舉手モ亦疼痛ヲ増進スルノ原因ト爲リ尿利便通皆人ノ手ヲ藉ルトキハ多大ナル疼痛ヲ忍ハサルヘカラス僅ニ困難ナル自己ノ働作ニ依リテ使用ヲ爲シ以テ疼痛ヲ輕カラシムルコトヲ勉ム故ニ同情ヲ以テスル扶助モ患者ニ對シテハ苦痛ヲ増スニ止マルノミ診查ノ際モ總テノ働作ヲ患者自身ノ爲スニ任シ敢テ扶助ヲ加フルコトナク患者ヲシテ苦痛ヲ感スルコト少カラシムルコトヲ務メタリ

畸形ハ四肢ノ長骨ニ來ル者ヨリモ却テ骨盤諸骨又ハ胸廓諸骨ニ來ル者著シ殊

ニ強テ歩行ヲ試ミタル如キ重症者ニ在リテハ骨盤ノ畸形最モ大ニシテ主トシテ坐臥セル者ニハ胸廓ノ畸形大ナリ合併症ハ屢々呼吸器疾患腎臟炎等ヲ來スカ如キモ小官ノ診査セルモノニハ輕度ノ氣管枝炎ヲ認メタルモノアル外檢尿ノ違ナカリシヲ以テ腎臟疾患ノ確診ヲ得ス只碁石村大字一列ニ於テ診査シタル一女子ハ望診上全身浮腫ヲ認メタルヲ以テ腎臟炎ニ對シテ注意スヘキコトヲ同行ノ地方醫師ニ告知セリ

本病ハ輕症ノ間ニ於テ適當ナル治療ヲ施シ營養及其他ノ生活狀態ヲ佳良ニシテ勞働ヲ輕クセハ治療ノ目的充分ナルベキモノナルヲ信ス然レトモ重症ニシテ既ニ諸骨ニ畸形ヲ呈セシカ如キモノニ至リテハ假令本病ハ治療スルモ殘存セル畸形ヲ治セシムル事ハ殆ト不可能ナルヘシ且ツ本病經過中合併症ヲ誘起セル者ニ在リテハ之カタメニ不幸ノ轉歸ヲ取ル者少シトセス現ニ氷見郡ニ於テモ住居等ノ關係比較的ニ良好ナルモノト思惟セラル、一二ノ患者ニ於テハ多少ノ輕快ヲ認メタルモノアリ然レトモ治療ノ關係ニ就テハ短時日ノ調査ヲ以テ今日自己ノ經驗ヲ述フルヲ得サルヲ以テ小官ノ伴ヒタル患者(現今一人猶ホ

二人上京ノ筈ニ就キテ治療ヲ試ミ其結果ハ學術報告トシテ公表スルノ機アルヘキヲ信ス

本病ノ發生ヲ少クスルタメニハ一般衛生狀態ヲ佳良ニシ家屋ノ構造殊ニ換氣光線ノ射入ヲ佳良ニシ濕潤ヲ少クスルコトニ留意シ營養勞働ノ諸點ニ注意シ殊ニ女子成熟期ニ達スル前後及妊娠產褥ニ對シテ營養ノ供給勞働ノ減少ヲ圖リ本邦一般ノ習慣ナル長期授乳ヲ禁スル等ハ目下切要ナル注意ナルヘク既ニ本病ヲ發セル者ニ對シテモ藥劑の治療法ノ他ニ病室ノ換氣光線ノ射入寢具ノ清潔乾燥皮膚清潔營養品ノ供給等ニ注意ヲ爲スコトヲ要ス殊ニ輕症ノ者又ハ疑診アル者ニハ勞働ヲ制限シ營養ニ注意スルコトヲ要スルコト大ナリトス依テ小官ハ田代教授ト協議シ氷見町ヲ去ルニ臨ミ本病及佝僂病初發ノ症狀ト其攝生法トニ向ヒテ二三ノ注意ヲ與ヘ弘ク知悉セシムルノ方法ヲ講セラレタキ旨ヲ以テ之ヲ氷見郡長ニ呈供セリ

猶ホ調査結了ノ後富山縣知事及第四部長ニハ本調査ノ概略及本病調査又ハ治療防禦計畫ニ關シ一二ノ意見ヲ述ヘタリ

富山縣下氷見郡及石川縣羽咋郡ニ發生セル

奇病調査第二報拔萃 (三輪醫學博士)

(第十一回日本小兒科學會所演)

原因的關係

間接原因若クハ誘因ハ提擧スルコトヲ得レドモ直接原因ニ至リテハ全ク不明ナリ誘因ハ歐洲ノ載籍ニ就テ學ブ如ク其土地ノ不衛生ナル状態ノ綜合ハ本病ヲ產生スルモノナリ其地ハ山間ニ僻在セルヲ以テ交通不便ニシテ食物ノ含窒物ニ乏シキヲ免レス又生活程度概シテ低キヲ以テ衛生上不備ノ點枚擧ニ遑アラス就中家屋ノ構造ハ防寒ニ偏シテ過大ノ注意ヲ拂ヒタル爲メ光線射入ノ不足ト換氣ノ不良トヲ具ヘ且ツ住家ノ周邊ヲ繞スニ樹木ヲ以テシテ而シテ資産ノ多キ大家ハ巨大ナル喬木ノ中空ニ聳ユルヲ誇トナス慣習ハ益々光線ヲ遮リ又家屋ノ傍近ニ溜溜セル水ハ屋内ノ濕潤ヲ招致スル等林博士等ノ記載ニ詳カナリ

今ヤ余等ハ佝僂病ノ發生スル地勢及富ノ程度ニ大ナル關係ヲ有スルコトヲ學ビ

得ルナリ即チ既ニ知ル如ク富山縣ニ於ケル病者ノ率ハ碁石五〇%論田三〇%熊
 無一五%氷見町一%強ナリ(三十九年七月五日四五時間ニ某寺院ニ於テ約五百人
 検査ス院内立錐ノ地ナシ余等ハ啞科醫トシテ最上ノ光榮ヲ擔ヒタル日ナリ林博
 士福井市ノ大月氏國田醫士ノ援助ヲ鳴謝ス)而シテ地勢ヲ説ケハ氷見町ハ海ニ瀕
 セル平坦ノ地ニシテ碁石ハ海面ヲ抜クコト最モ高ク論田ハ之ニ次キ熊無最モ低
 クシテ平地ニ近シ故ニ交通不便ナル土地ニ尙僂病者多シ又富ノ程度ハ氷見町最
 モ富ミ熊無論田ノ順序ニテ碁石ハ最モ貧シト云フ故ニ貧キ土地ニ本病者多シ次
 ニ石川縣ニ於テノ病者率ハ菅地一、〇%強神子原六、七%弱千石九、一%弱飯山町
 被驗者四十七人中疑似症一人ノミ而シテ地勢ハ菅池最モ高地ニシテ論田ニ境シ
 樹木繁茂シテ陰鬱ナリ神子原千石漸ク平地ニ近ク稍々開豁ナリ飯山町ニ至リテ
 ハ全ク平地ナリ富ノ度ハ菅池最モ富ミ次ニ神子原ヨリ千石ノ順序ト云フ故ニ石
 川縣ニ於テハ富山縣ノ如ク説破スルニ適セズ然レトモ大體ニ於テハ交通不便ナ
 ル山間ノ僻地及貧困ニシテ衛生上ノ不備ナル場所ハ本病ヲ誘發スルコトヲ證シ
 テ餘リアリ

本病ノ直接原因ニ就キテハ從來諸家ノ臆説多シ就中オッペンハイメル氏等ハ本
 病ヲ麻刺利亞ノ一種類トナシ或ハ同病ニ聯關シテ本病來ルトナス是レ脾臟ニ重
 キヲ措テ立論セルナリ然レトモ余等ハ尙僂病ノ小兒自個或ハ其兩親ノ麻刺利亞
 ニ罹リタルコトアルヲ問診上ニ於テ發見セズ隨テ麻刺利亞ト本病トノ關係ヲ認
 メ得ザルナリ尙ホ直接原因ニ就キテハヘノッホ氏ノ言ヲ借リテ局ヲ結バントス

Die sorgfältigsten anatomischen, experimentellen u. Chemischen

Untersuchungen haben das Dunkel, welches diese umgab noch nicht gelichtet

* * * * *
 Dass es in unserer Zeit nicht an Autoren fehlen würde, welche die Raehitis auf eine infectiöse
 Quelle zurückführen, sei es nun eine Malaria od. eine Infection durch gewisse (pyogene) Coccen,
 ist begreiflich, aber derartige Befunde sind noch keine Beweise.

救治策

一般衛生状態ノ不良ナルヲ矯正スルニアリ即チ或ハ宅地林ヲ斫リ或ハ疏水ヲ良
 クシ或ハ乳兒つぶら籠居ヲ節制シ或ハ離乳期ヲ早ヤメ或ハ乳兒ノ授乳時間ヲ正
 確ナラシムル等研究セル諸家ノ説ニ依リテ實行スベシ藥劑ハ今猶ホ磷劑ソノ聲

頭圍胸圍關係表第二號(女)

	健康兒(三嶋氏)			佝僂病兒			検査人数
	頭圍	胸圍	胸圍ノ差	頭圍	胸圍	胸圍ノ差	
一月	36.5	36.0	-0.5	-	-	-	-
二月	38.5	38.4	-0.1	38.0	35.2	-2.8	1
三月	38.7	38.6	-0.1	-	-	-	-
四月	39.7	40.2	+0.5	39.7	39.5	-0.2	1
五月	41.0	41.1	+0.1	-	-	-	-
六月	41.6	41.6	±0	39.5	39.7	+0.2	1
七月	42.0	42.0	±0	-	-	-	-
八月	42.2	42.2	±0	43.8	43.9	+0.1	2
九月	42.8	42.9	+0.1	-	-	-	-
十月	43.3	43.3	±0	-	-	-	-
十一月	43.8	43.8	±0	-	-	-	-
一年	43.4	44.4	+1.0	45.4	40.5	-4.9	4
二年	44.2	46.2	+2.0	46.9	45.0	-1.9	4
三年	46.9	47.2	+0.3	46.4	44.8	-1.6	2
四年	47.5	48.6	+1.1	47.5	44.0	-3.5	2
五年	48.4	49.8	+1.4	-	-	-	-
六年	48.7	51.9	+3.2	50.0	51.5	+1.5	1
七年	49.4	53.0	+3.6	-	-	-	-
八年	45.5	54.0	+4.5	-	-	-	-
九年	50.0	56.1	+6.1	48.0	49.5	+1.5	1
十年	50.5	58.0	+7.5	-	-	-	-

頭圍胸圍關係表第一號(男)

	健康兒(三嶋氏)			佝僂病兒			検査人数
	頭圍	胸圍	胸圍ノ差	頭圍	胸圍	胸圍ノ差	
一月	36.9	36.3	-0.6	38.9	36.2	-2.7	3
二月	38.6	38.6	±0	-	-	-	-
三月	39.4	39.6	+0.2	-	-	-	-
四月	40.5	41.3	+0.8	37.7	35.2	-1.5	1
五月	41.4	41.9	+0.5	41.2	38.5	-2.7	2
六月	42.3	42.5	+0.2	44.0	40.0	-4.0	1
七月	42.8	43.0	+0.2	45.2	42.0	-3.2	1
八月	43.5	43.5	±0	45.0	43.0	-2.0	1
九月	44.0	44.0	±0	43.0	39.9	-3.1	1
十月	44.3	44.3	±0	45.0	41.8	-3.2	1
十一月	44.9	44.9	±0	-	-	-	-
一年	44.6	45.7	+1.1	45.6	41.3	-4.3	5
二年	45.8	46.8	+1.0	48.5	45.2	-3.3	5
三年	47.8	48.1	+0.3	51.4	47.6	-3.8	3
四年	48.8	46.5	+0.7	50.0	43.1	-6.9	1
五年	49.0	50.5	+1.5	-	-	-	-
六年	49.6	52.7	+3.1	-	-	-	-
七年	50.4	54.1	+3.7	-	-	-	-
八年	50.6	55.5	+4.9	-	-	-	-
九年	50.8	57.2	+6.4	-	-	-	-
十年	51.1	59.2	+8.1	-	-	-	-

價ヲ失ハサルナリ曾テ千八百九十八年余等ノ一人ハ現今ハルレ大學教授タル所
ノステエルトネル氏ト共ニ研究セル如ク磷ハ「ラヒチス」ノ特效藥ニ非ルモ有力ナ
ル藥劑ニシテ之ヲ肝油ト伍シテ使用スベシ

佝僂病兒症候總計表

場 處	人 數	ロンソ ンセラ	帶 狀 薄	胸 型		鼓 胸	四角 頭	O 脚	X 脚	キ ホセ	ロ ト ル セ	骨 腫 端 脹	腰 彎 骨 曲	ス コ リ セ
				鳩胸	漏斗胸									
石川縣	16	13	6	11	—	13	5	10	2	5	3	14	9	5
合 計	16	13	6	11	—	13	5	10	2	5	3	14	9	5
富山縣	9	6	3	5	—	9	6	4	—	4	2	3	5	3
石 田	15	15	4	4	—	13	5	10	—	8	2	5	10	6
基 論	6	6	2	1	—	6	5	5	—	3	—	4	4	0
熊 水	5	5	2	—	—	4	5	2	—	2	—	3	2	0
無 見	35	32	11	10	—	32	21	21	—	17	4	20	21	9
合 計	51	45	17	21	0	45	26	31	2	22	7	34	30	14

症 候 % 表

ロー セン ラ グ ン ツ 状	健康兒 (富山)		佝僂病兒 (石川)		健康兒 總 計		佝僂病兒 總 計		約 二 倍
	帶 狀	胸 胸	帶 狀	胸 胸	帶 狀	胸 胸	帶 狀	胸 胸	
帶 狀	49.4%	91.4%	27.2%	81.3%	43.3%	86.4%	約 十 倍		
鳩 胸	26.6	31.4	42.8	37.5	34.7	34.5	約 三 倍		
胸 胸	3.2	27.2	6.4	68.8	4.8	48.5	約 八 倍		
斗 角	6.9	0	4.3	0	5.6	0	約 九 倍		
頭 頭	32.9	91.4	45.7	81.3	39.3	86.4	約 十 倍		
脚 脚	13.8	60.0	14.9	31.3	14.4	45.6	約 十 倍		
脚 脚	10.8	60.0	11.7	62.5	11.3	61.3	約 十 倍		
X 脚	0.6	0	1.0	12.5	0.8	6.3	約 十 倍		
キ 脚	7.6	47.2	2.2	31.3	4.9	39.3	約 十 倍		
ホ 脚	0	11.4	5.3	18.8	2.7	15.1	約 十 倍		
ル 脚	3.8	57.1	4.2	87.5	4.0	72.3	約 十 倍		
骨 端	6.9	60.0	0	52.5	3.5	56.3	約 十 倍		
腰 彎	0	25.7	0	31.3	0	28.5	約 十 倍		

一年以下佝僂病兒症候總計表

	人員	%	比	較
總計	19	194.7		
ローゼン克蘭ツ	18		稍	同
帶狀溝	6	31.6	稍	同
鳩胸	5	26.2	著	少
漏斗胸	0	0	稍	同
鼓腸	18	94.7	稍	同
四角頭	8	42.1	稍	同
O脚	14	73.7		
X脚	0	0	無	
キホーゼ	10	52.6	多	
ロルドーゼ	2	10.5	少	
骨端腫脹	5	26.2	甚	少
脛骨彎曲	11	57.8	稍	同
スコリアーゼ	6	31.6	稍	同

富山縣下ニ於ケル所謂奇病ニ就テ (田代醫學博士)

(東京醫學會九月例會ニ於テ所演)

次ニ原因論ニ移リマス佝僂病及ヒ骨軟化症ノ原因ニ就テハ唯今述ヘル通り殆ント同様ノコトカ云フテアル是ハ諸君カ書物ヲ見ラレル通り總テノ不衛生ノ状態ハ兩疾病ヲ誘起シ得ルノテスソコテ此原因ヲ論シマスルニハ勢ヒ地勢ノコトニ就テ述ベナケレハナラヌ氷見郡ハ不等三角形デアツテ能登及加賀ニ接スル境界ハ最モ長ク西礪波及射水兩郡界ハ最モ短クシテ共ニ悉ク山岳疊重タリ唯海ニ面シタル一方カ平地ニナツテ居ル氷見ノ人ノ言フニ氷見郡ハ恰モ扇子ノ形ヲ呈シテ居ル而シテ氷見町ハ其要メトモ見ルヘキモノテアル茲ヨリ諸方ニ向ヒテ溪谷ガ幾筋モアル其谷ノ間ニ村落カアル私共ガ最先ニ研究シタルハ氷見町カラ三里隔テ、居ル基石ト云フ村デアル其所デ研究シテ又氷見ニ歸ツテ今度ハ熊無ト云フ村ニ行クト云フヤウニ村落ト村落ト悉ク山脉ヲ以チ界サレテ居ツテ其各村落ヘ行クニハ氷見ヲ起點トシテ行カネハナラヌ即チ氷見町ヲ扇子ノ要メト云フ所

以ダツレカラ郡ノ最西北隅ニ女良村ト云フノガアルガ其所ハ山ガ峻クテ車ガ通
 ゼヌカラ氷見町カラ海ヲ行クノデスアトハ氷見町ヲ根據トシテ何レノ村落ヘモ
 赴クコトヲ得ルノデス此村落中ヲ流ル、川ハ平時ハ涸レテ居ツテ氷見ニ近付ク
 ニ隨テ水ガ多少アル位デアリマス富山縣ノ一體ノ位置ハ北緯三十六度十六分ヨ
 リ同五十八分東經百三十六度四十六分ヨリ同百三十七度四十五分トナス丁度世
 界地圖デ比較シテ見ルト大略チブラルタル……埃及カラズト伊太利ノ最南端
 位デアアル此緯度ヲ知ルコトハ病理地理學上必要ノコトニナツテ居ル何トナレバ
 佝僂病ハ例ヘハ歐羅巴及亞米利加ニハ多クシテ亞非利加ニハ殆ンドナイ亞細亞
 ニモ稀有ナレバ埃地利亞ニモ同様ナリト云フ從ヒテ黑人ニハ殆ンドナイコトニ
 ナツテ居ル又匈牙利及西班牙ノ「チゴイネル」人種ニモ之レ無シトノコトデアアルソ
 レカラ黃色人種ハ今日マデハ殆ント無イト考ヘラレテ居ル要スルニ黃色人ニモ
 黒色人ニモ一般ニ先ツ詮索不完全ノ爲メ分ラスコトニナツテ居ル兎ニ角佝僂病
 ハ多少地理學上ノ關係ヲ持ツテ居ルト同時ニ人種的影響モ之レアルト認メラレ
 テ居ル先ツ氷見ノ地方ハ亞米利加ヲ除キテハ佝僂病ノ稀發スル緯度ニ居ルノデ

アリマス即チ我日本全體カ然ルノデアリマスソレカラ氣候ハ佝僂病及骨軟化症
 ニ關係アルコトハ地理的關係ト同シク諸君御承知ノコトデアリマスカラ唯一班
 ヲ述ヘテ置キマス濕度ヲ東京ト比較スルト伏木ニハ觀測所ガアリマスカラ其所
 ノ成績ト比較シテ見ルト越中ノ伏木ハ日本國中デ濕度ノ最モ著明ナ所デ其所ノ
 濕度ハ八十二デ東京ハ七十六デアリマス越中ノ濕度ノ多イコトハ日本デ有名デ
 アル

ハーゲンハッハ Hagenbach ニ據レバ佝僂病ハ濕度八〇%以上ノ地方ニハ殆ンド規
 則ノ如ク其發生ヲ見ルガ七〇%以下ノ地方ニハ今日迄同病ヲ實驗セラレタルコ
 トナシトアル今伏木ハ八二%東京ハ七六%デアアルカラ伏木ヲ距ル二里ノ位置ニ
 在ル氷見町地方ハ大變佝僂病發生ニ適當ナル土地ニナツテ居ル氷見地方ト同一
 若クハ稍々夫以上ノ濕度ヲ有スルハ南方ノ臺灣ト北方ノ北海道デアリマス而シ
 テ兩地方トモニ佝僂病ノ報告ガアリマス(今裕臺灣醫學會雜誌第四十五號、田中收、
 醫事新聞第六百五十四號)

又雨雪量モ随分多イ伏木テハ一年間ニ氣象學上快晴ト認ムヘキ日カ十六日シカ

ナイ之ニ反シテ東京デハ六十日以上アル其位彼ノ地方ハ雨量ノ多イ所デアル此表ハ参考ニナリマシヨウカラ御覽ニ入レマス

平均濕度 測候所

- 八六 襟裳
- 八四 澎湖島
- 八三 伏木(射水郡ニ屬シ氷見町ヲ距ル約二里)
- 八二 福井、上川
- 八一 石垣島、秋田、宗谷、釧路、網走
- 八〇 臺中、大分、石卷、山形、宮津、函館
- 七九 臺南、宮崎、松本、熊本、水戸、彦根、高山、札幌、今津、壽都、新潟、輪島
- 七八 八木、青森、長野、横須賀、境、銚子、布良
- 七七 那覇、津、大島、長津呂、佐賀、宮戸、福岡、京都、岐阜、飯田、宇都宮、松山
- 七六 臺東、嚴原、下關、廣島、多度津、金山
- 七五 鹿兒島、長崎、岡山、高知、名古屋、熊谷、上勝、濱松、横濱、東京、甲府、濱田

七四 大阪、徳島、沼津、福島、吳、新居濱

七三 佐世保、前橋、味野、足尾

七二 和歌山

七一 神戸

(明治三十九年東京天文臺曆ニヨル)

一年間ノ平均温度ハ伏木十三、三ニシテ東京ハ十三、六九デスカラ左程違ヒマセヌカ雨雪量ト湿度ハ大變違ツテ居ル即チ書物ニ書イテアル如ク此土地ハ佝僂病ヲ誘發スル所ノ資格カアル

次ニハ土質デス土質ハ佝僂病ナリ就中骨軟化症ニ多少關係アルコトニナツテ居ル例ヘハ獨逸邊デモ骨軟化症ハライン地方(第四期新層)ニ多イ併シナカラ其他ノ地方ニモアルコトニナツテ居ルカ兎ニ角ライイン地方ガ有名ニナツテ居ル佝僂病モ病理地理學ノ上カラ見ルト多少土地ト關聯シテ居ルト認メネハナラス夫故ニ氷見郡ノ地質モ見ナケレハナラス是ハ私カ地質學教授小藤博士カラ借リタ地質圖デアリマス越中國土性圖ヲ示ス此圖ニ據レハ氷見郡地方ノ最大部分ハ第三紀

層ニ屬スルモノデアリマシテ僅ニ海岸ニ近キ最小部分ノ氷見町附近ノミ第四期新層ニ屬スルノデアリマス小藤教授ノ談話ヲ聞クニ此第三期層ハ東京ノ駿河臺邊ノ高地デ第四期新層トハ本所深川等ノ低地ヲ云フノダソ一德斯唯併シナガラ氷見郡ハ恐ラク火山ノ痕跡ガ多イダロート云フコトデス歐羅巴ノ何處邊ニ似テ居ルカト云フトネヤフル邊ニ似テ居リハセヌカト云フコトデス其點ハ余リ私ノ説明ニハ都合好クナイデスナゼカト云フト尙僂病ハ上伊太利ガ多イ南ノ方ニ行クニ從ヒ減スル故ニ瑞西ノ方ニ近キ伊太利ニハ非常ニ多イネヤフルノ方ハ「ズツト」南ダカラ尙僂病ハ必ズアリマシヨウガ兎ニ角伊太利中デ尙僂病ノ非常ニ多イ土地デナイ要スルニ地質ニ付テハ第三紀層ニ屬スルト云フ丈デ特ニ注目スベキ事ハナイヤウデアアル但シ北海道及臺灣ノ大部分ハ均シク此第三紀層ニ屬スルノデアアル尙此質ニ就テ云フベキハ氷見郡地方ハ殆ンド全部細微土ヨリ成リ砂子ノ現存極メテ少シ即チ理學的性質上水分ヲ濾過スル性質ニ乏シイ夫故ニ水分ガ土地ニ多イ是ハ實地我輩ガ同僚諸君ト共ニ氷見郡地方ヲ歩イテ見タバカリデモ分ル例ヘハ大字論田ト大字熊無ノ間ハ明治二十三年大陷落シタコトガアル又同二

十七年ニモ同シク陷落アリタリト云フ即チ地層ガ非常ニ濕氣ニ富ンデ居ルコトハソレデ以テモ分ルデアアルカラ海拔二七七尺ノ高サニ位キスル熊無村ノ山ノ高イ所ニ水田ヲ作ルコトガ出來ルノデアアル是等ハ通常濕氣ハ骨軟化症ニモ尙僂病ニモ多大ノ關係ヲ持ツテ居ルコトニ多クノ學者ガ始終注目シテ居リマスカラ若シ誘因ト云フナラバ濕氣ニ富メル地質モ一ツ數ヘ舉ゲテ然ルベキト考ヘマス次ニハ住居デアリマス住居ハドウ云フ風ニナツテ居ルカ總テ濕氣アル住宅ハ尙僂病及骨軟化症ヲ誘發スルコトニナツテ居ル氷見郡ノ村落ノ家屋ハ多クハ主ハラ防寒的ニ出來テ居ツテ一方ニ入口ガアル丈デ裏及側方ニハ窓ハナイ造方ニナツテ居ルサウシテ裏ハ直グ斷崖ニナツテ居ツテ其間ハ多クハ僅カニ四五尺シカ隔テ、居ナイ又家ノ周圍ニハ通常數多ノ立木ガアルシ炊事其他ノ惡水ガ始終溜ツテ居ルシ爲メニ家屋ノ周圍ガ非常ニ濕潤シテ居ル又窓ガ少ナイカラ空氣ノ流通日光ノ射入ガ惡ルイコトモ分ル是等モ矢張歐羅巴デ云フ尙僂病ノ誘因ニ極メテ適當シテ居ル唯考ヘナケレハナラヌノハサウ云フ家屋ハ獨リ氷見郡地方ニ特有ナル譯デハナクシテ我北國地方ニハ總テ同シク例ヘハ富山縣ニシテモ氷見郡

以外ノ各村落ハ皆サウデアアル冬期ハ家ノ周圍ハ藁ヲ以テ圍ヒニスルヤウニナツテ居ツテ寒氣ヲ充分防グコトニナツテ居ル隨テ室内ガ濕氣ヲ帶ビテソレヲ乾カスベキ何等ノ設備ヲモシテ居ラヌ是等ハ書物ニアル佝僂病ノ誘發ノ原因ニ能ク適合シテ居ルノデアリマス

次ニ食物デアリマス粗悪ナル食物ハ佝僂病ナリ骨軟化症ニ關係アルコトモ書物ニアルデ食物ハドウカト云フト是ガ此土地ニ常用セラル、食物ノ標本デアリマス(米、麥其他數種ノ實物ヲ示ス)此食物ノコトニ就テ尙ホ述べマスルト彼ノ土地デハ十年以來馬鈴薯ガ一年ニ二回取レル極メテ經濟ノ品デアルト云フノデ作り出シテカラ佝僂病ヲ發シタト云フノデアリマス是ハ佝僂病發生以來有名ナ薯ニナツテ居ル米ナドハ随分悪ルイ米ヲ食ベテ居ル總テ此標本ヲ以テ見レバ随分粗悪ナル食物ヲ用ヒテ居ルコトガ分ル此土地ハサウ云フ風ニ粗悪ナル食物ヲ用ヒテ肉食ハシナイ之ニ付テ斯ク云フ滑稽ナ話ガアル牛ト云ツテ食ベヌガ「ギウ」ト云フト折々食ベルコトガアルト云フ其位佛教ノ盛ンナ所デアリマシテ鶏卵サヘ食ヘルノヲ好マナイト云フコトデス兎ニ角窒素分ヲ攝取スルト云フコトハ「チヨット」

ムヅカシイ所デアリマス海ハ何レノ村落ヨリスルモ丁度三里以内デアリマスガ魚ヲ食ベル者ハ少ナイ相當ノ家デモ一週間ニ一二回乾魚デモ食ベル位ライサウ云フ風ニ大体粗悪ナル食物ヲ取ツテ居ルノデアリマス

因ニ述べテ置クガ此度佝僂病ガ現ハレタニツイテ何カ特種ノ原因ガアリハセスカト色々質問セラレタ結果十年以來デハ先ヅ馬鈴薯ノ食用ガ著明ナルモノデアルト云フ所ヨリ或ハ馬鈴薯ガ原因デハナキカナド噂シタルナリ其他木酢ノ食料ニ應用セラレタル稻田ニ石油ヲ撒キタルコトナドモ近年ノ事ナリト云ヘリ何レモ取留メタル原因ナラサルハ云フ迄モナシ

次ニ飲料水デス是ハ私自身検査シマセヌガ水ハ皆確カニ悪ウゴザイマス此水ノ悪ルイノハ氷見町ガ一番悪イ村落ノ方ハ横穴ヲ作り又ハ井ヲ堀リ若クハ直チニ山ノ水ヲ取ツテ居ルガ兎ニ角飲料水ハ大體ニ於テ悪イト考ヘテ宜イソレカラ勞働ノ劇シイコト是ハ最モ骨軟化症ノ誘因トナツテ居ルガ此土地ノ勞働ハ主ハラ農業デアアル此地方ハ確カニ劇シイ郡役所書記ナドノ考ニ依ルト他郡ニ比シテ二割五分餘計ニ働クト云ツテ居ルサウシテ特ニ婦人ノ勞働ハナカク劇シイノデ

アル此土地ノ勞働ノ劇シイコトハ耕地面積ト人口ノ比例ニテモ證明スルヲ得ベシ氷見郡ハ富山縣中最モ人口稠密ノ所デアアル隨テ非常ニ働カナケレバ生存競争ニ勝ツコトガ出來ナイノデアアル故ニ此土地ノ人ハ確カニ社會的生存ニ非常ニ困難シテ居ルト想像スルコトガ出來ル是等モ誘因ト云フコトガ出來ル參考トシテ左ニ一節ヲ抄録ス

耕地配付ノ狀況ヲ見ルニ現住戸數ハ十四萬五千七百七十八戸ニシテ内農業及兼業戸數ハ八萬八千三百八十九戸ナリ然レバ一戸ニ對スル配當耕地反別縣下平均田八反五畝三步畑一反八畝步餘即チ田畑合計一町二反一畝五步餘ニ當レリ之ヲ關西並ニ四國地方ニ於ケル諸縣ノ現狀ニ照セバ大ナル逕庭アルヲ見ル今各郡ニ細別スレバ左ノ如シ
農戸ト耕地トノ割合

一戸ニ對スル耕地配當反別

郡名	田	畑	合計
----	---	---	----

上新川	一、〇七二七	二二〇六	一、二八二三
高岡市	八二四	一〇一七	一八四一
東礪波	七一一〇	三五一六	一、〇六二六
富山市	六二二八	八一〇	六九三八
西礪波	九三一〇	一〇〇一	一、〇三一一
中新川	一、〇〇一〇	九一八	一、〇九二八
射水	九四一七	一〇〇四	一、〇四二一
氷見	五六二二	二八〇三	八四二五
婦負	一、七〇〇〇	三九二四	二、〇九二四
下新川	八二一六	九〇四	九一二〇

以上ノ耕地配當表ヲ見ルニ富山市高岡市ハ耕地面積ニ比シ其一戸配當反別ノ比較的多數ナルハ是レ農業兼業者アル爲メナルヤ明ナリ又氷見郡及下新川兩郡ハ山嶽高峯ニ富ミ地勢農工ニ適セズ從テ耕地少キニモ拘ラズ人口比較的稠

密ナルニヨリ總面積ノ割合ニ對スル配當反別ハ少キヲ見ル更ニ各郡別總面積ト耕地及人口ノ割合ヲ舉クレハ左ノ如シ

各郡總面積耕地及人口表

郡名	面積	耕地	地	一方里中人口數
東 礪 波	六九 <small>方里</small>	一、四六四	八 <small>町</small>	一、四一三
西 礪 波	四一	一、四一五〇		二、四六三
氷 見	二六	六四五〇		三、一五二
射 水	二〇	一、〇七一		四、五九八
婦 負	三四	一、一八一六		二、二二八
上 新 川	三三	一、〇八三〇		一、五六九
中 新 川	四六	一、一五〇六		一、九四三
下 新 川	三〇	一、二一九五		三、九五四

以上ノ事實ニ徴スルニ本圖内ニ在リテハ一農戶配當反別一町步以下ニアルモ

ノハ僅ニ下新川及ビ氷見兩郡ノミニシテ其他ハ孰レモ一町步内外ニ相當ス之ヲ關西地方ノ一戸配當僅ニ七反步内外ノ田畑ヲ耕作スル農家ノ經濟ニ準據スレハ遙ニ餘裕アルベキノ感アレトモ是レ單ニ皮想上ノ觀察ナリトス抑モ本圖幅内ハ北海ニ面スルガ故ニ冬期互寒甚シク積雪數尺ニ及フコト往々ニシテ冬作ハ必スシモ安全ヲ期スヘカラサルニ反シ關西地方ニアリテハ地位低濕ナラサル以上ハ總テ二毛作或ハ三毛作ノ行ハレサル所ナク從テ其土地使用程度ノ頻繁ナル田圃ノ一反步ハ能ク本圖内耕地ノ二反步或ハ三反步ニ相當スベシ其結果農家ノ平均收益ニハ兩者敢テ甚シキ懸隔ナキカ如シ(越中國土性圖説明書十九頁―二十三頁)

其外尙ホ北國ノコトデアルカラ冬季三ヶ月間ハ皆部屋ニ籠城シテ居ルサウシテ戸外へ出ルコトハ殆ンドナイ殊ニ子供ナトハ戸外ニ出ナイデ暗イ部屋ノ内ニ終日居ルコトニナツテ居ルソコデ尙僕病ノ發生ニ就テ近頃最モ新シク論シテ居ルハンゼマン U. Hansmann ナドハ即チ尙僕病ト云フモノハ小兒カ自由ニ動カナイデ暗イ所ニ居ルト起ルト云ツテ居ル其起ル工合ガ恰モ動物園ニ飼養サレテ居ル自

由ニ運動シタリ空氣ヲ充分ニ呼吸シタリスルコトノ出來ナイ動物ニ尙僂病ガ起ルト同様デアルフノ文明ガ進ンダ國ニナルト下層社會ノ子供ハ戶外ヘモ出ナイデ終日臺所ヘ押込メラレテ居ル其結果尙僂病ヲ起スノデアルト云フテ居ル此事ハ余ガ留學當時直接ハンゼマンカラ聽イテ居ル……ハンゼマンハ日本人ニハ尙僂病ハナイト云フガ生レテ間モナイ日本動物園ニ飼ツテアル猿ヲ見タイ其猿ハ必ズ尙僂病ニ罹ツテ居ルニ相違ナイト曾テ小金井教授ガ盡力サレテハンゼマンニ東京動物園長石川氏ヨリ以上ノ條件ニ適當スル猿ヲ送ツテヤツタガソレニハ尙僂病ガ輕微ナレトモ慥カニ認メラレタリトアル兎ニ角ハンゼマンハ赤子ノ時代ニ戶外ノ運動ヲセズ又新鮮ナル空氣ヲ吸ハナケレバ何等人種ニモ何處ノ邦國デモ尙僂病ハ起ルト斷定シテ居ルデ氷見郡地方ノ赤子ハドウカト云フト動物園ニ居ル猿ノ如クデアアル即チ尿屎ニテ汚レタル襪襪ニ包マレタル儘例ノ藁籠ノ内ニ容レラレツ、アルナリ併シナガラソレバカリ考ヘルト氷見郡ノ尙僂病ハ容易ク説明ガ付クガソレデハ他ノ寒國ハドウシテ居ルカ越後邊デハ矢張同ジク冬期中家ノ内ニ籠ツテ居ル又ツブラモ用フルノデアアル又氷見郡以外ノ富山縣各郡ハ

同シキ生活状態ニ居ルノデアアルカラ此ノ如ク數ヘ舉タラ誘因ト認ムベキモノ、ミヲ以テ直ニ氷見郡ニ於ケル尙僂病ノ發生ヲ説明スル譯ニハ參リマセヌ併ナガラ兎ニ角氷見郡ニ於ケル狀況ハ書物ニアル尙僂病ヲ誘發スベキ條件ハ悉ク備ヘテ居ルト云フテ宜イ其外尙僂病ニ付テハ微毒又ハ結核ガ多少誘因ニナルト云ツテ居ルガ不思議ニモ氷見郡地方ニハ微毒ハ稀有ト見エル私ハ熊無村デ七八百人健康診斷ヲヤツタガ微毒患者ヲ一人シカ認メマセヌデアアルカラ微毒ガ尙僂病ノ發生ニ大關係ヲ有スルト云フコトハ少クモ氷見郡ニ於テハ直チニ證明スルコトハ出來ナイ併シ今日微毒ノ絶無ナリト云フ村落ハ必ズ之無キコトハ勿論デス結核モ少ナイ熊無村ノ或大字ニハ結核病者ガ殊ニ澤山アルト云フ話ガアツタガ其所ニハ却テ尙僂病ハナイト云フコトデアアルカラ結核ナリ腺病質ガ尙僂病ノ原因ニナルト云フコトハ云ヘナイ少クトモ氷見郡デハ之ヲ否認スルコトガ出來ル尙僂病ト微毒ノ關係ハ學者ニ依テ非常ニ熱心ニ主張スル人ガアリマスカラ特ニ茲ニ揚言シテ置キマス或ハ「マラリヤ」ガ尙僂病ノ誘因若クハ原因ニナルトカ或ハ同一ノ疾病デアアルダロト云フテ居ルモノモアル併ナガラ却テ氷見郡ノ山

ノ方ノ尙僂病ノ多イ所ニハ「マラリヤ」ガナイ十二町村ト云フ所ガアル此所デ「マラリヤ」病人ヲ一二人見タ併ナガラ十二町村デモ矢張山ノ方ニ尙僂病人ガ多クシテ「マラリヤ」ノ存在スル平地ノ部落ニハ却テ無イダカラ原因的ニ結付ケルコトハ出來ナイ併シナガラ尙僂病ニ就テ「マラリヤ」ノ關係ヲ考ヘタノハオツベンハイメル Openh eimar デアルガ此人ノ論文ハ非常ニ面白ク思ツテ讀ンダ兎ニ角「マラリヤ」ハ關係ナシト信ズ又「レウマチスム」患者ナドモ餘リ認メナカッタ

以上枚舉シタルカ如ク尙僂病若クハ骨軟化症ニ就テ從來書籍上ニ於テ誘因ト認メテ居ルモノハ悉ク此地方ニ備ツテ居ル併ナカラ最後ノ直接ノ原因ニ至ツテハ矢張分ラヌデス

ソレデ其問題ハ先ツ此位ニシテ然ラバ此氷見郡地方ニ於ケル尙僂病ナリ骨軟化症ハ何年頃カラアルカト云フ問題デアル土地ノ人ノ意見デハ是ハ十年以來始ツタ病氣デアルト云フコトニナツテ居ル三十、四十、五十歳位ノ人ガドウシテモ自分達ノ子供ノ時分ニハナカツタト云フテ居ルソコデ縣廳ノ人ヤ有識ノ人ガ行ツテ然ラバ十年以來何カ土地ニ變ツタ事ガアルカト聞クト村民ノ答デハ變ツタ事ト

云フノハ曩キニ述ベタ位デアアル今左表ヲ以テ最モ注意スベキ熊無村及碁石村ニ於ケル人口増殖土地開拓及農産物産出ノ比例ヲ示シマシヨ

村名	年 度	人 口	民有反別	米	雜 穀	馬鈴薯	甘 薯
氷見郡碁石村	明治二十八年年度	一、九三七	七、七八八	二、四五九	一、二二八	一、九九七	三四、一二九
	明治三十八年度	二、五〇九	八、三二一	二、〇〇三	七二八	三、三五〇	三八、四〇〇
氷見郡熊無村	明治二十八年年度 <small>但農産物ハ三十一年度</small>	二、六〇六	五、二一三	四、五八〇	一、五〇五	三、二二二	七、六二〇
	明治三十八年度	二、八九一	五、三六九	四、一九九	五九三	二、〇〇〇	二四、〇〇〇

熊無村デハ明治二十八年ニハ薩摩芋ノ出來高カ七千六百二十貫デ馬鈴薯ガ三千二百十二貫デアツタノガ三十五年ニハ甲ハ二萬四千貫ニ上ツテ乙ハ二千貫トナツテ居ル碁石村ハ二十八年ニ薩摩芋ガ三萬四千二百二十九貫馬鈴薯ガ千九百九十七貫ノ出來高デアツタモノガ三十八年ニハ甲ガ三萬八千四百貫デ乙ガ三千三百五十貫ニナツテ居ルデ馬鈴薯ナリ薩摩芋ノ増シテ居ルコトハ確カデアアルサウシテ表デ示ス如ク人口ハ増シテ居リ乍ラ米ハ比較的増シテ居ラヌ米ハ賣ツテ仕舞

ツテ甘藷及馬鈴薯ヲ多ク食スルト云フコトハ事實ニ相違ナイ此馬鈴薯ト云フコトハ歐羅巴ノ書物ニモ本病ノ原因論中ニ注目サレテアル然レトモ既ニ學者一般ニ認メ居ルガ如ク總テ食料品ト云フモノハ佝僂病ナリ骨軟化症ニ付テ左程著大ナル價值ハナイト考ヘラレ居ル即チ随分澱粉ヲ持ツテ居ル食物ガ宜イトカカルルヲ澤山持ツタ物ガ宜イトカ或ハ其反對ニ少ナイノガ宜イトカ食物ニ付テハ議論ガ區々ニナツテ居ル兎ニ角サウスルト矢張ドウシテモ是ハ十年以來ノ疾病カドウカヲ定メナケレバナラヌソレハドウ云フ風ニシテ我々ハ定メタカト云フト勢ヒ健康診斷ヲヤツテ大人又ハ老人ニシテ佝僂病ノ痕跡ヲ有シテ居ル者ヲ見付ナケレバナラヌ五十歳ノ老人ニシテ痕跡ヲ有シテ居ル者ガアレバ數十年前ニアツタコトヲ判斷スルコトガ出來ル理屈デアル故ニ出來ル丈各階級ノ年齢ノ人ヲ澤山集メテ調べテ見レバ宜イト思ツタノデ最初ヨリ多數ノ病者アリトノ故ヲ以テ世人ノ注目ヲ惹キ居レル熊無村ヲ四日程掛ツテ非常ナル骨折ヲシテ健康診斷ヲヤツタ併シナカラ其成績ハ餘リ良クナカッタト云フモノハ所謂健康病者中ニ於テ幼時ニ於テ經過シタリト認ムベキ佝僂病者ヲ發見シナイ僅カニ見タノハ二

十歳ノ男子デ是ハ「キホースコリオーゼ」ニナツテ居ル尤モ佝僂病性「キホースコリオーゼ」ハ多少普通ノソレトハ違ツテ居ル尤モ臨床的デ精確ニ診斷ハ出來マセヌガ兎ニ角此患者ハ「キホースコリオーゼ」デアリマシタ今一人ハ偶然ニ佝僂病ノ子供ヲ連レテ來タ母親デ四十五歳ニナル極メテ著明ナル「キホースコリオーゼ」ヲ呈シテ居ル是ハ何時頃カラ始ツタカ知ラナイト云フコトデス二十歳ノ方ハ確カニ幼年時代カラ斯フ云フ風デアリマスト云フノデスガ兎ニ角此二人ハ此土地ニ於テ十年前ヨリ存在シタルナルベシト考フル佝僂病ノ痕跡ト認ムルモノデアリマス(圖書第五類A、B、參照)二人トモ寫眞ヲ取リマシタモ一人ハ阿尾村ト云フ村デ見マシタガ是ハ木下教授モ同時ニ見ラレマシタ確カニ佝僂病性脊椎側彎デアルト思ツテ居ルガ其寫眞ハ種板ヲ破ハシテ仕舞ツタノデ殘念ナガラ御覽ニ入レルコトハ出來マセヌ兎ニ角年ヲ取ツタモノニ脊椎側彎ト認ムベキモノガアツテ確カニ書物ニ書イテアル「ラヒチス」性ト云フモノニ似テ居レハ此土地ニ於テ十年前ニモ佝僂病ガアツタモノト云ヘヤウト思フ尙此事ニ就テハ更ニ木下教授カラ述ヘラレルト思ヒマスカ私ハ古ルクカラアルモノデアアル古クカラアルガ土地ノ

人ノ云フ如ク此十年以來カ或ハ十二三年以來カ何レニシテモ近年ニ至ツテ増劇シタモノデアラウト云フ考デアリマス併ナカラ尙僂病ハソウ云フ風ニ突然多數ニ發生シテ急ニ増加スルモノカト云ヘバサウ云フ例ハアル例ヘハ初メテ英吉利デ尙僂病ヲ千八百六十五年ニグリッソンガ研究シタ時代ニ一時ニ澤山アツタノデ研究委員ガ出來テヤツタ所ガ尙僂病ノ診斷ヲ下スコトガ出來タ兎ニ角流行性ノ如ク發生シタモノト認メテ宜イデアリマスカラ我邦ニ於テモ矢張氷見郡ニ於テ尙僂病ガ十數年來非常ニ澤山増シテ來タコト、考ヘテモ間違ナイト思ツテ居ル又實際サウダト信スル例ヘハ諸君ニ御廻シ申シタヤウナ尙僂病ノ著シキ脚ノ彎曲ハ子供ノ時分彼ノ如キ彎曲ガアツタラ老年ニ至ツテモ多少殘ラヌコトハナイ例ヘハ膝内彎ナリ膝外彎ナリ扁平足ナリ殘ラナケレバナラヌニソレガ無イ私人ノ検査シタハ哺乳兒カラ七十歳マデノ者デ八百人程検査シテ居ル其中ニ是ハ確カニ舊時ノ尙僂病ノ著明ナル變化デアラウト思フノハ今寫眞ヲ御覽ニ入レタ外ニナイノデアアル併ナガラ茲ニ於テ注意スベキハ尙僂病的ノ彎曲ハ然ラハ永久ニ殘リ得ルカドウカ是ハ歐羅巴ノ學者ノ經驗ニ依ツテ見ルト或程度マデハ彎曲ハ

著シク直ル尙僂病ノ子供ニ於ケル膝内彎ナリ膝外彎ハ自然ニ矯正スル然ラバ悉ク自然ニ治癒スルカト云ヘバサウハイカヌ現ニ多數ノ患者ヲ見タ「クリニッタ」ノ報告ナドニ依ルト最モ重イ尙僂病ノ彎曲ノ七五%位マデハ自然ニ四五年位ノ間ニ治スル併ナガラ殘餘ノ二十五%ハ全ク治スル譯ニイカヌサウスルト諸君ニ御廻シシタ様ナル高度ナル尙僂病ノ彎曲ガ十年ナリ二十年前ニ熊無村ニアツタナラ今日ト雖モ多少ハ其痕跡ガ必ズ殘ツテ居ラナケレバナラヌ然ルニ僅カニ二三人以上ニハ全ク認メラレスノデアリマスカラ十年ナリ十五年以前ニハ稀ナモノデアツタガ近年ニ至リテ急ニ殖ヘタモノデアロウト考ヘルガ當然デアルト思フ現ニ尙僂病ノ彎曲ハ獨逸ノ學者社界ニ於テモ外科臨床家中ニハ子供ノ時分ノ彎曲ハ自ラ直ル愈々七八歳ニナツテ治サヌケレバ初メテ手術スルト云フ説ガアル併シ中ニハソレト反對ニ子供ノ時分治療シナケレハナラヌト云フ人モアリマスカ多數ハ待ツテ居ルガ宜イト云ツテ居ルデアリマスカラ尙僂病ノ古ルイ痕跡ヲ調出スルニハ以上ノ點ヲ注意シナケレハナラヌ然ラハ何ノ原因デ近來ニ至ツテ本病ガ此ノ如ク多數ニ増シタカ此増シタコトニ付テハ直接ノ理由ヲ明答

スルコトハ出来ナイ然シナカラ矢張私ノ考テハ何故ニ急ニ近來増シタカハ第一
 病症ノ劇烈ナルコトソレカラ食物ノ粗惡ナルコト勞働ノ過度ヲ加ヘタルコト其
 外或ハ土地ノ開墾ガ多少關係シテ居リハセヌカト云フ考テアリマス土地ノ開墾
 ノ狀況ハ勿論年々人口ガ増シテ行キマスルシ從ヒテ土地ガ段々拓ケテ行ツテ居
 ル是ハ確カニ明言シテ置ク民有地ガ増シテ居ル(民有反別表ヲ見ヨ)デアルカラサ
 ウ云フ事ガ何カ關係シテ居リハセヌカト云フ考デアリマス先ツ急ニ増シタラウ
 ト思フコトハ以上ノ三點ヲ捉ヘテ居ル次テアリマス或土地ノ村長ハ佝僂病ガ女
 子ニ多イノハ小學校ガ盛シニナツタ結果デアルト説テ居ル其結果脚ノ曲ル病氣
 ガ殖ヘタノデアラウト云ツテ居ツタガ是ハ多少考ヘテモ宜イガ併シ以上ノ三點
 デモ直接佝僂病ノ原因ヲ説明スルコトハイカヌ今日マデノ「リテラツール」ヲ見タ
 リ病人ナドヲ見テ佝僂病ノ直接原因中最モ信ズベキハ何カト云フト私ハ傳染説
 ヲ以テ最モ適當ナルモノトシテ賛成スルノデアルドウモ傳染病デアラウト考ヘ
 マス此傳染デアラウト云フ考ハ最モ古ク考ヘタ人モアル併ナカラ中頃他ノ學説
 ニ壓倒セラレテ多數ノ學者ハ先ヅ顧ミナイオッペンハイメルガ今日ヨリ二十年

前ニ披露シタ即チ佝僂病ノ原因ハ從來何モ分ツテ居ラヌ臨床上ノ徵候ヲ精細ニ
 考量シテ見ルト「マラリヤ」ト同ジデアラウト云ツテ居ル其外佝僂病ノ原因ニ就テ
 例ヘバ殊ニ伊太利ノ學者ハ佝僂病或ハ骨軟化症ニ就テ「バクテリヤ」ヲ持出シテ是
 ガ佝僂病ノ直接ノ原因デアラウト云フテ居ル尙ホ曾テ三輪博士ト共ニ獨逸ニ於
 テ佝僂病ヲ研究サレタス「シュネル」Stöckert云フ人ノ考テハ何カ毒物ニ因ルト
 云フ考テ是ハ胸腺ヲ罪シテ居ル「バクテリヤ」デアラウト云フコトハ伊太利ノ學者
 ガ一二云ツテ居ル併シ普通ノ「アイテル」コツケン「ガ佝僂病ノ原因ダト云フテ動物
 試験マデシテ居ル私ニハ何レノ有機體カ分ラヌガ兎ニ角微菌デアラウト云フ考
 ヲ起シテ居ル例ヘハカソウキツツ「Kessowit」ガ佝僂病ノ變化ハ或毒物デアツテ炎症
 ヲ起スノデアラウト云フテ居ル唯今數ヘ舉ゲタ誘因ト認ムベキモノデハ此土地
 ノ佝僂病ノ發生ノ説明ハ出来ナイデ私ノ考テハ何カ土地ガ開ケテ其爲メニ土地
 ト關係ヲ有シテ居ル毒物ガアルノデハ無キカト思フテ居ル矢張從來ノ人ノ云フ
 例ヘハ「ミヤスマ」ナリ何カ一種ノ生活シテ居ル毒物ガアツテ佝僂病ナリ骨軟化症
 ヲ發生スルノデアラウト思フ骨軟化症ニ付テモ微菌説ヲ唱フルモノガアルカラ

兎ニ角骨軟化症ト尙僂病ガ同一ノ原因デアラウト考ヘテ居ル其考カラ私ガ富山病院ニ於テ四人程血液ヲ検査シテ見テ其培養基ヲ宮本叔君ニ頼ンデ見テ貰ヒマシタ即チ私ガ前ニ述ベタ悪性ノ尙僂病デアラウト思フ患者ノ血液ヲ採ツテ種ヘテ見タ其中ニ二ツ程生ヘマシタ是ハ「アイテルコッケン」ガ生ヘタ普通ノ「スタヒロコック」スアウレユス「ト」アルプス「ガ」生ヘタガ宮本君ノ意見デハ恐ラク是ハ偶然ニ生ヘタノデアラウト云フノデス併シ全ク純粹ノ培養デ生ヘテ居ルガ之ヲ以テ直ニ何等ノ結論スルコトハ出来ナイガ兎ニ角血液中若クハ骨髓ノ中カラ血液ヲ採ツテ見ル必要カアル伊太利ノミルコリー *Mircoli* ハ死體カラ採ツタノデアリマス私ノ考デハ最終ノ原因ハ尙僂病及骨軟化症トモ微菌デアラウト云フ考デアアル面シテ恐クハ關節「レウマチスム」ト同ジヤウニ何レカラ分ラヌカ兎ニ角何レカラカ微菌カ這入ツテ尙僂病及骨軟化症ヲ起スト思ヒマス此土地デハ關節「レウマチスム」ハ見ナイ唯一人藪田ト云フ村デ骨軟化症ニ關節「レウマチスム」ヲ兼テ居ルノヲ見タノミデ其外ニハ見マセヌ以上ハ最終ノ原因トシテ傳染性ト云フ考デアリマスガ勿論此傳染ト云フ事ガ多少ノ根據ヲ得ルト云フコトハ是ハ尙ホ長イ間ノ

研究ヲシテ見ナケレバ分ラヌノデス唯私ガ殊ニ興味ヲ感ズルノハ此骨軟化症ト尙僂病トハ確ニ姉妹病デーツデアアル原因ハトウカ兎ニ角同様ナ病氣デアルト思ハレル例ヘハ尙僂病ニ就テ有名ナ書物ヲ書イタフヨイヤオルト *Verolth* ハ尙僂病ト骨軟化症ハ或同一ノ場所ニ發生スルソレ故ニ同一病デアルト考ヘル輩ガアルガソレハ間違ツテ居ル尙僂病ハ到ル處ニアルガ骨軟化ハ稀ナル病デアアル是ガ偶偶極メテ普通ニ存在スル尙僂病ト同一ノ場所ニ發生シタ處デアルト考ヘテハナラスト然ルニ我國ニ於テハ尙僂病ハ今日散存性ニハ之レアルト云フコトニナツタカ併ナガラ此ノ如ク或場所ニ纏ツテ澤山ニアルト云フコトハナイ其所ニ又不思議ニモ從來我邦ニ於テ絶無ト云ハレタル骨軟化症ガ纏ツテ居ル是ハ偶然ト云フ事ハ出来マイト思フ此度ノ狀況カ歐羅巴ニ知レタラ歐羅巴ノ學者ハ原因上多少注意ヲ惹クト思ヒマス尙ホ熊無村ノ健康人ノ表モアリマスガ子供ノ身長ノ發育ノ惡イト云フコトハ確實デアリマス此事ニ就テハ今日ハ時ガナイカラ述べマセヌ此點ハ私ト同行致シマシタル中原徳太郎及川室貫治ノ兩君ガ熊無村及基石村ノ検査ノ際身長、胸圍、腹圍トカ總テノ計算ニ付テ最モ盡力サレテ測ラレタ夫等

ノ表モアルガ是ハ諸君ニ御覽ニ入レル必要ナイト思ヒマスカラ御覽ニ入レマセ
 スガ他ノ地方ノ健康ノ子供ト其土地ノ健康ノ子供トドウ云フ比較ニナルカハ其
 表デ示スコトガ出來ル尙ホ傳染說ニ就テハ川室君ニ頼ンテ脾臟ヲ見テ貰ツタガ
 脾臟ノ腫脹ガ傳染病ノ症候ト云フテ居ル人ガアルカラデアノ例ヘバ尙僂病ノ小
 兒ニハ脾腫ガ六〇%七〇%ハアルト云フ人モアリ又殆ンドナイト云フテ居ル人
 モアリマスカ川室君ノ検査シタ所デハ大多數ハ脾腫ハ缺ケテ居ル其點ハ私ノ「イ
 ンフエクチオンステオリー」ニハ不便ニナツテ居リマスガ傳染病ト云ハル、モノ
 デ脾腫ノ缺ケテ居ルモノモアルカラ是ハ妨ケナイト思ヒマス其寫真ハ尙僂病及
 ヒ骨軟化症ノ二人ヲ出シタ家屋デ相當ノ身分アル者デアアル尙僂病ハ必ズ貧民ノ
 ミナラズ中産ノモノニモアルト云フコトヲ示ス爲メニ寫シタ寫真デアリマス(家
 屋ノ寫真ヲ示ス)ソレカラ此「レントゲン」ノ寫真二葉ハ富山病院ノ杉部學士ガ寫シ
 タノデ是ハ一ハ尙僂病兼骨軟化症デアラウト云フ患者ノ前膊デアリマス能ク見
 ルト骨質ノ「アトロヒー」ガ分明デアアル(圖書第六類參照)他ハ又跟骨或ハ脛骨下端ハ
 石灰分缺乏ノ爲メ眞白ニナツテ居ルコトガ分ル(下腿ノ「レントゲン」寫真ハ東京醫

事新誌第千四百七十二號杉部廉氏論文中ニ掲載セラル就テ參照アレ以上ガ私ガ
 今日諸君ニ申上ゲヤウト思ツタ點デアリマス尙詳細ニ且リテハ更ニ報告スル考
 デアリマス

富山縣奇病論拔萃

(緒方醫學博士著)

(六十八)

第六章 該病ノ豫防法

凡テ或ル疾病ニ就キ之レガ豫防法ヲ講スルニ當リテハ必ス先ツ其原因ヲ探リテ之レヲ確定シ次テ其原因ト認ム可キモノヲ遠ケ若クハ之レガ原因物ヨリ遠カ
ル可キ方法ヲ取ラザル可カラズ而シテ骨軟化病及ビ佝僂病ニ就キテハ今日ニ至
ルマデ未ダ正確ナル原因ヲ發見シ能ハサルハ勿論今回世人ノ注目ヲ牽キシ氷見
郡及ビ其附近ニ於テ此兩病ガ殆ンド地方病ニ發生セシコトノ原因如何ニ就イテ
モ亦今日ニ於テ遺憾ナガラ漠然トシテ毫モ歸著ス可キ點ヲ發見シ得ザルナリ故
ヲ以テ氷見郡地方ニ就キ如何ナル方法ヲ行ハバ果シテ此地方病の蔓延ヲ撲滅シ
或ハ少クトモ之レヲ減退セシムルコトヲ得可キカノ問題ニ關シテハ殆ンド良策
ヲ案出スルコト能ハザルナリ

佝僂病及ビ骨軟化病ハ歐洲ニ於テハ未ダ曾テ吾氷見郡ニ於ケルガ如キ甚ダシ
キ地方病性蔓延ヲ來セシコトナキヲ以テ成書及ビ文獻ヲ案ズルモ一地方一般ニ

施ス可キ公衆的豫防法 *Offentliche Prophylaxis* ニ關シテハ毫モ記述セル所アラス只個
人的豫防法 *Private Prophylaxis* ニ就イテ少シク説ク所アルニ過ギズ而シテ個人的豫
防法トシテハ住屋ノ採光換氣ニ注意シ乳兒ニアリテハ人工營養法ヲ廢シテ母乳
若クハ乳母ノ乳ヲ給シ冷濕ヲ避ケ海水浴ヲ命ズル等身體一般ノ健康ヲ高ムル方
法ヲ獎勵シ殊ニ骨軟化症ニアリテハ久時ノ授乳及ビ頻回ノ妊娠等ヲ避ケシムル
等ヲ以テ其主要ナルモノトナスニ過ギズ

今回調査ノ命ヲ帶ビテ東京醫科大學並ニ内務省ヨリ氷見郡及ビ其附近ニ出張
セシ林春雄(332)田代義徳(333)ノ如キモ本病ニ對スル豫防法トシテハ同シク成書
及ビ文獻ニ記載セラレタル彼ノ個人的豫防法ノ事項ノ實行ヲ本地方ノ住民ニ向
ヒテ建築セシニ過ギサルモノ、如シ即チ林春雄(334)ノ説ク所ニヨレバ一般衛生
状態ノ改良ハ豫防方法トシテ最モ有效ナルモノト信ズ然レドモ之レヲ根本的ニ
改良スルコトハ此地方ニ於テハ言フベクシテ行フコト能ハザルナリ先ツ住居周
圍ノ伐木ニヨリ日光ト空氣ヲ通ジ家屋ノ周圍ニハ溝ヲ堀リ排水ノ法ヲ講シ障戸
ヲ開放シテ換氣ヲ良クシ光線ヲ迎ヘテ濕氣ヲ去リ其他清潔法ノ勵行及ビ肉食ノ

(六十九)

獎勵ノ如キ費用ノ許ス程度ニ於テ之レヲ實行セシムル敢テ難カラザル可シト
 林春雄ノ此建築ハ理論ノ上ニ於テハ今日ノ所謂尙樓病及ビ骨軟化病ニ對スル
 豫防法トシテ先ツ上乘ノ意見ト認ム可キモ悲イカナ此ノ如キ事項ハ本地方ノ住
 民ニ對シテ一モ實行シ得ラル可キモノニ非ズ即チ當地方ニ於テ家屋ノ周圍ニ喬
 木ヲ密植シ且家屋ノ牖窓ヲ可及的少ナクスルノ慣習アルハ全ク防寒上ノ必要ニ
 出テタルモノニシテ冬季ニ至リ最多風向タル南西ノ風常ニ白山嵐ノ烈風トシテ
 吹き至リ窓紙ヲ破リ障子ヲ挫キ裂隙ヨリ吹き入り其寒氣實ニ言語ニ絶シタメニ
 牖窓等ハ冬期間殆ンド其雨戸ヲ密閉シテ之レニ備ヘザル可カラス故ニ如何ニ窓
 ヲ多ク設クルモ冬期ハ毫モ採光ノ用ヲナサザルナリ殊ニ時々紛々タル雪片ヲ捲
 キテ吹き來レバ壁若クハ雨戸ヲ閉サシタル牖窓ニ於ケル殆ンド見ル可カラザル
 裂隙ヨリモ雪粉ヲ吹き入レテ屋内ニ積雪ヲ見ルヲ常トス此ノ如キコトハ都會若
 クハ他ノ温暖ナル地方ニ住スルモノ、殆ンド想像スベカラザル所ニシテ當地方
 ニアリテハ冬期間此烈風ト雹雪ノ吹き入ルコトヲ防ガンタメニ殆ンド凡テノ手
 段ヲ盡スノ止ムヲ得ザルナリ故ニ林春雄ノ說ノ如ク家屋ノ周圍ニ於ケル樹木ヲ

伐リ障戸ヲ開放シ若クハ日光ノ射入ヲ佳良ナラシム可ク牖窓ノ面積ヲ増加スレ
 バ防寒ト防風トノ設備全ク絶無トナリ殆ンド冬期ノ住居ニ堪ヘザルニ至ル可ケ
 レバ此ノ如キ策ハ都會ノ人士ガ當地方ニ於ケル冬期ノ状態ヲ知ラサル机上ノ空
 論ニシテ決シテ當地方ニ於テ實行セラレ得可キモノニ非ス然ラバ光線ノ射入ヲ
 妨ケズシテ充分ナル防寒ノ目的ニ適シタル家屋ヲ建築セバ可ナルガ如キモ此ノ
 如キ家屋ハ歐洲風ノ建築トナスニ非スンバ其目的ヲ達スルコト能ハザレバサラ
 デダニ生活難ヲ訴ヘツ、アル本郡ノ各村ニ向ヒテ此ノ如キ建築ヲ強フルニ至リ
 テハ殆ンド一箇ノ架空的空論ニ過ギザルモノト云ハザル可カラス

林田代及ビ其他ノ諸氏ハ當地方ニ於ケル家屋建築ノ状態ヲ以テ非常ニ換氣不
 良ナルモノ、如ク思考シタル結果孰レモ豫防法トシテ換氣ヲ良ナラシムルコト
 ニ注意セシガ如キモノノ見ル所ニヨレバ當地方ノ家屋ハ日光ノ射入コソ不良ナ
 レ空氣ノ流通ハ毫モ不良ナルコトナキモノ、如シ本邦家屋ノ建築法及ビ建築材
 料ヲ知ルモノニハ何人ト雖ドモ着目シ得可キ所ニシテ殊ニ當地方ニ於ケル家屋
 ガ其屋根ノ茅藁葺ナル壁ノ薄クシテ氣孔性ニ富メル窓若クハ障子ノ状態床板ノ

敷キ方床下ノ囲ヒ方及ビ扉窓ニ於ケル裂孔多キ等ヨリ推定スレバ縦令詳細ナル換氣試驗法ヲ施サハルモ直チニ換氣ノ極メテ可良ナルヲ認定シ得可ク換氣不良ト云フヨリモ寧ろ隙風ノ吹入ニ因スル衛生上ノ有害作用ノ有無如何ノ關係ニ想到セサル可カラザル可シ故ニ若シ當地方ノ家屋ヲシテ今ノ状態ヨリモ一層換氣ノ良ナル様改良シタランニハ屋内ニ住スルモノハ冬期ニ於ケル寒氣ニ堪ヘザルニ至ラン即チ予ハ上記諸氏ノ意見ト異ナリ當地方ニ於ケル家屋ノ換氣ニ就テハ毫モ注意ヲ要セザルモノト認ム

歐洲ニ於テハ人工養育法ヲ以テ佻僂病ノ誘因ト見做シ之レガ豫防法トシテ母乳若クハ乳母ノ乳ヲ以テ哺育ス可キコトヲ勸告スレトモ既ニ論ジタルガ如ク當地方ニ於ケル慣習ハ母乳育兒ニシテ人工養育法ヲ取ルモノハ頗ル少ナケレバ此點ニ就テモ亦毫モ改正ス可キ要アルコトナシ只當地方ニ於テハ母乳ヲ與フルニ餘リニ永キニ失スルノ缺點アリ只日本婦人ノ常習ナルモスノ如キ疾病アル地方ニアリテハ此點ハ母兒兩方ニ向ヒテ不良ナル關係ヲ及ボス可ケレバ大ニ注意スルノ價值アルモノト信ズ

其他食物ノ改良肉食ノ獎勵ニ就イテ之レガ實行如何ハ經濟上ノ點ヲ顧慮セサル可カラザルハ勿論ナレバ當地方ノ如キ男女共ニ夜間ノ副業ニ従事スルニ非ンバ現今ノ如キ程度ノ食物ヲサヘ攝取スルコトヲ得ザル生活程度ナル本郡ノ各村ニ向ヒテ此ノ如キ策ヲ建ツルモ毫モ實行セラル可キモノニ非ズシテ全ク一ツノ空論ニ終リ畢竟難キヲ人ニ責ムルノ譏ヲ免レザル可シ既ニ論述セルガ如ク本病ノ原因ハ今日ニ於テ全ク不明ニ屬スルヲ以テ從ヒテ正確ナル豫防法ヲ案出スルコト極メテ困難ナレバ最モ根本的ノ方策ハ先ツ本病ノ原因ヲ討究ス可キ研究機關ヲ氷見郡ノ最モ患者多キ地方ヲ擇ビテ設立シ專ラ先ヅ其原因ヲ調査スルヲ急務トス然レドモ縦令幸ニシテ此ノ如キ研究機關ヲ設立スルノ運ヒニ至ルトスルモ之レガ原因ヲ發見シ得可キ時日ハ果シテ何レノ日ニアリヤ全ク不明ナレバ其レマデノ間ニ於テハ止ムヲ得ズ姑息的豫防法ヲ實行シテ幾分カ本疾病ノ發生ヲ減弱セシムルノ手段ヲ取ラザル可カラザルハ勿論トス

當郡地方ニ於テ恐ラクハ實行シ得ラル可キモノト信ズル豫防方策トシテ予ノ爰ニ提供ス可キハ大約左ノ三策トス

甲、予ノ最モ有效ニシテ殆ンド本病ノ住民ヲ該疾病ヨリ免レシムルコトヲ得可
 キモノト信ズル方策ハ本郡各村少クトモ患者ヲ有スル村落ノ住民ヲ悉ク或ル他
 ノ地方ニ移住セシムルニアリ元來尙僂病及ビ骨軟化病ハ其居所ヲ轉ズルコトニ
 ヲリテ治癒スルコトハ成書及ビ文献ノ之レヲ證スル所ニシテ獨リ此兩症ニ於テ
 然ルノミナラス其他ノ地方病性疾患例令バ麻拉里亞十二腸蟲病二口蟲病及ビ脚
 氣等ノ如キモノニアリテモ之ガ罹病ヲ豫防スルニハ該地方病性ノ土地ヲ離ル
 コトヲ以テ最モ確實ナリトスルハ人ノ熟知スル所ナレバ本郡ノ住民ヲ此兩症ニ
 罹ル可キコトヨリ救治スルハ移住策ヲ措キテ他ニ良法ナシトイフモ不可ナルコ
 トナシ殊ニ原因論ノ章下ニ於テ記述セルガ如ク本郡ハ其人口ノ比例ニ於テ田畑
 ノ面積非常ニ少ナクタメニ農ヲ本業トスル本郡ノ住民ニ對シテ非常ナル生活難
 ヲ與ヘ夜間ノ副業ニヨリテ辛フシテ其糊口ヲ營ムコトヲ得ルニ過ギス故ニ前記
 統計表ノ示ス如ク本郡ノ各村ニ於テ年々北海道及ビ其他ノ地方ニ移住ヲ企ツル
 モノ増加スル傾向アルノ際ナレバ今ヤ爰ニ斷乎タル計畫ヲ立テ各村全體ノ住民
 ヲ北海道若クハ其他適當ナル地方ニ移シテ其所ニ第二ノ氷見郡ヲ建設セシムル

コト恰モ大洪水ノタメニ土地ヲ失ヒシ大和國十津川郡ノ住民ヲ悉ク北海道ニ移
 シテ十津川郷ヲ立テシ如クナスヲ可トス而シテ現今ノ田畑ハ他ノ有利ナル方法
 ニ變用シ稍遠隔セル住民ヲシテ之レヲ支配使用セシム可シ

予ガ此建策ハ頗ル大膽ニシテ必ズ幾多ノ方面ヨリ批評非難ノ聲アラシム予ノ信
 ズル所ニ據レバ本郡ノ住民ヲ此慘酷ナル地方病ヨリ救治スルニハ此方策ヲ以テ
 最モ確實ナリト信ズ然レドモ此考案ハ予ガ學術的見地ヨリ主案シタルモノニシ
 テ實際的當局ノ行政的關係ニ於テ今日直チニ此ノ如キ英斷ヲ實行シ得可キモノ
 ナリヤ或ハ又本郡ノ住民ガ悉ク之レニ賛同シテ斷然移住ノ決心ヲナシ得ルヤ否
 ヤニ就テハ素ヨリ予ノ關知スル所ニ非ス

乙、第一ノ全移住策ヲ行フコト能ハサラバ止ムヲ得ズ第二策トシテ本郡ノ住民
 ニ對シ季節的移住 *Zeitliche Finwanderung* ノ法ヲ勸告ス當地方ハ冬季間即チ十一月ノ
 下旬ヨリ三月初旬ニ至ルマデハ所謂冬籠リノ季節ニシテ此期間ハ陰雲天ヲ蔽ヒ
 テ雹雪絶ヘズ降り日照時間極メテ少ナク寒風凜冽ニシテ屋外ノ作業ニ適セズ舉
 リテ雪除ヲ閉ラシ窓扉ノ雨戸ヲ密閉シタル暗黒ノ屋内ニ蟄居シテ僅少ノ作業ヲ

營ムニ過ギザレハ一年間ニ於テ此季節ガ最モ當地方ノ住民ニ不衛生ノ感動ヲ與フルモノト云フ可シ故ニ此季節間各村ノ住民ハ舉リテ他ノ暖地ニ出稼シテ各相當ノ職業ヲ營ミ春風吹キ渡リテ氷雪融解スルノ候ニ至ルヲ俟チテ再ビ歸來シ田畑ノ作業ニ從事ス可シ此ノ如キ方法ヲ講スレバ一ツハ冬期間ニ於ケル最モ不健康ナル感動ニ遠カルコトヲ得ルト共ニ一ハ出稼ノ勞働ニヨリテ得タル勞銀ニヨリ幾分カ其レニヨリテ生活難ヲ除クコトヲ得ルノ便益アレバ種々ナル方面ヨリ本病豫防ノ目的ヲ達スルコトヲ得ン此方策ハ第一ノ移住策ヨリモ寧ロ大ニ實行シ易ク而モ其效果又著ルシカラント信ズ蓋シ此ノ如キ季節間出稼ハ二三ノ地方ニ於テハ既ニ實行セラル、ヲ見ル例令ヘバ冬期間丹波地方ノ男子ガ灘地方ニ造酒ノタメニ出稼シ加賀白山々麓ニ於ケル牛首地方ノ如キハ冬期間積雪殆ント軒ニ達スルヲ以テ其住民ハ冬期間家ヲ閉サシテ各地方ニ出稼スルガ如シ

丙、季間出稼ノ法モ尙ホ實行スルコト能ハザランニハ爰ニ第三策トシテ尙一方策アリ他ナシ本地方ヲ半工業地トナスニアリ即チ夏期間ハ現狀ヲ維持シテ専ラ農作ニ從事セシメ冬期間冬籠リノ季節ヲ利用シテ或ル工業ノ授産ヲ企圖スルニ

アリ當地方住民ノ云フ所及ビ副業調査ノ表ニヨルニ當地方ニ於テ最モ盛ニ行ハル、ハ疊表ノ織杼ナリ而シテ現在ノ狀態ニアリテハ只個人的ニ極メテ單簡ナル杼織機ヲ以テ織リ出スニ過ギザレハ收益ハ勞力ノ割リニ多カラズ故ヲ以テ本郡内ニ於ケル便利ノ地ニ三ヶ所ヲトシテ共立的若クハ縣立的ノ織杼場ヲ建テ(勿論防寒ト光線射入ニ適シタル)新式ノ機械ヲ据エ附ケ冬期間ニ於テハ各戸ノ男女ヲ此所ニ集メテ織杼ニ從事セシメ或ハ狀況ニヨリテハ夏期ト雖ドモ農業ノ閑繁ニ應シ作業セシムルモ可ナリ此ノ如クスレバ一面ハ冬季ニ於テ雪除ケヲ以テ圍繞シタル不健康ナル一個人的ノ家屋ニ終日籠リヲナス惡習慣ヲ除キテ光線ノ射入良キ工場内ニ作業スルヲ得ルノ利益アルト共ニ收得モ亦非常ニ増加シ從ヒテ生活難モ亦幾分カ軽減セラル、ニ至ル可ク兩者相俟チテ本病ノ蔓延ヲ減少スルコトヲ得可シト信ズ其他行政上ノ手段トシテ注意ス可キハ各村ニ學識アル醫師ヲ配置スルヲ急務ナリトナス

子ガ踏査スル所ニヨレバ本郡各村落ハ良醫師ノ配置頗ル不良ナリ(勿論僻村ノ常トハイヘトモ)若シ以前ニ於テ良醫師ノ配置ニ注意シタランニハ佝僂病及ビ骨

軟化病ノ如キ地方病の蔓延ハ既ニ久シキ以前ニ我醫學社會ノ問題トナリシヤ疑ヲ容レズ從ヒテ各村住民ノ蒙リシ利益非常ナルモノアリシナラン而シテ此ノ如キ僻村ニ良醫師ノ來往ヲ求ムルハ素ヨリ無理ナレバ臺灣公醫ノ制度ヲ採用スルカ若クハ縣費ヲ以テ相當ノ補助ヲ與(村費ニテ補助ヲナスコトハ今日ノ如キ收入ノ狀態ニテハ不可能ナリ)ヘテ各村平等ニ配置開業セシムルヲ可トス元來一地方ニ於ケル地方病ノ發生アルニ當リテ之レガ研究及ビ豫防撲滅ニ要スル經費ニ對シテハ縣費若クハ望ムラクハ國費ヲ以テ之レヲ支辨ス可キハ勿論トス

第七章 該病ノ治療法

之レヲ成書及ビ文献ニ徵スルニ本病ニ對シ特異療法 *Specific Therapie* アルコトナシ而シテ何レノ點ヨリ論ズルモ本病ヲ其初期ニ於テ確定シ可及的速ニ適當ノ療法ヲ行フヲ最トモ必要トス病機増進セルモノニアリテハ加療ノ奏功極メテ緩慢ナルカ或ハ全ク不可能ナルコトアリ初期ノ療法トシテ最モ效ヲ奏スルコト多キハ一般ノ營養的療法ト衛生的所置ニシテ其詳細ナル方法ニ就イテハ爰ニ論ズ

ル必要ヲ見ズ

佝僂病ハ其初期ニ於テ大抵胃腸障害ヲ併發シ若クハ之レヲ其前驅症トナスモノナレバ此ノ如キ症狀アル小兒ハ極メテ注意シテ其病症ヲ鑑視シ佝僂病ノ初徴ヲ發セザルヤ否ヤヲ調査シ且ツ速ニ適當ノ所置ヲ施シテ其胃腸症ヲ治療セシム可シ凡テ虛弱ニシテ胃腸障害アリ佝僂病ヲ發スルノ疑アル患兒ハ直チニ居ヲ海濱ニ轉ジテ加療セシムルヲ最モ適當ノ法トスレドモ氷見郡ノ各村ニ於テハ一般ニ此ノ如キ方法ハ實行シ得ラル可キ望ナシ

既ニ本病ノ症候ヲ發シ來リタルモノニアリテハ營養療法ノ他ニ固有ノ藥物的療法ヲ施ササル可カラズ而シテ本病ニ對スル藥物的療法トシテ以前ヨリ種々ナル藥品試用セラレシモ今日ニ至ルマデ著明ノ奏功ヲ實驗シタリシモノナキガ如シ而シテ本病ノ本能ガ骨質ノ石灰鹽類沈着ノ缺乏ニ存スルコトヨリ推定シテ石灰鹽類ヲ藥物トシテ與フレバ可ナラントハ何人ト雖トモ直チニ想到スル所ナレバ既ニ古ヘヨリ石灰鹽類ヲ試用セシモノ頗ル多シ然レトモ本病ハ元來食物中ニ於ケル石灰鹽類ノ缺乏ニヨリテ起ルモノニアラザレバ藥物トシテ石灰鹽類ヲ與

フルモ奏功ス可キ理由ナシ現ニリユーゲル Reibel (335) ガハイデルベルヒ大學ノ藥物學教室ニ於テ施行シタル詳密ナル新陳代謝試験ノ結果ニヨルモ本病ニ對シテ石灰鹽類ノ無効ナルコトハ明瞭ナリ而テ石灰療法トシテ古昔ヨリ賞用セラレタル磷酸石灰ノ如キモ其吸收セラル、コト僅少ニ過ギズ(リユーゲル同上)石灰水ノ如キハ殊ニ石灰ノ含量少ナク一食匙ノ石灰水中僅ニ〇、〇二ノ水酸化石灰ヲ含ムニ過ギザレバ何レノ點ヨリ云フモ賞用ス可キモノニ非ス只炭酸石灰ハ今日ニ至ルマデ之レヲ用ユルモノ多シ肝油ハ之レニ反シ本病ニ對シ奏功著明ナルガ如シフイヤオルト Vieroldt (336) ノ如キハ口ヲ極メテ肝油ヲ賞用ス殊ニ Baels (337) ガ本邦ニ於ケル佝僂病ノ絶無ヲ唱ヘシヨリ歐洲二三ノ學者ハ之レガ原因ヲ肝油ニ富メル魚肉ヲ常食トナスコトニ歸着セシヨリ肝油ノ聲價益發揮セラレタルモノ、如シ而シテ其奏功スル原因トシテ或ハ此中ニ特異ノ成分一種ノ臟器療法ヲ含有スルニ據レリト説キ或ハシエデル Shawde (338) ハ其脂肪含量ニ歸着セシム可キコトヲ主唱スルモノアレドモ予ノ推考スル所ニヨレバ其奏功ノ理由ハ蓋シ身體ノ營養ヲ佳良ナラシムルニ過ギザルモノナラン

次ニ使用セラル、ハ磷製劑トスカツソーウイッツ Kassowitz (336) 及ビウエグネル Wegner (340) ノ實驗ニヨルニ磷製劑ヲ以テ飼養シタル動物ハ其石灰化シタル軟骨中ニ竄入セル髓腔甚ダ小ニシテ其數少ナキヲ以テ磷製劑ハ軟骨内ニ於ケル血管ノ蔓延及ビ形成ヲ妨グル作用アルモノト推定シ佝僂病ノ本態ガカツソーウイッツ Kassowitz 同上)骨形成組織内ニ於ケル異常血管形成ニ他ナラザルモノト信ズルヨリ此點ニ對シテ磷製劑ハ上記ノ動物試験ノ結果ヨリ推スモ最トモ有效ナルコトヲ證據立ツルコトヲ得可シトナスモノ、如シカツソーウイッツ Kassowitz (341) ハ此ノ如キ理想ヲ以テ卒先本病ニ對シテ磷製劑ヲ試用シ卓效ヲ得タル旨ヲ記載セリ磷製劑殊ニ之レヲ肝油中ニ混ジ所謂含磷肝油トシテ用ユルコトハ今日ト雖トモ諸家ノ稱賛スル所ニシテ患者ノ胃腸健全ニシテ能ク之レニ耐フルコトヲ得バ賞用ス可キ價値アルモノト認ム殊ニ Rey (342) ノ實驗ニ據ルニ佝僂病患者ニ含磷肝油ヲ與フレバ著シク尿中ノ石灰鹽類ノ量ヲ増加スルヲ見本製劑ヲ中止スレバ尿中ノ石灰鹽類ノ量再ビ減少スルヲ見ルトイフ

其他テデシ Todeshi (342) ハ本病ニ電氣療法ヲ施シ Oppenheimer

(343)ハ本病ガマラリヤノ一種ナリトノ自己ノ所信ニ基ツキ規尼涅療法ヲ賞用スレドモ其效果ハ著ルシカラザルモノ、如シ

富山縣廳ニ於テハ今回氷見郡ニ於ケル多數ノ患者ニ健胃劑ト沃度製劑トヲ一般ニ與ヘタルカ其成績ハ稍見ル可キモノアリシガ如シ何レノ患者ト雖モ此製劑ヲ服用スルコト二三週ニ及ブ時ハ特異ノ疼痛頗ル緩解スルヲ訴フルモ其永續的結果如何ハ未ダ詳カナラス特ニ骨軟化病ノ特異療法トシテ記載ス可キ價值アルモノハ卵巢摘出術 *Castration* トス本療法ニ關シテハ歐洲ニ於ケル醫學社會ノ大問題ナレバ予ハ今爰ニ其大勢如何ヲ記述シ終リニ予ガ實驗セル成績ヲ根據トシテ聊カ詳論ヲ試ミントス

産褥性及ビ妊娠性骨軟化症婦人ノ運命ハ實ニ慘憺タルモノニシテ近時ニ至ルマデハ醫學社會ノ手ハ不幸ナル病婦ヲ此慘憺タル疾病ヨリ救治スル一方法ヲダニ有セザリキリツツマン *Litzmann* (344) 及ビ *ベンニッホ Hennig* (345) 等ノ統計ニ據ルニ該患者ノ八十布仙ハ死ニ陥ルヲ免ルコト能ハザルモノニシテ其死因ノ一部ハ本病ニ因スル狭窄骨盤ニ於ケル分娩障害ニ原因シ一部ハ本病自己ノ進行スル

ニ因ス

妊娠性骨軟化病患者ニ就キテ其分娩障害ニ因スル母體ノ危險ト胎兒ノ生命トヲ併セテ救治ス可キガタメニ始メテ企テラレタルボルロ *Porro* (346) 手術ハ實ニ骨軟化症ノ治療法ニ一紀元ヲ作りシ源ニシテ即チ該手術ヲ行ヒテ若シ幸ニ其結果佳良ナレバ術後骨軟化症ノ症狀著シク輕快シ或ハ全ク治療スルコトノ一新事實ハ婦人科醫ノ注目スル所トナリ殊ニ有名ナル婦人科醫樞密醫官教授フエ「リンド *Reiling* (347) ハ此事實ヨリ推及シテ骨軟化症ニ卵巢摘出術 *Castration beider Ovaria* ヲ施サバ必ズ效果アル可キヲ信ジ千八百八十六年遂ニ其理想ヲ實行スルノ機會ヲ得テ始メテ之レヲ骨軟化症ニ試用シテ驚ク可キ卓效ヲ得タリキ即チ氏ガハイデルベルヒ府ニ開カレタル第六十二回獨逸萬有學會ノ席上ニ於テ報告セシ所ニ據レバ術後二十四時間乃至四十八時間ニシテ骨痛殊ニ胸部及ビ骨盤部ノ疼痛著シク緩解スト云フ而シテ同會ニ於テホッフア *Hoffa* (348) 及ビウケンケル *Winkel* (349) モ亦該手術ニヨリテ治癒シタル骨軟化症患者ノ各一例ヲ報告セシヨリ益々諸學者ノ注目スル所トナリ且ツミュレル *Muller* (350) ツワイフェル *Zweifel* (349) 等

相續イテ其效果ヲ説キホーフマイエル Hofmeier (350) ブラウン Braun (350) リホツキ
 | Lihotky (351) トールン Thorn (352) ヴェリトス Velits (353) ブッシュ Busche ハッデン
 ハウゼン Haddenhausen (354) フェゾン Fawson (356) 等モ亦何レモ該術ヲ試用シテ其效
 驗ヲ認メシヨリ爾來今日ニ至リテハ卵巢摘出術ハ骨軟化症唯一ノ治療法トシテ
 一般學者ノ信認ヲ得殆ンド凡テノ成書ニ其有效ナルコトヲ記載セラル、ニ至レ
 リ只ウインケル (357) 一派殊ニゲルブケ Gelbke (358) ハフェーリング Fehling (359) 等
 ガ該術ヲ以テ殆ンド特效的ノ效果アルモノト認ムルニ反シ該術ハ只疼痛等ヲ輕
 快シ諸症ヲ一時的減退セシムルノミニシテ毫モ終局的治癒ノ效アルモノニ非ラ
 ズト主唱スルヲ異ナレリトス

此ノ如ク卵巢摘出術ガ今日ノ醫學社會ニ於テ骨軟化症ニ對スル唯一ノ療法トシ
 テ承認セララルニ至リシハフェーリングノ效績ナリト雖トモ畢竟卵巢摘出術ナ
 ルモノヲ種々ナル方面ヨリ研究シ之レヲ婦人科治療法上ニ於ケル獨立のノ一手
 術トナシタルハ恩師ヘーガル Hegar (360) ノ恩惠ニシテ今爰ニ骨軟化症ニ於ケル
 卵巢摘出術ノ效果ヲ論ズルニ當リテ特ニ師ノ名ヲ記シテ之レヲ後世ニ傳ヘサル

可カラズ

此ノ如ク骨軟化症ニ於ケル卵巢摘出術ノ有效ナルコトハ偶然ニボルロ手術ニ
 ヨリテ發見セラレ今日ニ於テハ骨軟化症ノ療法中殆ンド唯一ノ位置ヲ占ムルニ
 拘ラズ其如何ナル理由ニ據リテ奏功スルカノ問題ニ至リテハ未ダ全ク明ナラズ
 而シテ既ニ本態論ノ條下ニ詳記シタルガ如クフェーリング Fehling 一派ノモノハ
 骨軟化症ニ卵巢摘出術ノ有效ナルコトヨリ逆マニ歸納シテ卵巢ノ病變ヲ以テ本
 症ノ原發的原因ナリト主唱スルニ反シウキンケル Winkel 一派ノモノハ卵巢摘出
 術ニ因スル身體營養ノ増進ヲ以テ該術ノ效驗ヲ説明セントシ或ル者ハ卵巢ト骨
 質トノ間ニ於ケル親密ナル營養的關係ヲ以テ之レガ原因ト説キ或ル者ハ其效果
 ヲ卵巢ト身體ノ隣經濟トノ間ニ於ケル一種特異ノ關係ニ歸セントスル等此問題
 ニ關スル歐洲諸學者ノ意見未ダ一ニ歸着セザルヲ見ル要スルニ其理論上ノ問題
 ニ就キテハ此ノ如ク未定ナルニ拘ラズ其成績ノ良好ナルコトニ就テハ何人モ之
 ヲ非認スルコトナシ然レドモ骨軟化症ニ對シ卵巢摘出術ヲ絶對的の唯一ノ治療法
 ト主唱スルフェーリング一派ト之レニ反シ只疼痛及ビ全身症ヲ比較的輕減スル

ニ過キサルモノト信スル彼ノウキンケル一派トノ間ニハ本病患者ニ該術ヲ施ス可キ時期如何ニ就キ論争アルヲ免レズ元來卵巢摘出術ナルモノハ婦人ノ胚種腺ヲ脱去スルモノナレバ該術ヲ行ハレタル婦人ハ以後絶對的ニ不妊 Sterilitaet トナリ國家及ビ家庭ニ對スル生殖力ヲ失フニ至ルモノナレバ婦人ニ對シ該術ヲ施スハ管ニ該婦人ノ生涯ニ對スル大問題ナルノミナラズ國家ニ對シテ又重大ナル意義ヲ有スルモノト云フ可シ故ニフエーリング一派ノ唱フル如ク果シテ該術ガ骨軟化症ニ向ヒテ絶對的ニ終局ノ效驗アルモノナランニハ家庭及ビ國家ニ對スル重大ナル意義ノ如何ヲ顧ミルニ遑アラズ斷然之レヲ決行シテ可及的速ニ該患者ヲ此慘憺タル病魔ノ手中ヨリ救ハザル可カラザルハ勿論ナリト雖ド若シ該術ガタシカ有効ノモノニ非ザルニ於テハ該術ヲ施スニ極メテ慎重ノ態度ヲ取ラザル可カラサルハ何人モ否定スルコト能ハザル可シ故ニ歐洲ノ諸大家モ此重大ナル問題ニ關シテハ今日ト雖モ慎重ナル苦慮ヲ拂ヒツ、アルモノ、如シ

フエーリング Fehling ハ素ヨリ該手術ノ主唱者ナル立場ヨリ毫モ顧慮スルコトナク直チニ該術ヲ施行ス可キコトヲ唱ヘマルチン Martin (361) ノ如キモ亦本患者

ニ就キ著明ナル骨變形ヲ發セルニ先立チ速ニ該術ヲ行フ可キコトヲ論シ此議論ニ多數ノ贊同者アリ

デーデルライン Deckerlein (362) 及ビクレーニツヒ König (363) ノ如キハ之レニ反シ先ツ種々ナル緩和的治療法ヲ試用シ其成績何レモ無効ナリシ場合ニ於テ始メテ該術ヲ施ス可キコトヲ主張シ此ノ說ニモ素ヨリ多數ノ贊成者アリウインケル Winkel (364) ハ骨軟化症ニ卵巢摘出術ヲ行フコトニ對シテハ毫モ異義ヲ唱ヘザルモ只術後ニ於ケル治療成績ガ果シテ永續的ナルヤ否ヤヲ確定シタル後ニ非ザレハ輕忽ニ行フ可キモノニ非ズト論ゼリ

此ノ如ク骨軟化症ニ卵巢摘出術ヲ行フノ可否ニ就テハ現今既ニ決定ノ問題ニシテ何人モ之レヲ非認スルモノナシト雖モ之レヲ行フノ時期如何ニ對シテハ未ダ決定セル所アラザルナリ故ニ予ハ今回ノ機會ヲ利用シ氷見郡ヨリ子ガ病院ニ入院セシメタル患者十五例ニ就キ施行シタル卵巢摘出術ノ結果ヲ根據トシテ左ニ此問題ニ關シ聊カ卑見ヲ述ブル所アラントス

蓋シ予ガ實驗ハ僅ニ十五例ニ過ギズト雖トモ之レヲ文献ニ徵スルニ極メテ短

時日ノ間二十五例ヲ得タル如キコトハ殆ント絶無ト見做スモ不可ナケレバ此十五例ニ於ケル成績ヨリセル立論ハ歐洲學者ノ參考ニ價シ且此問題ニ關スル文献上稍注目ス可キ價値アルモノト信ズ殊ニ此中ノ一例ハ妊娠性骨軟化症ニシテ之レニホルロ術ヲ施シ母兒ノ兩者ヲ救治スルコトヲ得タルハ頗ル興味アル實驗ニシテ骨軟化症ニ於ケル唯一療法タル卵巢摘出術ノ根源ト見做ス可キホルロ術ヲ妊娠性骨軟化性患者ニ施シテ極メテ満足ノ成績ヲ得タルハ本邦ニ於テ該術ヲ應用シタル始メニシテ予ノ最モ愉快ニ感スル所ナリ其詳細ナル記述ハ既ニ予ガ助手後藤誠一(365)之レヲ報告セリ

予ガ今回ノ機會ニ於テ骨軟化症患者ニ卵巢摘出術ヲ施シタルハ凡テ十五名ニシテ今此十五例ニ於ケル成績ヲ根據トシテ骨軟化症ニ對スル卵巢摘出術ノ効果及ビ之ヲ行フ可キ時期如何ニ就キ予ガ意見ヲ開陳セントス

十五例中約半数即チ八例ハ既婚者ニシテ何レモ皆分娩ヲ經過シ殊ニ其内ノ二例(山崎、山本)ヲ除ク他ハ悉ク妊娠ノ經過中ニ於テ本病ヲ發シタルモノトス

患者ハ術後其魔醉ヨリ醒覺スルヤ皆既ニ全身諸部ニ於ケル疼痛ノ大ニ輕快セ

ルヲ告ゲ術後第二日ニ於テ身體ノ諸部ニ壓迫ヲ加ヘテ壓痛ノ如何ヲ檢スルニ術前ニ比シ著シク減退セルヲ認メ殊ニ經産婦ニ二例ノ如キハ術前ニ於テハ步行全ク不能ニシテ全身ニ劇痛ヲ感シ苦惱ノ爲メ仰臥位ヲ取ルコト能ハザリシニ術後ハ全ク安靜ニ仰臥位ヲ取ルニ至レリ術後ニ於ケル疼痛減退ノ狀況ハ諸部殆ンド平等ニシテ特別ノ部位ヲ認メザルモ重症ノモノニアリテハ大抵肋骨部ニ於ケル疼痛ハ他部ニ比シ最モ劇烈ナルヲ以テ術後ニ於ケル疼痛ノ減退ハ又肋骨部ニ於テ最モ顯著ナルノ感ヲ與フ而シテ日ヲ經ルト共ニ疼痛ハ次第ニ減退シ下肢筋肉ノ反射的強硬モ之レニ從ヒテ輕減シ跨關節ヲ伸展スルモ特別ニ疼痛ヲ感ゼサルニ至リ第二週ノ終リニ至レバ全身ノ疼痛殆ンド消失シ只僅ニ腰部ニ鈍痛若クハ倦怠ノ感ヲ自覺スルニ過ギズ術後二週ヲ經テ始メテ起立歩行ヲ許スヤ患者ハ直チニ起立歩行ヲ試ミ行步困難ノ全ク消退セルニ驚喜スルヲ見ル但シ行步ニ當リ足關節及ビ大腿ニ輕微ノ牽引様痛(山本ヨシ中村)ヲ訴ヘシモノアリ或ハ腰部薦骨部(二二例、二四例、二三例、二五例)ニ疼痛ヲ感ゼシモノアレドモ素ヨリ輕微ニシテ歩行ヲ障害スルニ至ラザリシ而シテ本病ニ固有ナル姿勢ハ歩行許可當時ニアリテ

ハ尙ホ未ダ正常ニ復セズシテ幾干カ變態ヲ貽スモ素ヨリ術前ニ於ケルガ如ク劇烈ナルモノニ非ズ行歩時ニ於ケル輕微ノ疼痛モ日ヲ經ルニ從ヒテ次第ニ輕減シ一ヶ月ノ後ニハ殆ンド全ク消失シ歩行狀態モ亦殆ンド正常ニ復スルヲ認ム

未婚者七例ニ於テモ手術ノ効驗ハ全ク既婚者ト同様ナルノミナラズ殊ニ一般ニ既婚者ニ比シ其成績佳良ニシテ術後約六週ヲ經テ何レモ快癒退院スルニ至レリ只未婚者中ノ三例ニ於テノミ(初産婦二五例、二四例、二三例疼痛全ク消失セズ行歩モ尙ホ未ダ正常ニ復セス手術ノ前後ニ於ケル患者ノ體重ト身長トヲ計測シ之レヲ對比スルコト左表ノ如シ

姓 名	術 前		術 後	
	身長	體重	身長	體重
經産婦 一八例	一四〇仙迷	十貫五百十目	一三七仙迷	十一貫九百五十目
同 一九例	一四三仙迷	九貫十目	一四四仙迷	十貫一百目

姓 名	術 前		術 後	
	身長	體重	身長	體重
同 二〇例	一三五仙迷	八貫八百五十目	一三九仙迷	九貫六百目
同 二一例	一四三仙迷	十貫四百目	一四七仙迷	十貫七百目
同 二二例	一四五仙迷	十二貫九百目	一四五仙迷	十一貫一百目
同 二三例	一四八仙迷	十貫四百目	一四五仙迷	十貫七百目
同 二四例	一四二仙迷	十貫五百目	一四三仙迷	十貫四百五十目
同 二五例	一三一仙迷	七貫八百目	一三二仙迷	九貫七百目
初産婦 一九例	一二五仙迷	身長	一二六仙迷	身長

仿護吸入法及ビ格魯刺兒内服法ノ効果如何ヲ試験セシニ吸入後若クハ内服後暫時ノ間ハ全身ノ疼痛稍ヤ輕快スルモ一定時間ヲ經レバ再ビ故ノ如キ疼痛ヲ發スルヲ認メタリ即チ此ノ如キ療法ノ効果ハ只一過性ニシテ吸入若クハ内服セシ麻酔藥ノ有効期間ニ於ケル一時的現象ニ過ギサルモノニシテ卵巢摘出術後ニ於ケルガ如ク持續的ノモノニ非ラザリキ故ニ予ハ骨軟化症療法トシテ格魯刺爾ノ内服若クハ嚼囉仿護ノ吸入ヲ稱賛スルコト能ハズ寧ろ始メヨリ卵巢摘出術ヲ行フコトヲ可ナリト信ズ而シテ患者ガ卵巢摘出術後直チニ其麻酔ヨリ醒覺スルヤ全身ニ於ケル疼痛ノ輕快ヲ感スルハ恐ラクハ麻酔藥ノ効果ナル可ク次テ麻酔藥ノ效果消失スルノ時期ニ及ンデ始メテ卵巢摘出術ノ效果現ワレ來リ引キ續キ疼痛次第ニ輕減スルモノト見做スヲ以テ至當ノ解釋ト信ス

尙ホ注目ニ値スヘキハ卵巢摘出後ニ於ケル赤血球ノ増加トス今之レヲ表示スレバ

姓名	術前ニ於ケル赤血球數	術後ニ於ケル赤血球數	術前ニ於ケル白血球數	術後ニ於ケル白血球數	術前ニ於ケル赤白血球ノ比例	術後ニ於ケル赤白血球ノ比例
----	------------	------------	------------	------------	---------------	---------------

初二三例	二八〇,〇〇〇	三三三,〇〇〇	八,〇〇〇	一,二二〇	三〇四〇	二九六〇
經二二例	三三六,〇〇〇	三三三,〇〇〇	八,〇〇〇	一,二二〇	四二〇〇	二九六〇
經二四例	三三〇,八〇〇	三三三,〇〇〇	一,〇八〇	一,〇〇〇	二九四〇	三三二〇
初二四例	二四〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	一,五二〇	一,九二〇	一五三〇	一六一〇
初二一例	四〇〇,〇〇〇	三六八,〇〇〇	一,二二〇	一,二八〇	三六〇〇	二八六〇
初二〇例	三三八,〇〇〇	三五八,〇〇〇	八六〇	六四〇	四二五〇	五四四〇
經二二例	三三六,〇〇〇	四八八,〇〇〇	一,二八〇	一,〇〇〇	二四八〇	四二〇〇
同一八例	三三八,〇〇〇	三三八,〇〇〇	一,〇四〇	一,二二〇	三三三〇	三四六〇

卵巢摘出術ハ骨軟化症ノ療法トシテ最トモ稱揚ス可キ方法タルハ予ガ十五例ノ實驗ニヨリテ既ニ明ナリト雖ドモ之レヲ行フベキ時期ニ就イテハ少シク顧慮スル所ナカル可カラズ蓋シフエーリング一派ノ說ノ如ク極メテ初期ニ於テ之レヲ行フベキヤ或ハウエンケル Winkel クレーニツヒ Krause 等ノ唱フル如ク先ヅ一般ノ療法ヲ試ミテ効ナカリシ時初メテ手術ヲ行フ可キカラ解決スルハ實ニ至難

ノ問題ニ屬ス而シテ既ニ論シタルガ如ク卵巢摘出術ハ婦人ノ生殖作用ヲ廢絶セシメ女性ノ人ヲシテ中性ノ人タラシムルモノニシテ家庭ト國家トニ對シテ重大ナル影響ヲ及ボスモノナレバ骨軟化症患者ニ就キ先ツ種々ナル平和的手段ヲ講スルモ其効ナク百方策ナキ時ニ至リ始メテ刀ヲ手ニス可キハ勿論ナリト雖ドモ一ハ現今ニ至ルマデノ經驗ニ於テハ本病ニ對スル有効ノ平和的療法ナキト一ハ骨軟化症婦人が幸ヒ或ル平和的手段ニヨリテ輕快スルコトアリトスルモ爾後若シ妊娠スレバ必ズヤ再ビ本症ヲ發スルヲ免レザルト一ハ縱令ヒ妊娠スルモ骨盤變形ノタメニ完全ノ分娩ヲ遂ケ得ザルト一ハ本症ニ罹リシ婦人ヨリ生ル、兒ハ多クハ薄弱ニシテ殊ニ尙僂病ニ罹ルコト多キ事實ヨリ論定スレバ此ノ如キ婦人ヲ生産不能トナスモ國家及ビ家庭ニ對シテ失フ所多カラザル可ケレバ骨軟化症婦人ニハ寧ろ始メヨリ卵巢摘出術ヲ行ヒテ婦人ヲ此慘憺タル病苦ヨリ救フコトヲ以テ策ノ得タルモノトナスモ不可ナカル可シ但シ此ノ如キ論定ハ本病ニ對スル有効ノ平和的療法ナキ今日ニ於テ下ス可キモノニシテ若シ他日有効ノ平和的療法發見セラル、ニ至ラバ素ヨリ初期ニ於テ此ノ如キ冷酷ナル手術ヲ斷行ス

可キモノニ非サルハ勿論トス

然レドモ又縱令ヒ上記三項ノ理由ヲ全ク除外シテ考フルモ蓋シ妙齡婦人カ慘憺タル苦惱ト醜惡ナル變態トノタメニ懊惱一室ニ屏蟄スルノ不幸ニ泣クノ場合ニ於テハ醫タルモノ之レヲ救助セントスルニ急ナルヨリ他ヲ顧慮スルノ遑ナク最モ確實ナル療法トシテ急遽刀ヲ手ニスルニ至ルハ惻愷ノ情頗ル恕ス可キノ至リニシテラツコ(Larsen, 1897)等ノ如ク骨軟化症ノ初期ニ於テ卵巢摘出術ヲ行フモノハ大罪人ナリト説破スル如キハ餘リニ冷酷ノ評トシテ蓋シ予輩ノ取ラザル所トス

明治四十年八月三十日印刷
明治四十年九月五日發行

非賣品

富山縣警察部

印刷人 中川外喜男
金澤市高岡町二番地

印刷所 中川諸版印刷所
金澤市高岡町二番地

金澤市片町十二番地
吉川嘉右衛門納

11.3.24

2043

終